



0038959-000

特220-231

婦人報国之足跡

愛国婦人会新潟県支部清算事務所・編

愛国婦人会新潟県支部清算事務所

昭和17

AGH

420
249

婦人報國之足跡

愛國婦人會新潟縣支部

1 特220
231

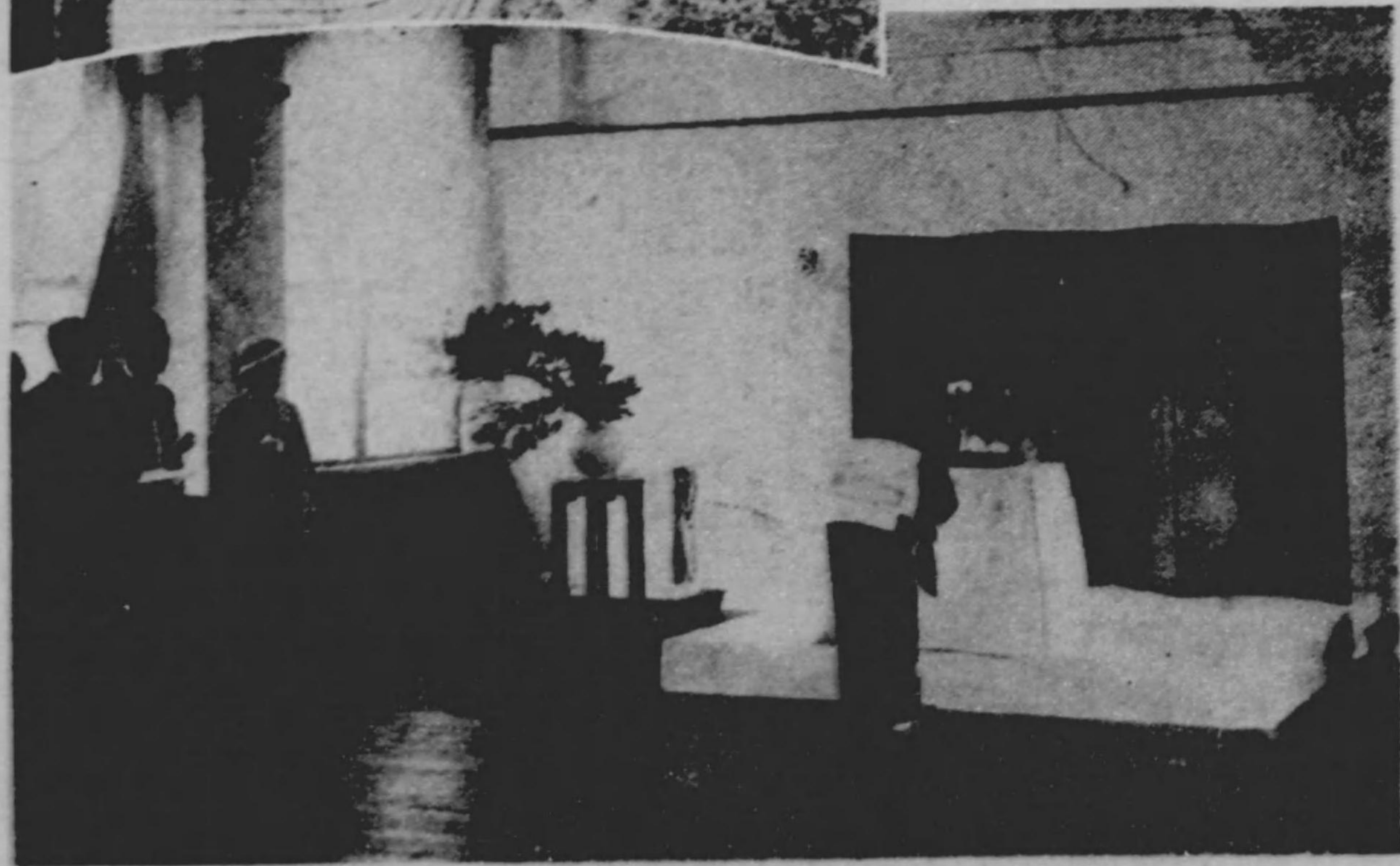


婦
人
報
國
之
足
跡

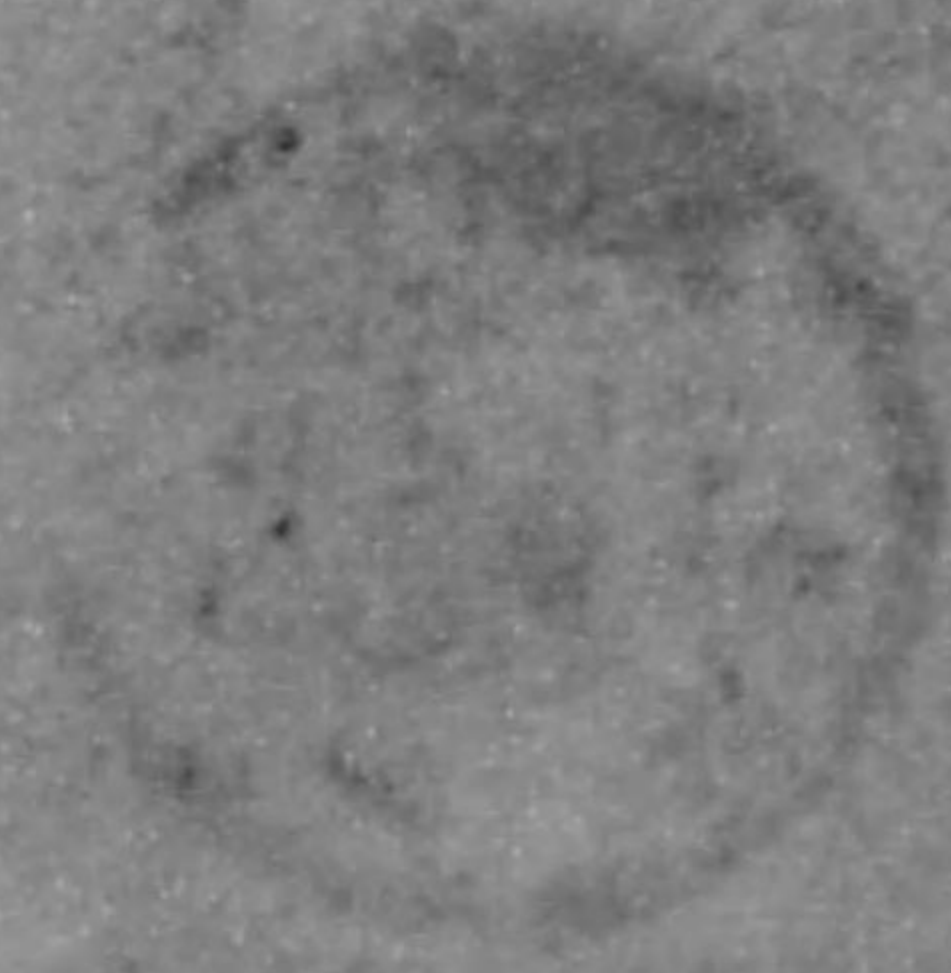




☆本部總會の輝く光榮☆
畏くも
皇后陛下行啓遊ばさる



☆第三回支部總會の光榮☆
—總裁殿下より有功章を御親授せらる—

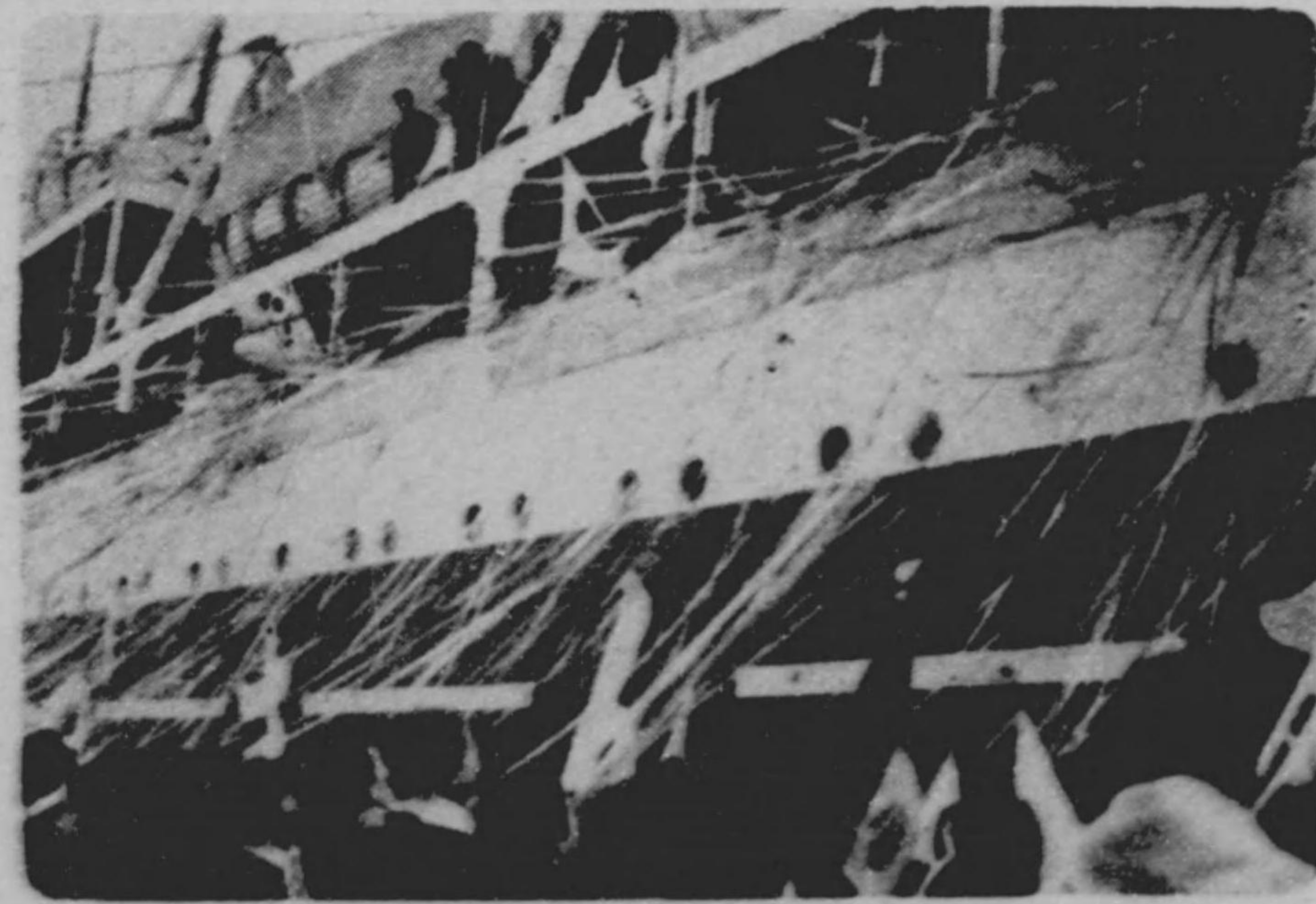


支部役員活動状況 (其の一)



重要任務を帯び出發せんとする
將兵の接待

新田港埠頭に於ける土の戦士凱還



久慈參與



土居顧問



土居支配長



塚田主事



久慈副長

☆ 支部役員活動状況 (其の二) ☆



第一戦將兵に贈る真綿（會員の赤誠により集りたるもの）の整理作業



同上 慰问袋調製作業



會員の百度詣り戦捷祈願

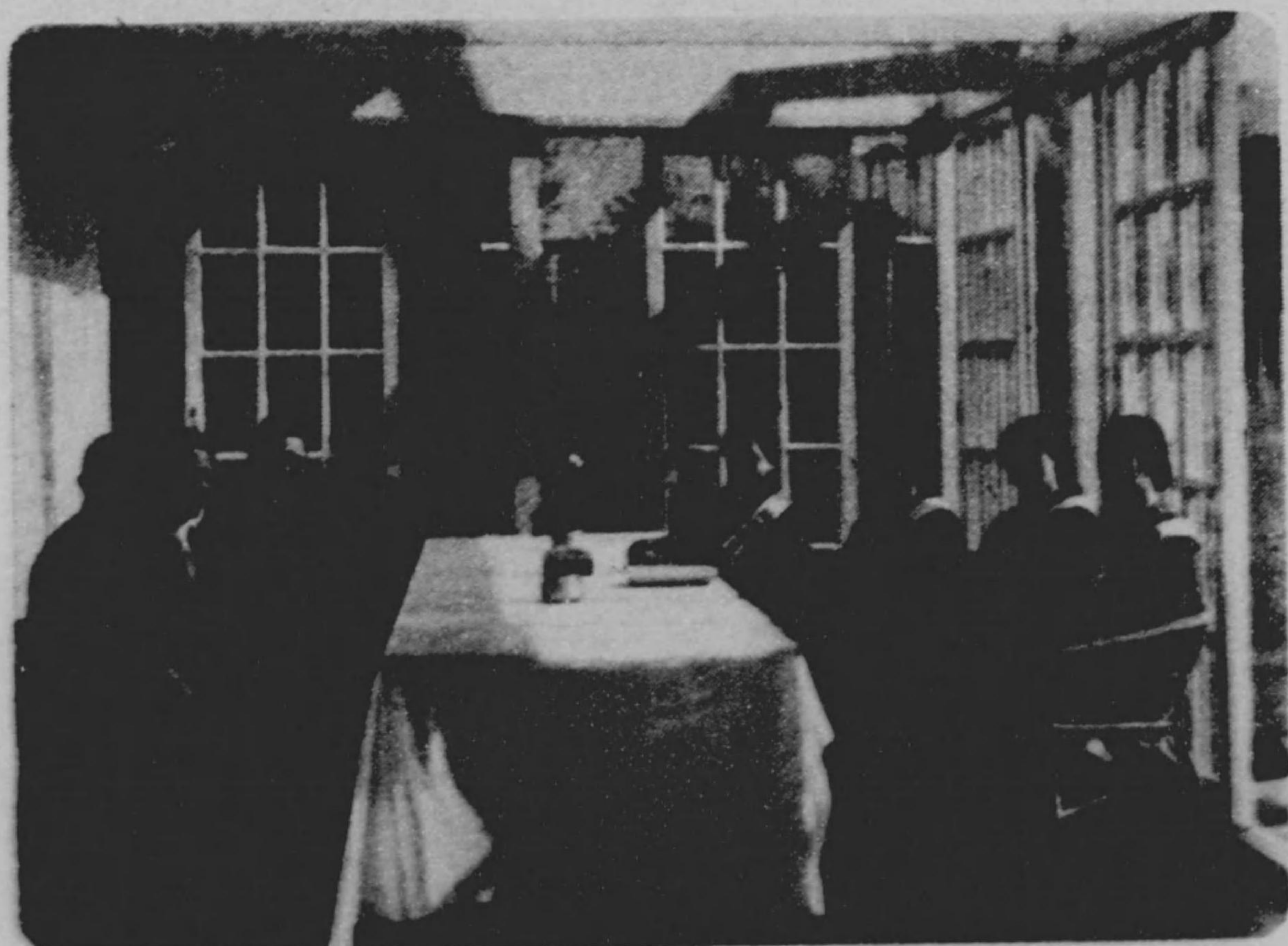
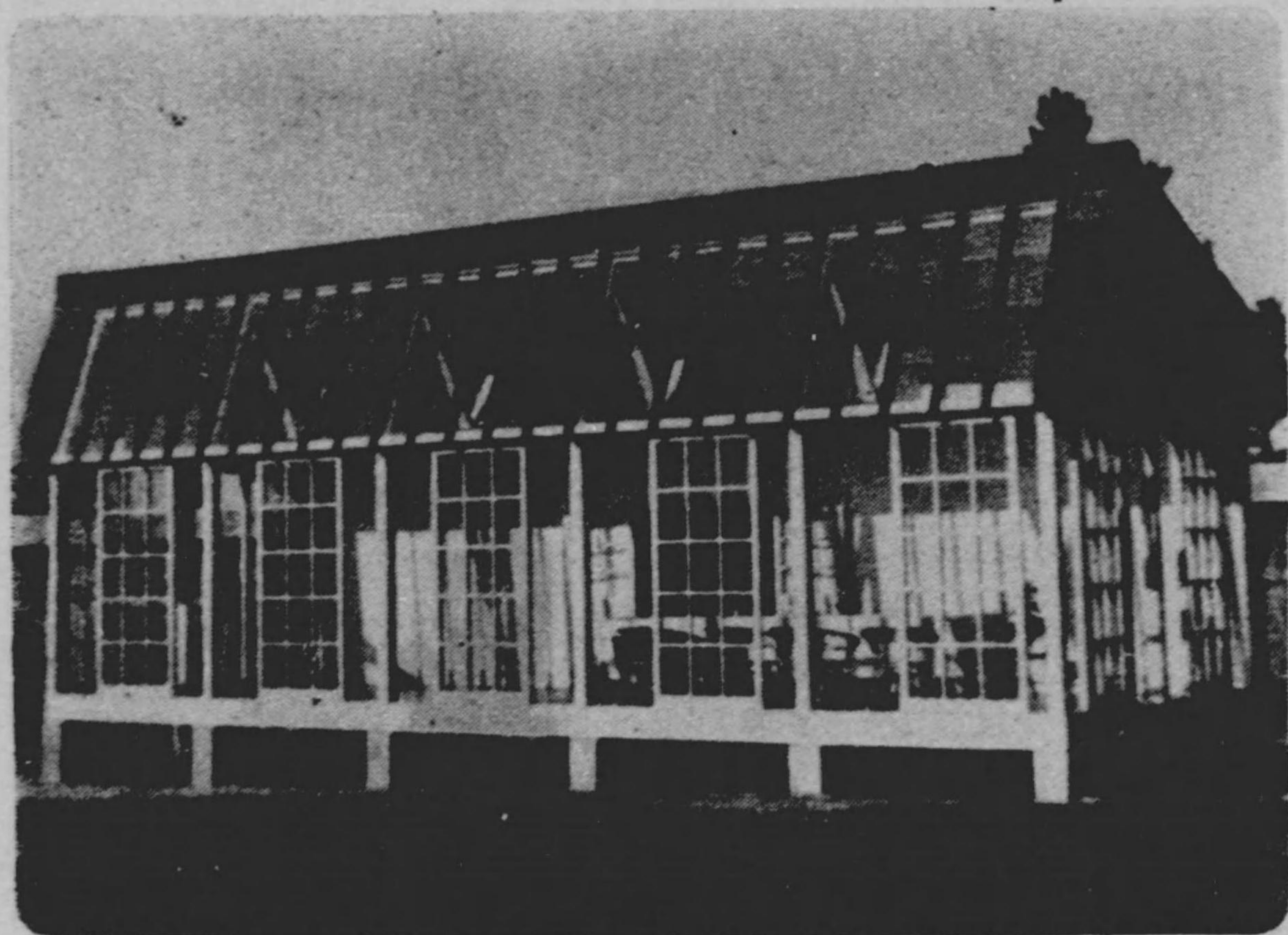


石巻陸軍病院に傷兵慰問



農繁期託児所に於ける會員の奉仕

縣下三陸軍病院に献納したる日光浴室



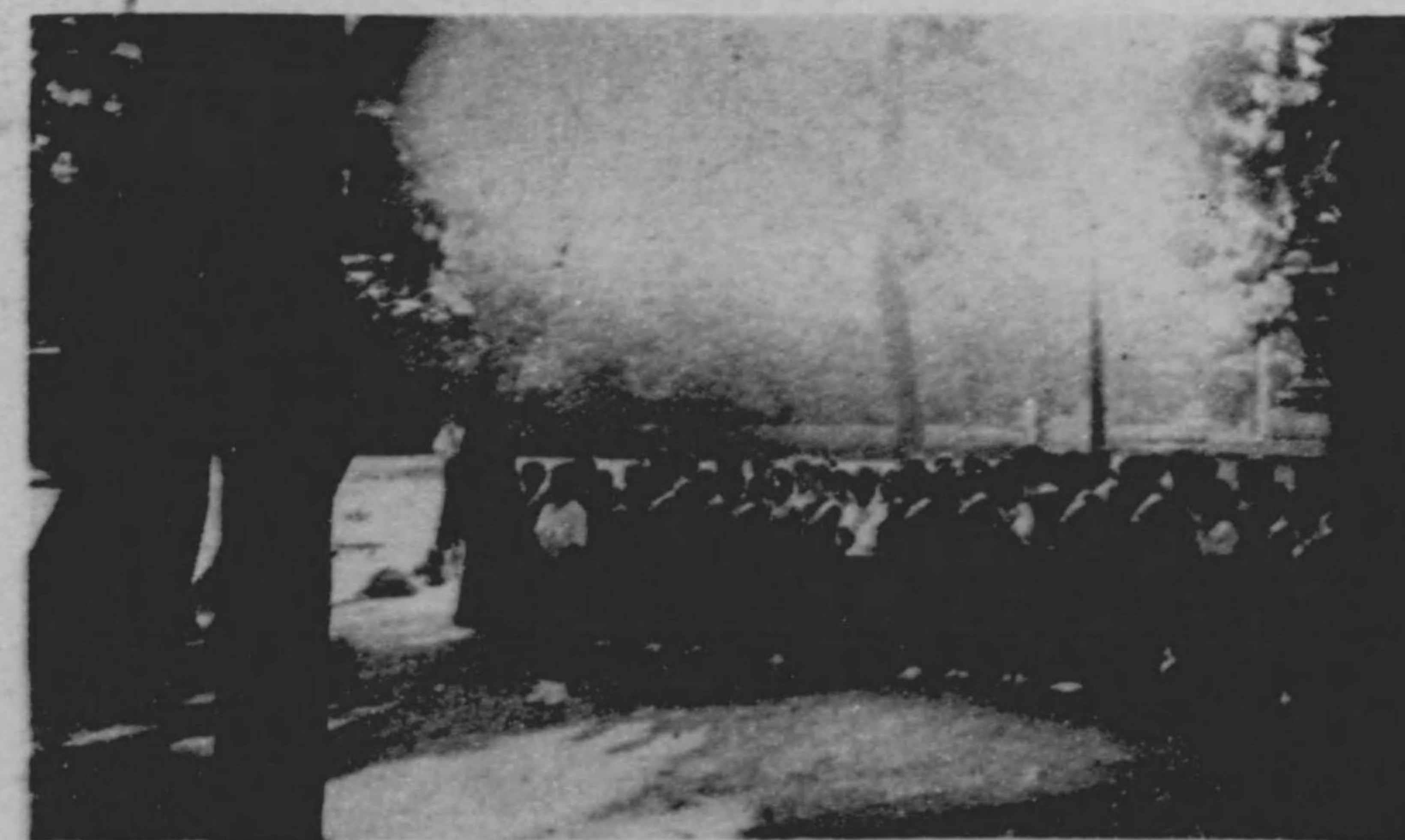
婦人報國祭の光景



新潟保育所に於ける
日の皇子御祝ひ日奉祝式

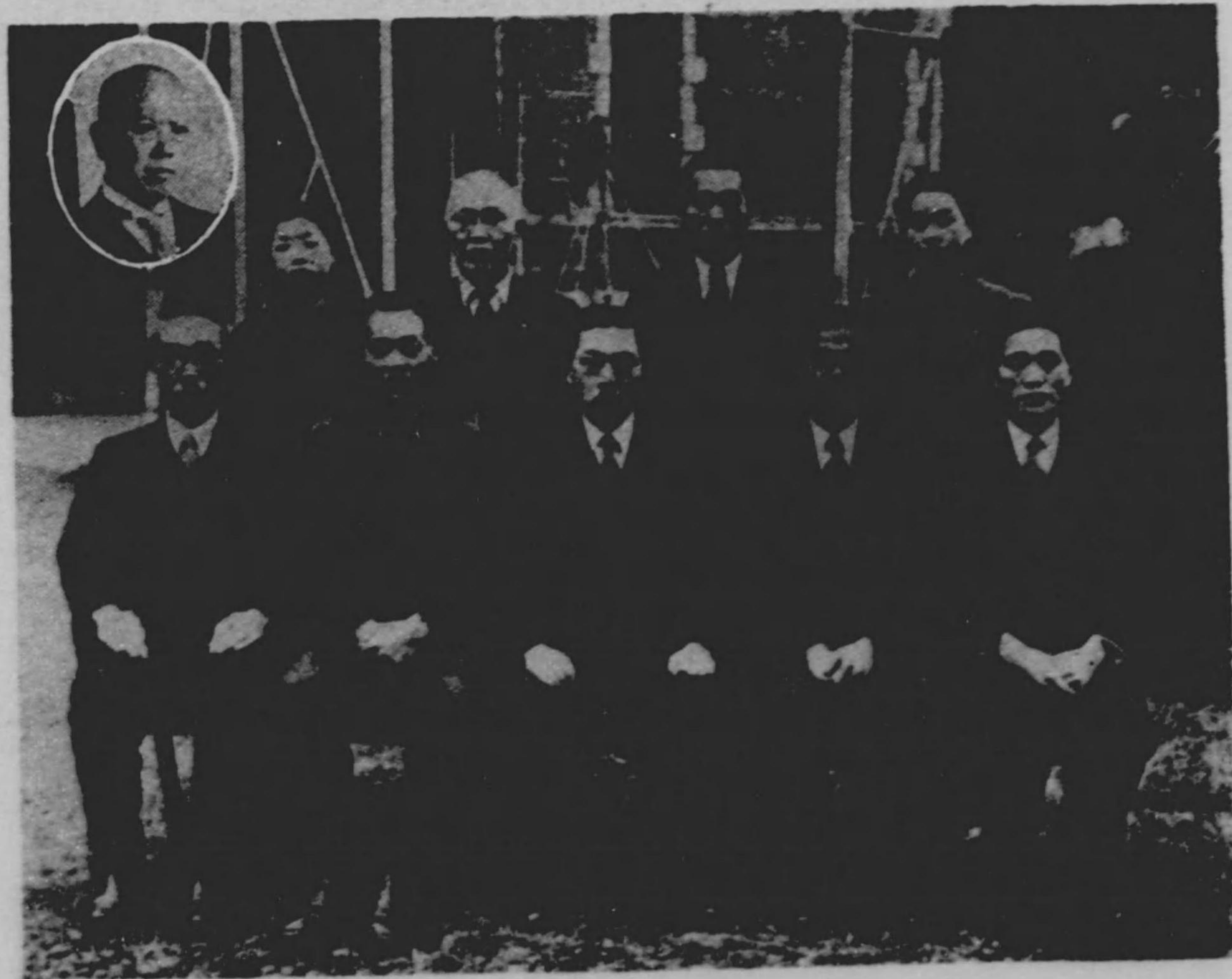


中堅幹部講習所の行事(神社参拜)

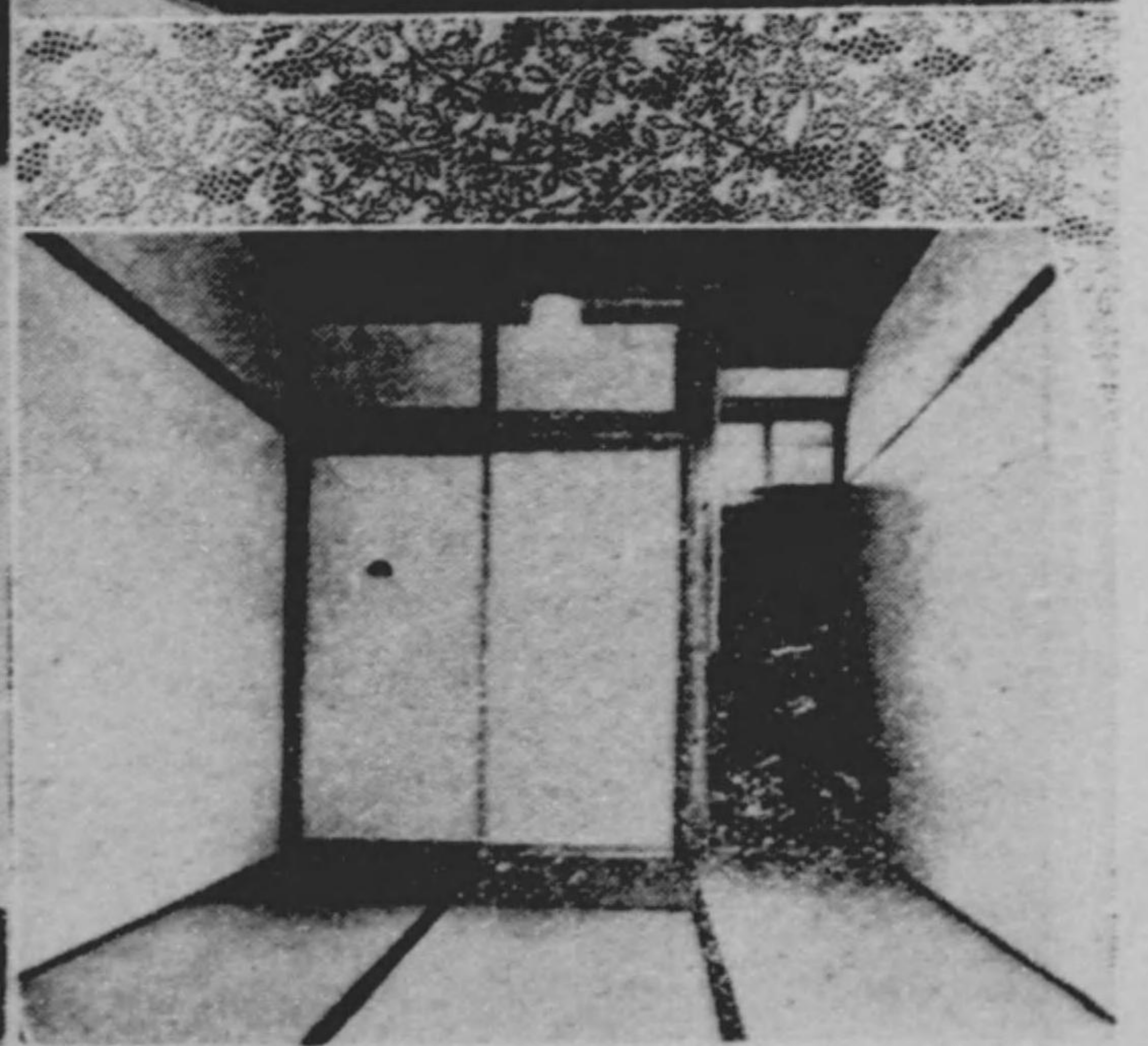




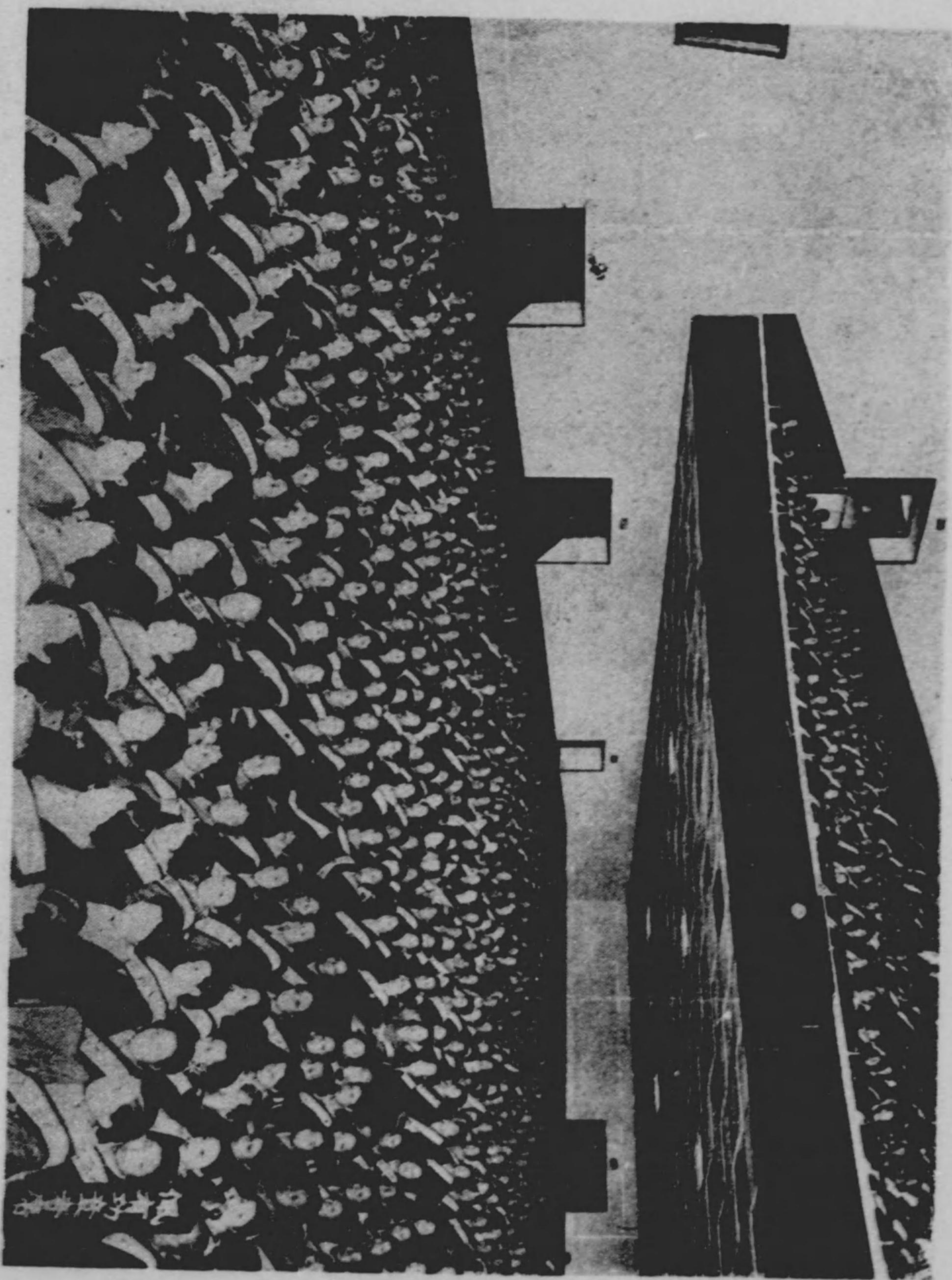
四十二年の歴史を物語る支部旗と新装成りたる支部會館：



支部職員



愛國母子寮全景



六訂編市愛國婦人會總會の盛況一六

序

懸案ノ婦人團體ノ統合モ愈々實現シ我ガ愛國婦人會ハ去ル三月十二日ヲ以テ解散致シマシタノデ之ニ伴ヒ當支部モ茲ニ四十有餘年ノ輝カシイ歴史ニ終止符ヲ打ツコト、ナリマシタコトハ感慨無量ノ極ミデアリマス

長年月ニ亘リ會勢ノ進展及各種事業遂行ニ將又報國運動ニ精進シ會員孰レモ奥村會祖ノ精神ヲ昂揚ニ努メタル結果今日ノ隆盛ヲ見ルニ至リマシタガ今ヤ曠古ノ非常時局ニ際會シ大東亞戰爭ヲ勝チ拔ク爲ニハ一億一心更ニ堅忍持久ノ節ヲ掌ウス

ヘキ秋コ、ニ發展的解消記念トシテ四十二年間ニ於ケル支部

事蹟ノ大要ヲ蒐録「婦人報國之足跡」ト題シ關係方面ニ贈リ之
 ヲ後世ニ傳ヘ又永ク思出ノ資料ニ供ヘントスル次第デアリマ
 ス
 尙ホ複雑多岐ニ亘ル尤大ナル資料ヲ克ク集約整頓シ比較的短
 日子デ本書ノ完成シタルハ編纂囑託小林存氏ノ勞苦大ナルモ
 ノデ併セ記シテ謝意ヲ表シマス
 以上一言叙ベテ序トスル

昭和十七年六月

元愛國婦人會新潟縣支部
 主事 塚田榮策

目次

第一章	まへがき	一
第二章	當支部創設と奥村刀自の來越遊説	五
第三章	明治廿七八年戦役に於ける活動と行賞	一〇
第四章	其の後の會勢發展	一四
第五章	世界大戰中に於ける活動	二〇
第六章	滿洲國成立と當支部	二二
第七章	平時の社會的施設	三三
第八章	會務の整備	三三
第九章	支那事變から大東亞戰爭へ	四四
第十章	記年事業計畫	五五
第十一章	婦人團體の統合に就いて	七七
佩有功者名簿		七七
新潟市		九
長岡市		一〇
高田市		一六
柏崎市		二〇
三條市		二四
北蒲原郡		二五
中蒲原郡		二五
西蒲原郡		二五
南蒲原郡		二五
東蒲原郡		二五
刈羽郡		二五
志志郡		二五
古島郡		二五
三島郡		二五
北魚沼郡		二五
南魚沼郡		二五
中魚沼郡		二五
東魚沼郡		二五
西魚沼郡		二五
中頸城郡		二五
西頸城郡		二五
東頸城郡		二五
中頸城郡		二五
佐岩郡		二五
渡船郡		二五

愛國婦人會々歌

自らは力を貯へ廣くほどこし
 餘力を貯へ廣くほどこし
 やさしく強き我が日の本の
 婦女の道をば世界に布かん

(3)

常に家庭の守りとなりて
 日々の勞務に倦まずいそしみ
 波風四方に荒ぶる時は
 起ちて捧げん鉄後の力

(2)

天地に輝く御稜威のかげに
 朝日照る御旗常に仰ぎつ
 國に報ゆる誠心かたかく
 強く結びし我等の女性

(1)

婦人報國之足跡

第一章 まへがき

明治三十四年七月當支部の結成が昭和十七年一月その大日本婦人會と合併解散まで足掛け四十三年に亘る記念の始終史を記す前に、先づ愛國婦人會とはさういふ性質のもので、さうして出来たかといふことを語るのが自然の順序だと思ふ。

愛國婦人會は我が國最初の國家的婦人團體で、我が國の婦人は古くは神功皇后を初め奉り男子に劣らぬ剛健勇武の諸姉も多かつたのだが何れにしても單獨に働かれたものゝみで、一教團結して團體的に國家に盡すといふやうな思想は明治中
 年支那清國の義和團事件（團匪事件）發生に刺激さるゝまで殆ど歴史上に形迹を見なかつた、然るに同事件の半途に於いて本會の生みの親會祖奥村五百子刀自が異常の決心を以て東本願寺の現地總開使大谷勝信、南條文雄兩氏一行に隨伴し眼
 のあたり戰場の惨めさを目撃して歸來戦死者遺族救護事業の緊喫なることを絶叫し、之を婦人團體の手に於いて實現せん
 ことを提唱された處、俄然朝野の間に反響を捲き起し、明治卅四年二月終に一條公爵夫人以下三十九名の發企人を得て本
 會の創立を見るに至つたものである、之は他奥村刀自の大義名分の上立つた高い人道的道徳感が社會的に愛國婦人の

因襲的立場を革新解放したとも考へられる一大運動で、奥村刀自は其の意味に於いても全編婦人から齊しく感謝の熱誠を捧げらる可きものである。

奥村刀自はもと肥前唐津の東本願寺派高徳寺住職奥村了寛の長女で弘化二年（二五〇五）三月二日そこに生れた。父の了寛師は前左大臣二條治孝の孫で幼名を増千代と呼びさういふ譯か出家になつたが、系圖柄憂世憐憫の念に富んで出家の身乍ら維新勤王黨の黒幕となり暗々裡に活動を續けてゐたのみか、母の淺子も亦豊前小倉の小笠原藩士山田圓太夫の女、父の血を繼いだ頗るの賢婦でよく夫の意向を諒解してゐたので、多感期の二十歳まで二人の家庭教訓にみっちり鍛へ込まれた刀自が、天稟の激しい性分と相持つて何時の間にか男子以上の國士的氣節に燃へてゐたことは無理がない、で、十八歳の春には早くも父の命を受けて幕府の長州征伐の包圍網を破つて單身潛行藩内の同志に密使連絡の役目を果たし、引續いて京都、山口、大宰府、福岡、博多等に往復し、有名な高杉晋作や野村望東尼とも相識つた、就中福岡藩の加藤司書は刀自の最も私淑した先輩であつたが、慶應元年十月廿五日同藩の騒動で血盟の士廿四名と共に一日にして死罪に處せられる變事が突發した、刀自はその時一目最後の別れを惜まんとて急に同地に赴いたが時遅く事既に終つた後であつた、刀自が後日「婦人報國」の大旗を掲げて全編婦人の指導啓蒙に出發したのは要するにかゝる血の洗禮によつて養はれた思想の結晶で單なる一時の發作的行動ではない、宜なる哉其の言論の迫力に富み至誠の惻々として言外に人を動かすもの、あつたことや。

刀自平生自ら女の生れ損ひと稱してゐたが去りとて一生處女であつた譯ではない、慶應二年二十二歳で附近同宗の福成寺住職大友弘忍に嫁したが此の縁は久しからず明治元年に至り夫に死別して生家に戻り、明治三年更に兄圓心の同志たる水戸の浪士鯉淵彦五郎と同棲して一男二女を擧げたが、士族上りの夫に男勝りの夫人であるから家道は兎角不如意勝ちで、二十年間各地に流寓し、その上國事に關する意見の相違も手傳つて明治二十年どうく離縁を執行した、それからはいろ

く要路の人に會つて政治運動と共に産業開發の事なきを自企んで見たが、勿論さしたることもなかつたらしい、この再度の結婚や放浪時代のことも刀自の心理には確かに深く影響してゐたものであらう、

扱て刀自の奮起の直接動機となつた義和團事件一に關匪事件とか北清事變とか呼ばれたものは何であるかといふと、當時清國に於いては西太名が女ながらに強剛で當代の光緒帝を幽閉して幼少の宣統帝を擁立したのであるが、宣統帝の實父の端群王といふのが精悍無比の人物でしかも全然時代の推移を解せず、西力東漸の流弊を忌む餘りに日本までを含めた在支外人勢力の掃蕩を企て、義和團と自ら號した白蓮教内の秘密結社を使喚し、暴徒と官兵と合同して白晝公然我が公使館に迫り不幸な一書記生を虐殺する迄に至つた、そこで北京在留の各國人は洋の東西を問はず自衛の爲めに集まつて一同英國領事館に籠城することゝなつたが、もとより其の用意があつた譯でないので數萬の暴徒を相手として一方ならぬ苦境に陥つてゐた。

この人々を救援の爲め我が國は列國の依頼を受け第五師團の全部と第十一師團の一部とを現地へ送つたのであつたが、刀自が東本願寺使節一行に伴うて慰問したのはこの出征軍であつた。

いふ迄もなく當時は今日のやうに軍隊の後方運輸の組織が進歩して居らない爲めに交戦兵士の供給なき殆き論外で、刀自の報告を摘記すると、「あの緒土の泥を糞せたやうな白河の水の表面を敵味方の靡爛した屍体が毎日幾つとなく流れ下る、けれどもそれが唯一の飲料水で煮炊き方もそれでしてゐるより他はない有様であつた、しかも北支那で有名な濼々たる砂塵の間を清分けて馬二頭を並べ兵士達が絶間なく武器糧食を運ぶのであるが炎熱の夏季といへ、飲料水と食料とが右の有様で殆き不衛生を通り越し、且つすべての配給が極端に乏しいので過勞の爲め大抵血を吐いて死んで行くかさなくとも自然に体力を消耗して生涯の廢人になつて仕舞ふ云々」とある、環境上眞宗無我愛の純なる信仰を胸に抱いた刀自の本來の熱情の此に蘇つたことは當然であるが、それと共に現實に深く刀自の心を撲つたものは時の天津領事夫人鄭孺子女史の生

きた手本であつた、女史は刀自と同じ佐賀縣の生れで享年三十六歳の働き盛り、北京籠城の際には在留全日本人の主婦として内事一切を擔當し、炊事被服の高端を初め世話を一身に引受けたのみか、よく負傷兵士を看護して温情洩るゝ限なく、不安と失望のさん底に落ち込んだ内外幾千の人々の希望と光明との中心となつてゐた。刀自は此の光景を親しく目睹し涙を流して鄭夫人に感謝したが、其の心中には此の時既に「日本の女の將來の仕事はこれだ」といふ雄々しい想念が油然而として沸き起つたものであらう、日本中の男子と恰き同敷である筈の婦人達が、皆かうした雄々しい大和魂を振り起して健氣な動作に出るならば、敢て多大の軍費を支出し生産力を激減せすとも我が國の兵力を二倍に補強したと同程度の結果になるのではないかと考へたのである。

かくて歸朝するや愛國婦人會設立の急務を絶叫して先づ中央の指導階級に之を訴へた。

然るに刀自の至誠は最も時局に適した爲め早速朝野の上層部に認められ、明治卅四年二月六日近衛篤磨公爵並に同貞子夫人の斡旋によつて貴族院議長官舎で創立の相談會を開いて發企人その他の事項を決定し、同廿四日發起人會議の席に正式に趣意書を發表し、次いで同三月二日東京偕行社で發會式兼會獎勵會を開催した時の出席者は名流婦人約一千六百名、長くも各官家各妃官婦下の御贊助を賜はり、本會の基礎は此に完全に築かれたのである。

左に右趣意書の全文を掲げて參考としよう。

愛國婦人會趣意書

掛券も長き我が皇國の御楯となる軍人たち、戰場に臨みて或は彈丸に碎かれ、或は瘴氣に斃るゝに當り、是の國民として其の功に報ゆるには、自ら種々の方法ある可しと雖も、生計困難なる遺族の救助こそ、最も先きにす可きものならぬ、抑も我が帝國嚮に征清の役あり、去夏復兵を北清に出し、忠勇義烈の軍人は命を鴻毛の輕きに比して、雨なす彈丸のな下に身を抛ち、燭なす水の床に夜を守り、名譽の戦死を遂げ、不起の病に罹り、異境の鬼となる者、果

してそれ幾許ぞ、されば公にも深き之を憫みおぼして、つぶさに救護の道を盡させ給へり、然れども救の手にには限りありて救はれ人の數限りもなし、あはれ頭に霜を頂ける翁の子を先立てたる、這へるざりたにしあへぬ子の親に後れたる、あるは夫に別れ、兄に離れて、衝にさまよひるもがら、舉げて救ふるに退あらざる可し、之を救ふの方法、將た如何にす可き、博愛に富み、慈善を體せる巾幗社會の力を協せて、以て此等の遺族を賑恤するにしく若ながらむ、爰に肥前唐津の人奥村五百子、齡年順に達して愛國の銳氣燃ゆるが如く、嚮には朝鮮國の衰運を悲みて、之を傍觀するに忍びず、東奔西走して、其が教育の道を開き又奮然起ちて海を渡り血を踏み屍を踏え、遠く北清に入りて、親しく戦地の實況と、軍隊の勞苦とを觀察し、歸るに及びて、切に其の遺族救護の良法を講じ軍人達に後顧の憂なからしめ、愈々皇國の輝を放たしめんとす、女史曰く「願はくば君達が半襟一掛の用を節し、其の資を積みて之に充てよ」と、眞に適切の言といふ可し、われら不敏なりと雖も、均しく是れ女子が同胞姉妹なり、いかで同情同感の熱涙を流して以て女史が希望を助けざる可き、依りて茲に「愛國婦人會」なるものを設立し、普く有志の諸媛を糾合せんとするに當り、長くも各妃殿の聞し召す所となりて、漸次御贊同の光榮を給はんとす、希くば世の閑秀たち、吾等が微衷を賢察ありて賛成助力せられむことを。

第二章 當支部創設と奥村刀自の來越遊説

かやうな機運の下に明治三十四年七月愈々當支部の胎動が初まつた、それは同月二日中央に於ける全國地方長官會議の席上時の松方内閣の内海内務大臣から愛國婦人會の趣旨を説明し各府縣に於いても之が事業援助のことを慫慂せられたの

が動機で、全長官及び知事悉く翼賛の計畫を樹てたが就中本縣の柏田知事は最も深き共鳴を會にもち、東京より歸るや否や直に支部の結成を急いで、先づ事務所を縣廳内に置き、知事夫人柏田須磨子女史自ら幹事長となり副幹事長には書記官（今の總務部長に當る）夫人田中メイ子女史が之に任じた、しかも事務、會計の兩面はそれ〴〵縣廳當該課の吏員（事務は知事官房、金銀の出納は會計課）に囑托したので、勿論街頭に進出して一設に呼び掛ける迄には未だ到らなかつたやうである、同年末の會員數は僅々十六名に過ぎなかつたといふ。

こんな状態の中にも翌三十五年五月三日には斷乎として支部發會式を日本赤十字社新潟支部看護婦養成所内に舉行する迄の運びに消ぎ附けた、主唱者の熱心が漸く果を結んだのである。詳しいことは記録が散逸してゐるので不明だが、同日午後六時から支部幹事長の主催で各幹事を招待し自祝の宴を開いたとあるから役員組織なども多少出来てゐたものであらう。幹事長といふのが最高位だつたらしい、會場の模様は本部から評議員小野少佐未亡人が懇々臨席し、田中書記官、八木新潟市長等來賓以外百三十名の來會者があり、柏田幹事長の式辭、田中副幹事長の答辭に次いで田中書記官の祝詞、小野本部未亡人の講演を終り、朝から初めて正午閉會したとある。いふ迄もなく將來の會務發展、會員募集計畫等も申合せたもので、會後自祝の宴の開かれたことは前記の通りである。

恰も此の際のこと本會の産みの親奥村五百子刀自が親しく本縣に遊説されるとの報があり、全役員を感奮駆起せしめたが、刀自は同年十月廿五日長野縣を渡り來て來越し、田中副幹事長は之を直江津迄出迎ひ、一先づ新潟市に伴うてこゝで柏田幹事長以下の役員と打合せを爲し、例の素朴な姿の健體下廿七ヶ所に亘つて六十歳の高齡を厭はず巡回激勵された、新潟市の刀自の宿舎は西堀淨泉寺であつたが、刀自は到る所高等旅館などに泊らず東本願寺派の因縁を辿つて寺院に落附き簡素な行程を續けつゝ身を以て模範を示されたらしい、今柏崎分會長近藤綱子刀自（本年六十八歳）の思ひ出話（會祖奥村五百子刀自と柏崎——貞居嘉和氏——新潟愛國婦人十一號十二號所載）によつて其の片鱗を示さう。

北清事變（義和團事件）で日本の血は沸き、日露の國交風雲急を告げ暗懣たる雲は東洋を蔽ひ、時態は刻々惡化街道を辿つてゐる、明治三十五年六月頃の初冬の或る日（編者註、三十五年十月廿五日から十一月廿五日迄の間の一日である）刈羽郡役所へ一通の書狀が配付された。

郡長は緊急郡内の有力な御婦人連を召集し、北越地方御遊説の奥村女史が柏崎町（今は市）へも御寄りになり、御講演される件を報告された。

當時婦人會の設立日淺く、柏崎町には二、三の會員しかなく、幹部の會員は青くなつたり緒くなつたり冷汗をにじませながら

オラドウシヨバテ〜〜
……コマツタスケ

の連發火事騒騒ぎのやうであつた。

と、何しろ全縣で百三十名ばかりの會員を會員數を各地に割當て、見ればそんなもので、恐らく何處でも之が詐らざる實況であつたらう。刀自の懷舊談は尙ほ果なく續く。

不言實行、泥棒捕つて繩ない式のやうだが、柏崎町やその隣接町村の有力な家庭を訪問して無理に會員になつて貰ひ十四、五名の會員が出来準備も整つて御光來を待った。（中略）かくて當日停車場での歓迎には野次馬の見物を加へて

「オヤ〜〜まるで男のやうなお方だね」

「さうだねー眞黒い顔をしてすまあ、撫ツつけの切髪なんかしてサ」

「あのマァー杖を見なせ、犬コロシのボクトウ見たいダネツカネ」

「サウダテ、男みたいに白のボタン止めのシャツを着て股引をはいて……」
中略

等と語り合うのだった。蓋し奥村刀自の風采は新潟市湊分會會長高橋菊子刀自が之も「新潟愛國婦人」紙上で故郷での幼年時代の追憶を語られたやうに随分振つた方で、寺院で信心の御話をするにしても

法燈の蔭に黒染の衣ではなくて御被布左手に珠數切下げ髪（髪）の扮装男ども女どもつかない老人が外輪歩調で靜かに如來（佛）に禮されて壇上に上られました。

私は上向いて穴の明く程見直しました、色は淺黒くて鼻の下に大きな黒い痣があり、丸い目と一文字の口は引締つて見るからに怖い婆さんだと思はれた。

程だが心情は誰れよりも優しく、戦争で一人の血を流すことをさへ忍びなかつたのである。

奥村刀自は柏崎でも町の勝願寺に宿り、連日の疲勞を癒す可く其の夜は早く寢所に入つたが、翌日爽味には元氣よく起床して院主と一處に本尊の前で讀經を捧げ、寺の奥儀の手料理を大變美味しいと賞めつゝ朝餐も終つて定刻に演說會場の濱町の香積寺に赴いた。

會場での刀自は大きな地盤を張り上げて先づ戦地に於ける將兵の勞苦を説かれたのであるが、支那の泥水の標本を小さな硝子瓶に入れて持ち歸られたものを高々と振り翳して

皆さん、兵隊さんはこの水を呑んで戦争されるのです、こんな汚い水が皆さんに飲まれますか、國家を守る爲めにはこんな汚い水でも美味さうに飲んで陛下の御爲めに一死奉公されるのです、私はこの目でその困苦に堪へられ奮戦なさる有様を見て來たのです、私達は女だからと言つて引込んでゐる時代ではありません、女でなければ出來ない仕事も澤山ある筈です、男に負けないやうに和協一致團結國土を護らうではありませんか、戰場で働らく勇士と同じ氣

持らになつて下さい、これからの時世は何時こんな時態になるか知れませんが、その時になつてからあゝして置けば良かつた等と氣が附いても遅いのです、女性にも大和魂がある筈です、女が弱かつたら、そして眠つてゐたら戦争には勝てません、人間最高の道徳は愛國心です、さうか將來の日本の爲めに皆さん！半襟一どカケを節約して下さい、節約した其の一回のお金で愛國婦人會の會員となつて婦人奉公の誠を盡して下さい、一人の力より二人の力が強いのです、お互に手に手をどつて國の爲めに盡さうではありませんか。

と句々血涙を瀧ぎ柏崎に限らず各地とも一時間でも二時間でも休憩もせず所信を披瀝した、その熱意と氣魄には何人とも流石に頭が下がり、爲めに刀自の遊説の跡から歸らんと會員が殖えて、其の年の暮にはやがて一千二百六十名に達した、徳孤ならず必ず隣ありと聖人の言は果して偽でない、刀自は常々男ばかりが國家的に働いて女が働かぬのでは皇國も半身不遂に等しい、私は足に豆を出來して迄現地に軍隊を慰問して來たと語り一寸した調子にひよつと笑ひを洩らすものでもあると、壇上から「何を笑うか馬鹿者奴」等と觀面の一喝を與へらるゝことも妙くはなかつた、併しその直後には一瞬光風齊月の態度に戻り、棍々として懇切に話を續けられたのである。

序だから言つて置くが現在の時勢は果してさうだらう、國家總力戦の前には男も女もあるまい、曾て刀自の服裝を驚いた人達が今はモンペイ（モンペイ）を穿き長靴を穿いてバケツ送りの練習に維れ日も足らず男に代つて銃後の護りを完備してゐるではないか、半襟一ど掛けの節約から進んで全物資の愛護、債券國債の購入すべて主婦の仕事である。我々は刀自の先見の明かなるに敬服すると共に改めて時代の力の如何に大きいかを認識したい、之が愛國婦人會に代つて新たに誕生した日本婦人會の出発点であるが、この會も亦刀自の精神によつて生きねばならぬことは明白で、刀自の足跡はそんなにも大きく、従つて我々の刀自の教へによつて過去四十年間歩み來つた道は其の實蹟によつて何處迄も不滅であると思ふ。來し方を振り返つて見るとそぞろに感慨が深い。

話が少し側道に剪れたが、そんなに偉い奥村刀自にも嫌なものが一つあった、それは鮭の料理で、それとは知らず柏崎に泊まれた晩宿坊の勝願寺でその「山掛け」を薦めた、刀自は一旦口にされたものを「これは鮭だナ」と言つて吐き出されたけれども主人の心盡しを考へてか再び口に快く夕食を喰へ終はつた處、夢中に酷い腹痛を起し中毒症状が明らかとなつて一同大騒ぎしたが、兎に角太したこともなく治まつて翌日は依然日程通り行動された、頑健なからだの故であつたに相違ないが、國家の爲め生命掛けの精神力の充實のかくあらしめたのであらう。刀自の北越巡回中にはこんな逸話もあつた。

奥村刀自來越の結果演説の聴衆は三千六百餘人といふことであつたが、當支部所屬會員數は一舉に一千二百六十人に殖ゑた。(明治三十五年末調)

刀自の行脚記行の詳細の知れぬことは残念の極みである。

第三章 明治廿七八年戦役に於ける活動と行賞

當支部創設時代の経過は右のやうで、會務は舉げて縣廳内の諸機關によつて統制せられ、地方有力婦人に幹事等を囑托したのもあつたけれども多くは名義ばかりで、幹部との連繋も薄く、積極的の事業は何處でも出来なかつた。

明治卅六年十二月十九日支部幹事長を支部長と副幹事長を同副長と改稱昇格せしむることとしたが、之と共に主事を置いて専心會務を執らしむることとし漸く稍々獨立の形を作り得た、併し第一次の主事は依然として知事官房主事の大野徳太郎氏が之を兼ねたのである。

その中に突如として明治卅七八年戦役が発生した、五千萬國民が待ちに待つた善隣扶掖暴露聘邀の戦ひである。當支部本來の理想を顯現す可き時機は今にして來たのだ、けれども悲しいかな内部が以上のやうな實況で創立日淺く實力薄弱であつたが爲めに思ひ乍ら十分の活動力を發揮することは困難で、銃後々援事業として此に記載するものも僅かに一部出征軍人の送迎並びに留守宅慰安、傷病兵の見舞、戦病死者の弔慰會葬或は其の遺族慰問、第一線への寄贈等若干に止まつたが、今日廣く行はれる慰問袋などの制はこの頃から端緒を開いたものと考へられる、何にしても國家總力戦といふことの理解が未だ普及せず、女はせいゝ家庭に閉籠つて差出ぬがよいとされた當時の話だから、率先して奔走する先覺婦人は往々にして世間の口の端にかゝり易く、飽くまでそれを取り切つて進まうといふには非常の勇氣を要したが、団体なればこそである、お互ひに助け合ひ勵まし合つて兎に角恙なく大任を果たした、軍人各個の満足、百八十萬縣民の禮讚、支部會員は茲に百パーセントの自信を得て會の眞價を遺憾なく發揚したのである。今回戦役中を通じた當支部の全業績を左に表示する。

- (一) 本部を通じて前線へ寄贈慰問を行ったもの
 - (イ) 慰問袋 八二八個
 - (ロ) 毛布 三六〇枚
 - (ハ) 眞綿 ヲヨツキ 一七七枚
 - (ニ) 煙草 五二〇〇個
 - (ホ) 現金 二二七圓
 - (ヘ) 寶丹 六〇〇〇個
- (二) 支部獨自に行へるもの
 - (イ) 出征軍隊送迎(湯茶接待) 三四五回 (出張延人員 二四、八四五)

- (ロ) 出征軍人家族慰問 一四、一四八戸 (出張延人員 三〇、七四〇)
- (ハ) 傷病兵慰問 一、一七九人 (同 一、四七七)
- (ニ) 戦病者遺族慰問 二、〇五七 (同 四、三五八)
- (ホ) 病戦死者弔慰會葬 一、五〇八 (同 一八、六一三)
- (ヘ) 傷病兵へ見舞金 五九圓
- (ト) 戦病死者遺族へ香資捧呈 一一五圓 (此戸數一七七)
- (チ) 出征軍人家族へ慰問金贈呈 一八二圓 (此戸數二五〇)
- (リ) 遺家族慰安演藝會 (音樂會活人畫二回、戦利品展覽會二回)

以上の他に軍人遺族傷兵へ救護金を贈りたるもの明治卅八年中六百五十七圓。

以上の功勞に對して戦役終結後(明治三十九年四月一日)支部を初め各都市幹事部にそれ〴〵次の如き賞賜の御沙汰があつた、役員職員以下全會員の挺身の努力が其の筋に確認された爲めであるが、事に與かつた當時の現在會員數約五千の姉妹は恐らく悉く首途の光榮に感泣したものであらう。

御沙汰

愛國婦人會新潟支部

明治卅七年戦役ノ際盡力セシニ付銀杯一組ヲ給フ

- 北蒲原郡 幹事部
- 中蒲原郡 幹事部

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|----------|----------|----------|
| 長岡市 幹事部 | 新潟市 幹事部 | 佐渡郡 幹事部 | 岩船郡 幹事部 | 西頸城郡 幹事部 | 中頸城郡 幹事部 | 東頸城郡 幹事部 | 刈羽郡 幹事部 | 中魚沼郡 幹事部 | 南魚沼郡 幹事部 | 北魚沼郡 幹事部 | 古志郡 幹事部 | 三島郡 幹事部 | 東蒲原郡 幹事部 | 南蒲原郡 幹事部 | 西蒲原郡 幹事部 |
|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|----------|----------|----------|

明治三十七、八年の際盡力せしに付銀杯一個を賜ふ

第四章 其の後の會勢發展

明治卅七、八年戰役中に於ける當支部全員の熱烈なる活動振りは前に述べたやうに一般國民の視聽を集めしめたが、併し時代未だ副はす三十八年末の現在會員數は四千七百〇五人に過ぎなかつた、それでも創立當時の十六人に較べては殆ど階世の感があるのだつたが、何分その頃は未だ國家總力戦なきを唱ふるものもなく、依然奥村刀自の型を守り「半襟一どかけの資を節して國家の爲めに盡せ」と言つて會員を募集する程度で極めて姑息な擴張法に始終したから、先輩姉妹の努力の割合に新入會者は少く、それも多少の地位ある家庭の義務のやうに心得て會費だけ出して安閑としてゐやうといふのが大部分であつた、然るに三十七八年度の實際に鑑みて三十九年末には一躍九千〇二十一人に上り、翌四十年七月六日を期し本部總裁官（閑院宮）兩殿下をお迎ひして長岡市で第一回大會を開く迄の盛況となつたので、入會者が俄に倍加して四十年末終に一萬を突破すること三千八百十一人に達し、大會の參列者のみも無慮一萬人を算へた、是れ偏へに雲上のおほけなき御庇音によるものである。

先づ記録によつて同日の光景を叙すると

▲新潟支部第一回總會

七月六日午前八時より、長岡市高等女學校に於いて、同支部第一回總會を開けり、總裁殿下（閑院宮妃知恵子殿下）には、此度赤十字社新潟支部總會へ御台臨の 閑院宮殿下と御同伴、岩倉會長以下を従へさせられ、午前九時五十分御台臨あらせられぬ、桑原支部副長（内務部長夫人睡子）の開會の辭終るや、殿下には、左の御臺旨を賜はる。

御 臺 旨

愛國婦人會新潟支部は漸次會員増加し會務亦整ひ、茲に第一回總會の式を舉ぐるに至れるは、智恵子の喜ぶ所なり
今や戰役の後を受け、本會の義務彌々重く、事業の前途尙ほ遑速なり、會員諸氏、益々奮勵し協心戮力、以て本會の趣旨を達せんことを望む

右に對し桑原支部副長は、支部長（知事夫人清橋滿子）の左の答辭を代讀す。

答 辭

愛國婦人會新潟支部第一回總會を開くに當り、畏くも 總裁殿下の御台臨を忝うし優渥なる御臺旨を賜りたるは、當支部が無上の光榮とする所なり、自今、職員及會員と共に倍々奮勵努力して會務の擴張を圖り、以て台旨に副ひ奉らんことを期す、謹みて奉答す

續いて數名の祝辭朗讀及び清浦男爵の演話ありて式を終ふ、當日の來會者約一萬人と注せられぬ。（愛國婦人會史）
群衆感泣の光景眼に見る如くである。

當支部が取分け此の日の會場を長岡市に選んだ理由は、之が前日新潟市に日本赤十字社總會が舉行されるので、總裁官殿下は本宮殿下と相携へて御台臨に相成る、其の翌日が我々の總會で、妃宮殿下が主となつて御臨場といふ譯だから土地を換へて兩殿下をお迎へしたいといふ長岡市有志の熱烈な希望があつた爲めで、愈々さう決定すると長岡市では市役所内に總會事務所を設けし支部から役員二名が出張して一般的の準備から終了後の跡始末まで全部の處理を遺憾なく取行つ

た。

當日は朝から日本晴れの好天氣で人出の都合もよく、午前九時開會の一點鐘によつて會員の外來賓たる軍人遺族傷兵等全員着席、九時五十分に到り兩宮殿下御同列にて式場に入らせられ、御隨員は會長公府夫人岩倉久子、本部評議員澁谷知和子、顧問男爵清浦圭吾、部長松原全徳等であつたが、此の時喇啞たる國歌君ヶ代起り一同最敬禮、次いで桑原支部副長恭しく御前に進んで會員表を捧呈し開會を宣したる後明治三十七八年戦役中の御令旨を捧讀した、それから前記の御令旨を御覽も麗かに下し賜はり、奉答文の代讀があつて、會務の報告、會長祝詞、會員惣代祝詞、有功章御授與、傷兵惣代、遺族惣代へ特別賜金の御授與と順序を追ひ、兩殿下は諸員の最敬禮裡に御退席あらせられた跡で御隨員中の本會顧問清浦伯爵の祝辭、演説あり、桑原副長閉會を告げ無事式を終へた、時に正午十二時であつた。

支部は當日の參會者悉くに對し記念扇子一本と菓子折を贈呈し、軍人遺族傷兵一千四百七名に特別賜金二千八百十四圓(一人二圓)を傳達した外に殿下御歌の複寫一葉を頒つた。

本總會の全部の經費決算額は九千四圓四十七錢、大半は有志寄附金で支辨した。

爾來役員側にては會勢の發展計畫に拍車を掛け幻燈、講談其の他を利用して街頭に呼びかけ、又屢々地方的集談會を催はし或は委員區幹事の總會を通じ會の趣旨を普及する等幾多の手段を講じ宣傳に努めたる甲斐ありて大正三年世界大戰の勃發迄に獲得したる會員總數は二萬五千〇九十二人(大正二年末調)眞に物産き倍加振りを示した。

尙ほ同四年第二回總會開催に自奮せる會員は一躍二萬七千八百六十名となり、本會の實蹟は愈々社會の認むる所となり越えて昭和九年第三回總會開催に當り滿洲事變の後之れが刺戟するあつて倍加五萬六千九百四十四名に上り、此勢に支部は事業に精進すると共に更に會員糾合に全幅の力を盡し、昭和十二年迄に更に一萬を増加し六萬八千餘名に達した、この年七月日支事變の勃發あり更に來る可き紀元二千六百年の記念として會員倍加提唱ありて支部役員は全力を盡すと共

に會員又寢食を忘れて努力せられたる結果十二萬を突破し本部より机掛一枚を授與せられ大募集の記念として表彰せらるる本會解散の際の支部會員は十二萬三千百十五名であつた。

感謝狀

愛國婦人會新潟支部

曩ニ本會カ昭和十五年皇紀二千六百年ヲ期シ會員五百萬人以上ニ達セシムヘク計畫ヲ樹立スル
ヤ之ニ對スル貴支部ノ成績顯著ニシテ克ク所期以上ノ目的ヲ貫徹セシハ盡シ各本、支部熱誠努
力ノ賜ニシテ洵ニ感謝ニ堪エス茲ニ記念トシテ特製卓子覆壹掛ヲ贈リ感謝ノ意ヲ表ス

昭和十五年十一月十日

愛國婦人會長水野高壽子 印

従つて之か輸出會費の増加も亦明白にして、明治三十五年度に僅々一千七百八十五圓なりしもの大正二年度には二萬七百十六圓となり、毎年度剩餘金と指定寄附金の中より規定額を設けて其の大部分を蓄積せる基本金並に救護、救濟準備金の合計明治三十五年度に於いて辛うじて一千三百二十七圓を計上し得たもの、大正元年度は二萬九千四百九十五圓を算するに至つた、尤も此の中には明治三十七八年戦役後に解散したる帝國軍人援護會の殘資給出分一萬一千圓を含むのであるが、同會はもとゞ名稱の如き目的を以てこの戦役前中央に創立せられたるものなりしも、本會を初め全國に亘つて同種の事業が計畫せられし爲め必ずしも屋上屋を架するの必要なくすべてを統合す可しとの結論より時局終ると共に解散されたる次第で、其の際本縣内に於ける保有資金七萬餘圓は暫く縣廳に保管を托し置いたが、今回一切の處分完了と同時に當支部授産事業資金として給付せられたものである、是れ等の基金資金を利用せる當支部の飛躍は大正三四年世界大戰

中の行動に於いて正に意氣天を衝くの儀を示した。

會費は會員數に應じて増減す可きが原則で、特に日支事變以後會員の増加に盡さんとする徴表より會費納入成績よく明和十三年五萬九千圓、翌々十五年には九萬六千圓の最高額を示し事業方面の實施の根底愈々強きを加ふるに至つた。更に支部は各町村會員數目標を女子人口百分の十二とし此の目標を突破せる左記分會を優良分會として表彰した、◎を附したる分會は其後益々向上發展し會員遂に女子人口百分の三十五人以上となり事業成績亦何れも見る可くあり、本部總會の席上表彰の光榮に浴し卒頭綬及賞金を授けらる。

◎新潟市

- 太畑分會
- 鏡淵分會
- 榮分會
- 山ノ下分會
- 淡分會
- 白山分會
- 新潟分會
- 濱浦分會
- 沼垂分會
- 關屋分會
- 豐照分會
- 礎分會
- 入舟分會

長岡市

長岡市愛國婦人會

高田市

高田市愛國婦人會

三條市

三條市愛國婦人會

北蒲原郡

水原町分會

中蒲原郡

◎金津村分會

西蒲原郡

根岸村分會

燕町分會

小林村分會

龜田町分會

村松町分會

五泉町分會

五泉町分會

島上村分會

島上村分會

新海村分會

新海村分會

田上村分會

田上村分會

津川町分會

津川町分會

三川村分會

三川村分會

折尾町分會

折尾町分會

塚山村分會

塚山村分會

大積村分會

大積村分會

奥板町分會

奥板町分會

來迎寺村分會

來迎寺村分會

小千谷町分會

小千谷町分會

石打村分會

石打村分會

千手町分會

千手町分會

田尻村分會

田尻村分會

南鑄石村分會

南鑄石村分會

安塚村分會

安塚村分會

沖見村分會

沖見村分會

海町村分會

海町村分會

◎坂井輪村分會

和納村分會

島上村分會

燈籠村分會

新海村分會

田上村分會

津川町分會

三川村分會

折尾町分會

塚山村分會

大積村分會

奥板町分會

來迎寺村分會

小千谷町分會

石打村分會

千手町分會

田尻村分會

南鑄石村分會

彌彦村分會

國上村分會

吉田町分會

米納津村分會

葛巻村分會

加茂町分會

小川村分會

上條村分會

◎荷頃村分會

岩塚村分會

關原村分會

桐島村分會

深才村分會

眞人村分會

内郷村分會

刈羽村分會

下保倉村分會

菱里村分會

◎浦濱村分會

栗生津村分會

會根町分會

下條村分會

長澤村分會

日出谷村分會

揚川村分會

栖吉村分會

日越村分會

日吉村分會

島田村分會

片貝村分會

十日町分會

西中通村分會

高田村分會

小黒村分會

松之山村分會

諏訪村分會

◎松之尾村分會

中野小屋村分會

黒埼村分會

見附町分會

大面村分會

東川村分會

富會龜村分會

◎王寺川村分會

臨野町分會

西越村分會

北條村分會

北鑄石村分會

浦田村分會

吉川村分會

有田村分會

◎升湯村分會

大原村分會

味方村分會

福島村分會

今町分會

豊實村分會

山本村分會

宮本村分會

黒川村分會

寺泊町分會

石地町分會

保倉村分會

有田村分會

- | | | | | | |
|------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 西頭城郡 | 直江津町分會 | 八千浦村分會 | 中郷村分會 | 美守村分會 | 四海村分會 |
| | ◎小瀨村分會 | 木浦村分會 | 下早川村分會 | 大和川村分會 | 市振村分會 |
| | 糸魚川町分會 | 今井村分會 | 青海町分會 | 名立村分會 | 根知村分會 |
| | 名立村分會 | 能生谷町分會 | 能生町分會 | 上早川村分會 | |
| 岩船郡 | 平林村分會 | 西神納村分會 | 岩船町分會 | 金尾村分會 | |
| | 相川町分會 | 寺泊村分會 | ◎金澤村分會 | 八幡村分會 | 新穂村分會 |
| | ◎二宮村分會 | 澤根村分會 | 河崎村分會 | 畑野村分會 | 兩津町分會 |
| | 河原田町分會 | 小木町分會 | 羽茂村分會 | 加茂村分會 | 金泉村分會 |
| 佐渡郡 | 吉井村分會 | 眞野村分會 | 西三川村分會 | | |

第五章 世界大戦中に於ける活動

その中に大正三、四年世界大戦が突發し、我が國も協商國の一員となつて中華民國に於ける獨逸租借地の中樞、青島要塞を攻陥した、其の際縣民の奮起に呼應し當支部も例により活動を開始したのであるが、出征軍人の歡送迎に、遺家族の慰問救恤に、或は戦病死者の弔慰會葬に、今回は特に留守師團司令部と連絡を取つて一糸亂れず後援に盡した、就中慰問袋の贈呈には最も力を致して

- 海軍省へ 三千五百個
- 陸軍省へ 三千三百廿八個

といふ好成績を得た。

尙ほ大戦の餘波として大正九年西伯利亞派遣の軍隊は縣下高田師團の郷土兵全部隊で非常に縁故の深いものがあつたので、之に對しても始終後援の實を擧げ同年五月慰問袋を作製し司令部を経て寄贈した、其の数は左の如くである。

- 第一回 九千三百三十二個
- 第二回 三千二百廿五個
- 外に現金五千廿三圓卅六錢

西伯利亞派遣軍の由來はもとゞ／＼露國に行はれた赤化大革命の爲めに、嚮きに友軍として同國內に入込んだチエツコ、スロバキヤ軍の地位が危くなつたので一つはそれを救出する爲めであつたが、中間にかのバルチサン騒ぎが湧き立つたので國民の義憤は其の頂點に達し、出征軍が縣民の子弟の關係と相待つて、局部的の動員ではあつたけれども、當支部としては最も眞摯な努力を續けたのであつた、此の頃では團員數も約三萬に伸び、事變にも馴れて運動の方針も漸く板について來た、この高田師團は新設の第十三師團であつたが後軍縮で廢止された、以て支部活動の適切なりしを事變終了後本事業に對する活躍の功勞を佳賞せられ支部に對し銀盃壹箇を授與せられた、

第六章 滿洲國成立と當支部

越えて昭和六年四月になつて第二師團が滿洲駐屯の大任を帯びて渡滿した、これは全師團の中から一個師團宛二年交代

に勤務する制があるのだから、普通の場合なら何でもないことであるが、今度は新たに張作霖の遺業を嗣いだ張學良の態度を透つて守備地域の風雲何となく穏かでないものがあつた爲め、本師團の警戒中多分たゞでは済ままいといふ豫感に驅られ行くものも緊張すれば送る方でも以て心傳心双方一點の機微相通するものがあつた、それ故に當支部は目的の軍事後援事業に對し本腰を据ゑ、先づ軍隊の出發を備ふことに全力を注いだ。然るに本師團は目的地に着くや否や匪賊討伐等の作業に従事し八十四名の死者と百四十四名の傷病者を出したので、別記の如く弔慰を爲し、又死者の慰靈祭には花輪、弔旗及び祭費を供し支部長並に役員の中野田田除に参拜すること二回であつた。

其の中に愈々昭和六年九月十八日となつてかの滿洲事變が勃發し、本師團主となつて戰鬥に参加したので、支部はあらん限りの精力を揮つて所期の責務に努めた、其の前後を通じての成績は左の如くである。

- (一) 滿洲事變發生前のもの
 - (イ) 在滿部隊歸出身者慰安一回 慰問袋三千五十箇を贈呈す
 - (ロ) 渡滿部隊出發慰問二回 慰問金三百二十五圓を支出す
 - (ハ) 戦死者弔慰八十四名、香華料一人に對し金十圓及び弔詞を贈呈し慰問並に會葬を爲す
 - (ニ) 傷病者見舞慰問百四十四名、見舞金一人に對し金五圓を贈呈し見舞狀發送並に家庭慰問を爲す
 - (ホ) 慰靈祭参拜二回 花輪、弔旗及び祭費を供し支部長或は役員参拜す
- (二) 滿洲事變中のもの
 - (イ) 遺族並に傷兵救護人員四四二名、金額二六九九圓
 - (ロ) 現役、應召軍人家族救護人員五四七名、金額五四七九圓
 - (ハ) 出動軍人慰問 慰問袋贈呈數五回 三五、二七九個、金額二四、九一六圓 慰問金三、六九五圓

(ニ) 渡邊軍送迎 四二回、金額二、九〇九圓

(ホ) 弔慰

戦死者弔慰二四二基、金額二、四二〇圓

遺骨送迎四七回、葬儀参列一八九回、金額九〇〇圓

遺族慰問二四一戸、金額八三三圓、傷病兵見舞金三五一名、金額二、二四五圓

(ハ) 慰安會 金額一一三圓

(ト) 病院慰問四五回、一、七四三圓

(チ) 兵器獻給金額一、〇〇〇圓

之によつて思ふと滿洲國の極めて順潮に成立したのは全く本師團の血の犠牲によるもので、しかも本師團の懸命の健闘の背後には郷土將兵をして後顧の憂なからしめた當支部の人道的活動が存してゐたのである。然らば新興滿洲國建國史の裏面にも當支部は断じて忘る可からざる存在といふ可きだつた。

第七章 平時の社會的施設

此の如く當支部は愛國團體として戦役事變中に於いて常に遺憾なき銃後後援の實績を挙げたが、會勢の逐次發展と共に事業目的の完遂を期するには、平時にあつても絶えず同様の計畫を行ふことが寧ろ大切だといふ見解から着々それを目論んで見た。

第一には明治四十二年中本部で教養生を募集した際當支部から選出教養を受けしめたものは二名で、次いで大正二年にも亦一名を出した、本部の教養生といふのは軍人遺族、或は傷病兵の子弟中から父兄の意志を繼承して將來立派な軍人とならうとするものに學費を給し勉學せしめるものであつたが、當支部から選出したものは不幸にして前後中等學校程度で終り、幼年學校又は士官學校に入學するに至らなかつた、そんな具合で本部でも支部でも期待に副はないことがいろいろあつて、教養所は結局閉鎖されたが、右三名は社會人として現在相當の立場にあり本會の爲めに盡して呉れてゐた。支部としても昭和十年滿洲事變に起因する遺家族及び軍人子弟の教養を開始したが昭和十一年度については十三人の教養を實施した。

第二には平素に於ける傷病軍人並びに遺家族中生計登かならざる向きに對する救護であるが、之は定期或は臨時に教養金を贈呈したので、明治三十八年から初め、大正十四年には現役應召軍人家族間にも及ぼした、其の毎年の合計金額は左表の如くである。

年次	金額	年次	金額
明治三十八年	六五七	大正元年	三、七八三
同 三十九年	九五	同 二年	四、二二九
同 四〇年	三、〇六六	同 三年	四、四六〇
同 四一年	三、二九九	同 四年	四、五七三
同 四二年	三、三一三	同 五年	四、二四七
同 四三年	三、一五〇	同 六年	四、一三二
同 四四年	三、二二五	同 七年	二、五七

大正八年	二、一八七	同 六年	二、九三三
同 九年	一、五二六	同 七二	六、〇四四
同 一〇年	三、五五九	同 八年	五、四九三
同 一一年	一、三三七	同 九年	五、五四四
同 一二年	四四三	同 一〇年	六、一〇七
同 一三年	四四九	同 一一年	二、六一九
同 一四年	七八八	同 一二年	六、七五八
昭和元年	六六八	同 一三年	一〇、八三〇
同 二年	六六七	同 一四年	一五、〇〇四
昭和三年	九四五	同 一五年	一二、八〇〇
同 四年	四七三	同 一六年	一〇、六四三
同 五年	六一三		

(年度により一戸當り給與の金額に差ありたり合計を掲げた。)

第三には本會の社會的事業への進出である。之は暗黙の間に國家總力戰の意義を体認したもので、強兵の源泉は一般國民の健全であるといふ思想に基いたものであるが、婦人本來の使命から考へてかうなることは自ら當然であつた、いふ迄もなく本會最初の標識は會祖奥村刀自の精神から生れて軍人遺族傷病兵の救護運動にあつたが、大正九年來十餘年の平和期が續き、遺兒子弟も追々生長する等それ等の家庭の環境が著るしく變つて救護の範圍が激減した爲め、之に代へて方向轉換を計つたのであるが、今日となつては確かに先見の明を誇り得ると信する、その第一は地方的災害事故に對する賑

値である。

それは大正十二年九月一日の關東地方大震災の際の活動を首とするが、その報知の初めて本縣に傳つたのは同日の夜であつた、併し中央との通信が全く絶えて仕舞つてゐたので、これにて市内新聞社が長野地方からの情報を綜合して報導する材料と新潟測候所の無電だけに止まり、翌日になつても確實な被害の實況は分らなかつたが、何にしても容易ならぬ情勢近來未曾有の災厄だといふことだけは判明したので、本縣では同月四日に臨時出張所を王子瀧の川第一小學校内に設け帝郡の救済に協力し、其の復興を早からしむることにしたが、當支部でも急遽幹部會を開いて各郡市幹事部に通報し取敢ず九月五日より應急措置として左の方法を講ずることとした。

(イ) 罹災者の汽車で歸郷するものに對しては主要驛で一人に付三十錢程度の飲食物を給すること

(ロ) 罹災歸郷者にして死亡せるものには葬儀費用に窮せるものに限る金十圓を補給すること

(ハ) 罹災者にしい歸郷旅費の乏しいものには必要旅費を給すること

以上の三要項は各幹事部共逸早く有志會員總動員で實行されたが、まことに機宜を得た處置で感謝するものが多かつた飲食物の種類は饅頭を初め、食パン、ミルク、キャラメル、サイダー、果物、漬物、麥湯等を豊富に主要驛に配置して置いて、着のみ着の儘で避難して來る人々のホッと一息すると同時に先づ感ずる饑渴を醫せしめ、旅費に窮するものには自動車、人力車の類を心配して先方に送り届け、或は其の費額を與へたのであつたが、急場の際何處の人とも分らず逃げ延びて來るので、遠くは岡山、大阪行きの切符さへ買ふてやつたことがあつた。

尙は全体の罹災者に對する寄贈品はすべて本部を通じて送付した、それは左表の如くである。

(一) 九月八日第一回寄贈品

單衣七三六枚、下駄六四九足

(二) 十月八日第二回寄贈品

拾衣一〇〇〇枚

(三) 同梱包第三回寄贈品

拾衣六二七枚、綿入一五枚、單衣四枚、手拭百六反と四筋、ネル下着二三八枚、雜品一四點

それ以外縣内に到着せる全部の罹災者に對しては各幹事部を通じて直接次の如く配給した。

(一) 十月十日 新潟市を除く十八幹事部を經給用として表裏地共各二千反、綿(六〇)一千包

(二) 其他新潟幹事部は特に十一月十七日、廿日の兩日防寒用大巾擦染綿ネル三十四釜を六三七名に給付せり。

(三) 新潟市内有志の離出に係る古着五五七點、下駄四〇足、雜品三〇點はこれ亦新潟市幹事部の手を通じて配給せしめたり。

(四) 以上より別に各幹事部或は委員區より支部を經ず本部に送付せるもの並に支部を經ず直接困難者に給付せるもの、衣類物品合して數千點に達したり。

右の衣類は全會員に於いて徹宵兼縫に従事し仕立上げたもの大多數あり、其の上新潟、新津、新發田の各高等女學校新潟女子下等學校の同情ある援助を得たるものも亦尠ならず、相待つて前記の成績を得たものである。

此の如き物質的賑恤の他に部長、幹事並に有志會員は何れも主要驛に出張し他の團體と協力して晝夜傷病者の慰藉看護に努め、一方ならぬ赤誠を捧げた、之が一例を擧ぐれば東京市京橋區新富町増田屋方西川ヒデ(當時廿三才)と稱するもの、如きは偶然當市に避難し來り一時市内四堀通長照寺に假寓したが妊娠七ヶ月なるに加へ身体の衰弱甚だしく醫療の要あるを認めたるを以て大學病院婦人科に入院せしめ、本部に於いて一切を賄ひつゝあつた處約二ヶ月を經て十一月二日退院差支へなきに至つた、かやうなものは先づ特別だが本縣調査によると來縣避難者總數は三萬一千四百十五人であり、當支

郡の手に掛かつて救恤されたものは一萬八千三百二十九人、約六割を算した。

本震災の救援行動に要した費用は合計すれば次表の如く一萬三千七百餘圓に達してゐる。

決算書

一金一萬三千七百六十四圓九十四錢也

内

- 金五百五十圓二十五錢 單衣地四五五反、晒木綿六疋
- 金八千四百四十六圓三十二錢 拾編入地表裏六千反、綿(六〇)二千個
- 金二百九十二圓五十錢 ネル地九百疋
- 金八百三十四圓八十五錢 裁縫加工費運賃外雜給
- 金百三十二圓八十五錢 下駄五百疋
- 金二千五百四十二圓四十一錢 罹災避難者飲食品費
- 金百九十五圓 同葬儀補助二十八
- 金五百三十圓七十六錢 同歸鄉旅費補助二百九十八
- 金五百四十四圓 新潟市幹事部救護費補助

以上

同胞愛に満ちた如何にも涙ぐましい奉仕であつた。

他の各地方の天災地變或は大火等に際し行つた救護賑恤は大正九年三月磐城線馬下附近列車遭難事件の被害者に慰問金を贈つたのを劈頭として、十一年二月北陸線勝山院道列車遭難事件にも慰問金を贈呈し、昭和元年八月に於ける中越地方

廿二ヶ所の水害の慘事、同年以上越地方の雪害等に對しては關東大震災當時同様支部員總動員にて間斷なく慰問救濟を行ひ同三年の五泉町、糸魚川町の大火、四年一月の沿海地方廿三ヶ所の暴風雪の被害、同八月の西頸城地方の洪水、寺泊町の大火、同六年西蒲原郡黒埼村の大火、その他の際にも出來得る限りの行動を取り感謝することが多かつた。

災害救済

- 昭和十二年 兩津町大火及十日町の雪害あり二百十八圓
- 十四年 阿賀ノ河渡船轉覆あり、早朝しかも濁流渦きたる中多くの婦女労働者あり特に慰問救濟をなす、百九十圓
- 十二月 岩手縣松尾嶺山に罹害あり見舞金を贈る。
- 十五年 靜岡市大火あり數千戸の焼失あり、支部より見舞金を贈る。
- 長岡市役所大災あり廳舎焼失。
- 佐渡郡澤根町に火災あり見舞金を贈る。
- 直江津町大火あり。
- 中條町、同揚川村火災あり。

當支部の實現した社會的事業の第四は妊産婦保護施設である。これは當時は未だ今日のやうに國家的に産めよ殖せよといふ認識はなかつたが、人道上から妊産婦の危険率を考へ之に對して貧困者には分娩料支給、産具供給、産婆なき村へは産婆の巡回派出等を行ひ、妊婦の診察をも無料で爲したのであつた、この計畫は大正十一年からであつたが、其年に生れた子供は今年で恰き徴兵適齡になつてゐるので、ゆくりなくも好都合に貢献することになつたものと改めて感慨無量である。妊産婦保護事業の爲め毎年要した費用は左の通りであつて、之は最後迄續いてゐた。

年次	金額	年次	金額
大正一二年	一、三五九	昭和七年	八一八
一二年	五二六	八年	六二七
一三年	二四〇	九年	七九七
一四年	一、八三二	一〇年	二、三二六
昭和元年	八八六	一一年	一、二一三
二年	一、五八四	一二年	九五〇
三年	一、〇三六	一三年	一、六七五
四年	九五四	一四年	一、二二〇
五年	一、〇九四	一五年	五四三
六年	八〇六	一六年	四六五

次いで第五の乳児保護及び保育事業であるが、後者は當支部の社會施設の一大分野を爲すもので、大都市には直營の通年保育所を設け所在農山村には各分會の季節託兒所を置いて一般保育所の指導啓蒙に任ずるのであつた。保育事業に就いては嚮きに全國に亘り成績優良なるものに、皇后陛下よりそれ〴〵御下賜金あり、本縣に於いても八ヶ所の中當支部關係の分は

- 刈羽郡石地町愛國婦人會季節託兒所
- 中蒲原郡金津村愛國婦人會第三季節託兒所
- 三島郡來迎寺村愛國婦人會新潟縣支部神谷託兒所

の三が御殊恩に浴してゐる有様で、饒後の生産擴充の爲めに最繁喫の所置とせられてゐるのであるが、其の經營法に就いては町村自体案外未だ理解せざるものが多かつた、當支部は之に對し十分の模範を示し或は物質的補助を與へて具體的に全部の健全なる發達を促した、年度によつて數と地方の相違はあるが郡市の通年保育所は

- 新潟市關屋田町 愛 婦 託 兒 所
- 長岡市上中島町 西 部 託 兒 所
- 高田市北本町 高 田 市 託 兒 所

の三が當支部の經營で、農山村に至つては總體の一割程度を本會員の手で賄つてゐた、其他これ等基準に追隨して來たものは勿論尠くない、而して之が實績は左の通りであつた。

大正十四年以來乳児保護並に保育事業支出表

年次	金額	昭和八年	金額
大正一四年	二、二二六	九年	五、〇五九
昭和元年	五、〇〇三	一〇年	六、一八六
二年	三、四五二	一一年	五、四八四
三年	二、九八四	一二年	六、八五〇
四年	二、九八〇	一三年	一五、四二四
五年	三、一九六	一四年	三二、三七二
六年	三、五二六	一五年	三〇、九三七
七年	五、二一九	一六年	三六、五四〇

以上農繁託兒所の進展は直ちに、人の問題に關係をもつので、支部では之れが開院奨励と共に保母の講習を大正十五年第一回を開催した。當時は本縣として他に例のない講習であつたので、縣内に講師を求め難い爲め遠く岡山縣、長野縣より其道の權威者を御願ひ致しました。従つて講習期間も二十日間とし受講者二十八名經費千二百圓を要し、爾來機會ある毎に開催して参りました。第二回は昭和三年二月一週間三十二名、第三回は同六年、一週間三十名、第四回同九年四月一週間三十四名、經費百六十九圓を要した。第五回は昭和十三年三月二週間を期間とし四十五名、經費七百十九圓、第六回昭和十四年三月一週間の期間として受講者二十七名、經費四百九十三圓、第七回昭和十五年一週間として縣、兒童保護聯盟と共同にて高田、金津の二ヶ所に開催、金津會場三十七名、高田會場二十九名、經費千〇九十三圓。

昭和十六年度は前記の如く共同主催を以て縣内十三ヶ所に會期三日間の短期講習を行へ六百名以上の保母を急速養成し事變に對處する増産運動援助としての農村託兒所増加に備へた、大正十五年開始以來途中開催せざりしは縣に於て單獨本講習を開催せらるるに依る。

第四には時代的の施設として婦人に適切なる講話會、講習會を隨時各地に開催し、或は活動寫真會を開いて會旨の普及と慰安娛樂の厚生運動に寄與することが多かつた、講話後、講習會の中には衛生保健のことは勿論、副業に關係したるものも含めてゐた。

第六には之は特殊の事情によるものたといへば言へるが、昭和九年以來農山漁村の不況で子女の身賣り或は誘拐といふやうな悲惨な事件が多かつた、それを防止する爲めに救助金の貸與等を行ひ極力防止に努め、一方では積極的には是れ等の人々の就職斡旋を試みた、この事業は昭和九年十年十一年と續いたが、爲めに支出した金額は九年度に五百八十圓、十年度に千二百二十圓、十一年度には八百十圓であつた、十二年度から支那事變が突發したので自然農村の景氣も回復し、止めてもよいやうになつたが、もとより限りある資本で完全な成績を挙げたとはいへ難いけれども、指導的の効果は確かに

あつた。

第七には大正十四年に明治十二年大帝陛下北陸御巡行の際御下賜金の趣旨に基き盲人治療の爲め本縣に恩光會が設立されたので支部は之に随伴し盲人救濟の事業を施行したが昭和三年大日本恩光會となるに及んで中止した。

第八には博愛の精神は單に人間同志のみならず其の忠實の伴侶たる親近動物にも及ぼす可しとの見地から夏期一定の間新潟市内便宜の地に給水設備を作つて牛馬犬猫迄も愛護することにした。

x x x

假りに創設時代から奥村刀自の來越に次ぎ、軍事救護を主とした時期迄を當支部史の第一期とすれば、以上の社會的活動時代を以て第二期と爲す可きものであらう。その後の軍事救護と社會事業との併行時代は正に第三期に屬する。

第八章 會務の整備

此の間内部の事情に就いていへば第一期の終り第一回支部總會の際既に「總裁官殿下から「會務亦變ひ」と御旨を頂戴してゐるが、第二期、第三期を通じて會務整備の状況は特に著しかつた。創設時代には統理も事務もすべて縣廳に屬し初代主事は知事官房主事の太野徳太郎氏で、支部として獨立の實が殆きなかつたのであるが、第二期に入つて支部長、副支部長の地位には依然知事夫人並に書記官總務部長夫人を戴いても主事だけは先づ縣吏員の手から離れて赤十字社支部主事が之を兼ねる例となつた。大野氏の支部主事であつた期間は明治卅六年三月から同四十年四月迄で、二代目主事の高内

眞實氏が同五月から四十五年四月迄、此の人から兼務の端を開いたのである。同時に四十五年九月から従来事務は關連で知事官房、會計は同じく會計課と散在的に取扱つてゐたものを統一して一定の事務所を赤十字支部内に置くことになつた。これで兎に角獨立の形が整つた譯である。三代目が阿部致氏、同年七月から大正六年六月迄就任した。四代目が同年六月から同九年十月迄の松浦貢治氏、五代目が同月から同十三年三月迄の江川民三郎氏、六代目が同月から昭和二年七月迄の福原象治氏、七代目が同月から同八年三月迄の佐藤文太郎氏、八代目が同日から昭和十二年三月迄の今井太市氏、次が同月から昭和十三年八月迄の原常一郎氏、此の人から赤十字主事の兼務を履して完全の獨立を獲得したが短時日で辭任したの塚田榮策氏から新しく名實共に相適ふものとなつて面目を更新した。當支部の如き大衆的の愛國團體にあつては知事夫人總務部長夫人を重要幹部に戴くことは常に多分の重みを加ふるとしても、實際の事功を擧げるのはもとより主事の人選如何にあるので、支部の今日あるを得たことに就いてはこれ等の人々の涙ぐましい努力の跡を記憶して置く必要があると思ふ。初代大野主事の時に三十七八年戦役が起り、二代高内主事の時に第一回總會が擧げられ、世界大戦は三代阿部主事の時に、西伯利亞出兵が四代松浦主事の時に起る。四代江川主事の時には畫期的な社會的進出の端を開き、東京大震災等に努力活動した。五代福原主事の時に昭和元年六月郡役所の廢止あり、依て各都市幹事部を廢して駐在員制度を實施することが顯現した。又新潟支部の稱呼をはつきり新潟縣支部と改稱されたのも同二年十二月である。七代佐藤主事の時に各都市駐在員を止めて他方の自治制を取らしめた、滿洲事變も此の人の代であつた。九代原氏の在任は短期であつたが支那事變勃發あり、八代今井主事に至つて滿洲事變最高潮に達し、然るに間もなく最後の塚田主事と交替し時代と共に會運の一大飛躍を見たのである。それからの現在に近いことは改めて記すが、尙ほ第二回總會は阿部主事、第三回總會、支部創立三十五週年記念式は今井主事によつてそれ／＼計畫されたのである。今つぎ／＼に其の概略を述べやう。

第二回支部總會

第二回支部總會は前年來の計畫に基き大正三年四月十九日に開催確定してゐたのであるが恰き其の時昭憲皇太后崩御の事があつたので、同月十一日になつて一年間延期し大正四年四月十八日新潟市新潟師範學校内で之を開いた。本總會は總裁宮兩殿下重ねての御台臨を仰ぎ日本赤十字社新潟支部第四回總會、篤志看護婦人會新潟支部第一回總會と會場を共用したのであつたが、其の設備ははつきりと各個に區分せられてゐた。式順も赤十字總會から愛國婦人會に移るといふことになつてゐて、午前六時既に受附を開始した處前夜の雨は何時となく晴上つて青空の光映ゆく、押寄する人浪に接合つて午前八時頃はもう非常な雑踏であつた。兩殿下には午前八時四十五分御豫定の如く篠田旅館御門で同九時會場にお成り遊ばされたから、平塚副支部長以下職員すべて支調前に整列奉迎申し上げ殿下には之に可重なる御答禮を賜うて後阪支部長の御先導で休憩室に入らせられた。愈々九時卅分國歌吹奏の間に兩殿下打揃うて式殿に入らせられ、先づ赤十字總會を終つてから引續き當支部の方に移つた。支部長阪達子の開會の宣告に連れ一同最敬禮中、總裁宮殿下には靜かに壇上に立たせ給ひ、御聲も明かに左の御諭旨を賜はり平塚副支部長の奉答文を代讀した。次いで會務の報告、會長祝辭の後有功章御授與、軍人遺族總代、傷病兵總代に特別賜金の御授與、第一回總會の例により、かくて支部長閉會を告げ奏樂裡に兩殿下共再び休憩所に御退き遊ばされた、時に十時四十分春光麗かに一萬一千三百餘の會衆感銘のときめきたゞならぬものがあつた。

御 誌 旨

愛國婦人會新潟支部第二回會員總會ニ臨ミ諸氏ト再ビ相見ルヲ喜ブ當支部ハ夙ニ擴張ニ努メ熱誠ナル諸氏ノ盡瘁ニ依リ會務大ニ舉ガレルヲ嘉賞ス、惟ノニ本會創立以來茲ニ十有五年國家ニ貢獻セル所僅少ナラズト雖モ尙ホ諸氏ノ力ニ俟ツモノ多シ諸氏益々協力同心本會ノ普及ニ努メシコトヲ望ム

奉 答 文

本日當支部第二回會員總會ヲ奉行スルニ當リ特ニ總裁殿下御親臨アラセラレ加フルニ御意旨ヲ賜ハル誠ニ感謝ノ至リニ堪ヘズ爾今一層協力シテ會務ノ隆昌ヲ圖リ以テ殿下ノ基旨ニ副ヒ奉ラシコトヲ期ス謹ミテ奉答ス

大正四年四月十八日

愛國婦人會新潟支部長 阪 達 子

式終りて後兩宮殿下には御休憩所に入らせられ、此に御言葉を聞召され、別室に陳列せる郷土資料を産覽あらせられたるが、尙ほ前記三會の協同にて午後一時三十分物産陳列館に於いてむばかりの宴會を催はし兩殿下の御臨席を冀ひ御流れを頂き一同光榮の感謝に咽んだのである。かくて小澤赤十字支部副長御旨を奉じて壇上に立ち參會者と共に各支部の高歳を三唱して清揚の氣分美しく捧へる中に兩殿下には徐々御退場あらせられ、時に午後二時廿二分であつた。兩殿下には大正天皇御即位の大禮報告祭に參列せらるゝ御都合にて御日程を御變更あり午後六時特別關係會招待の晩餐會には御臨臨あ

らせられや直に御歸館の運びとなつたが、御所員一行は特に御恩召を以て居残り、一同歌謡祝盃を舉げて更に前途の發展を誓ひ午後八時閉宴した。

當日御下賜あらせられた特別賜金は二千六百四圓で、軍人遺族及び傷兵一千六百四名に對し一人一圓宛割の割宛アゝあつたが當支部は無上の御恩澤を体して公平に之を頒ち他に慶兵の出席旅費として金七十三圓廿五錢の支給を爲した。

本會の總會者は約一萬三千人、第一回總會に超ゆること一萬人、一般會員には漆器盆一枚、繪葉書一組を記念品として贈呈し、食品は二重折辨當に菓子折を添へ、宴會招待者には其の上にもリンス風呂敷一枚、特製二重折詰瓶酒を供した、之が全部の費用決算額は八千九百三圓四十二錢で前年一旦中止した關係から成費用に於いて二重支出したものあつたが、大体有志の寄附金にて支辨し得た。

本總會に臨める殿下御隨員並に本部一行の氏名は左の如し。

- 御附武官 騎兵大佐 中 島 操
- 御用取扱 吉 田 榮 子
- 宮内事務官 松 井 修 徳
- 宮内 屬 二 名
- 侍 女 二 名
- 會長代理 男爵婦人 關 邨 子
- 評 議 員 吉 森 多 賀 子
- 部 員 三 橋 勝 剛
- 事 務 員 黒 田 剛

第三回支部總會

昭和九年七月四日支部總會を新潟師範學校々庭に開催した、之は大正四年四月第二回總會以後約二九年其の間に會員數も二倍となつてゐるので、是非共催うして欲しいといふ多數の希望があり、支部としても支那事變の開展に伴ひ會員激勸の必要上からも夙に其の意志があつたので、此に總裁官陛下の御都合を奉伺し、會員の熱望を容れて計畫することゝなつた譯である。かやうに下からの下から盛り上げられた總會であつたから、すべてが精神的に充實されてゐたことはいふ迄もない。本總會の行事は左の如く之を定めた。

- 一、七月三日 拜謁 有功章御親授 御茶會 御賜餐
- 一、同 四日 式典 託兒所御視察

かういふ順序で萬事豫定通り差支なく七月三日には、二代總裁官伏見宮大妃陛下午前九時親しく式場たる白山小學校に御臨遊ばされ千葉支部長の奉呈名簿により賜謁に次いで特別關係者に有功章を授與遊ばされた、それから十時になると更に一般有資格者に對し矢張り有功章を授け給ふたが之は午後まで續き、午後二時三十分になると、同校雨天体操場に備はされたる御茶會に御出席、支部長の言上、會長の祝辭あり同五十分終了御休憩室に入らせられた、其の後で茶會者は各自菓子折を携へ満面光榮に歸りて退場したのである。

總裁官陛下には前記日程の一部を終らせられて中間新潟縣廳にお成り遊ばされ、屋上にて市内御展望知事の説明を御聽取らせられ、又商工獎勵館にも御立寄りで縣物産を御覽の後一旦御歸館あらせられたのであるが夜は改めて御出門六時五分御賜餐場たるイタリア軒に向はせられ、支部長の言上により開會、會長の祝辭、小柳新潟市長、川合高田市長等のテ

ーブルスピーチにお耳を留めさせられて午後七時四十分御歸還あらせられた、終日の御勤精、仰ぐもまことに長きことであつた。

翌四日は總會當日で朝來天氣清朗午前五時既に式場に係員の出勤を見たが、いろ／＼の事情で参列者は前回より少く一萬人以上の豫想を八千三百三十二人に止まつた。

午前十時二十分第一信號によつて諸員所定の位置に整列すると、やがて三十五分陛下は師範學校記念會館御着、第二信號にて評議員以下一同打揃ふてお迎ひ申上げ、千葉支部長先導にて御休憩所に入らせ給ひ、愈々午前十一時國歌君ヶ代吹奏裡に式場に御臨臨一同最敬禮、次いで支部長の開會言上あり、陛下は徐ろに起立あらせられ、例によつて左の御諭旨を賜ふた、支部長の奉答文捧讀も亦前回同様である。

右終つて支部副長事業の報告を爲し傷痍軍人總代並に遺族總代にそれ／＼特別御下賜金の御親授があつて、會長から成績優良の委員區に表彰狀を贈り、又一家三人以上會の篤志會員に表彰狀及び木杯を贈呈して式を閉ぢた、此の旨支部長の言上によつて陛下は御退場、此の時又君ヶ代の奏樂起り一同最敬禮、かくて第三信號にて諸員悉く退散した。當日賜はりたる御諭旨と奉答文とは次のやうであつた。

御諭旨

愛國婦人會第三回總會ニ臨ミ親シク諸氏ト相見ルヲ欣ブ當支部ハ夙ニ會旨ノ普及ト會員ノ増加トニ努メ其ノ基礎年ト共ニ固ク其ノ業績亦見ル可キモノアリ殊ニ方今ノ時局ニ處シテ傷痍軍人及ビ遺族ノ慰藉、救護ノ實ヲ舉ゲテ、アルハ深ク満足スル所ナリ然レドモ本會ノ事業タルヤ尙ホ將來ニ於テ畫策施設ス可キモノ渺シトセズ諸氏益々戮力一致以テ新業ノ擴張ヲ計リ邦家ノ爲

奉 答 文

茲ニ愛國婦人會新潟縣支部第三回會員總會ヲ開カル、ニ當リマシテ越路ノ地ニ長クモ 總裁殿下ノ御臨臨ヲ仰ギマツリ而カモ優渥ナル御諭旨ヲ賜ハリマシタコトハ誠ニ恐懼感激ニ堪ヘナイ次第デ御座イマス

恭シク惟ヒマスニ本會ガ歳ヲ逐フテ益々隆昌ニ趨クニ隨ヒマシテ當支部モ亦微力乍ラモ會員ノ增加事業ノ實績等ニ於イテ聊カ其ノ發展ヲ見ルニ至リマシタコトハ是レ偏ニ 殿下御仁慈ノ餘馨ニ因ル所ト拜シマツル次第デ御座イマス

本日茲ニ御諭旨ヲ奉讀致シマシテ會員一同爾今益々協心戮力本會ノ精神ト各自ノ使命ヲ自覺シ重大ナル時局ニ處シテ國家ノ爲メニ赤誠ヲ捧ケ以テ憂慮ニ副ヒ奉ランコトヲ期スル次第デ御座イマス

昭和九年七月四日

愛國婦人會新潟縣支部長 千葉敏子

尙は此回來越の殿下の御隨員並に本會一行は

宮 附 別 當	高 橋	卓
事 務 官	會 賀	黒
御 用 取 扱	鮫 島	豊
		子 明

屬 女	二	名
侍 女	二	名
本 部 會 長	本 野 久	子
監 事	大 倉 繁	子
評 議 員	小 原 六	子
事 務 總 長	小 原 新	三
副 總 長	北 谷	亮
事 務 員	一	名

であつたが、殿下には總會場より直に新潟高等女學校に成らせられ二時七分御休憩室にて同校職員に拜謁を賜ひ授業の實況及び運動競技成績品等御覽の午後三時二十分同校御發、關屋田町三丁目當支部直營の保育所を御視察あらせられた申すも畏き極みである。

託兒所へは途中五分にて御着先づ休憩室にて支部長より所内の近況を聞召し、集まり来る託兒等に温き御言葉を賜ひ七分餘にして御歸還あらせられた、之で兩日の日程は残りなく終つたので、同夜は旅館で打寛がせられ新潟青年團の演する郷土藝術の御觀賞があつた。

翌七月五日には御思召によつて高田衛戍病院へは本野會長、新發田衛戍病院へは大倉監事が何れも傷病兵慰問の御使に立つたが、此の日殿下には驛の案内で佐渡關光の駕め御渡航遊ばされ、御二泊の上六日御歸港、御機嫌極めて喜ばしく七日御歸京の途に着かせられた。

本總會でも特別御下賜金を傷痍軍人並に遺族に頒つたことは申す迄もないが、一般來會者に記念品として竹笠舟形盆一

個外に御紋菓一箱に赤飯を添へ進呈した。

支部創立三十五週年記念

かゝる間にも昭和十一年は當支部結成第三十五週年に相當するので其の記念式を舉げ本會の趣旨を強調しようとの議が起り九月二十日役員間で左記の通り計畫を決定して順次之を實施した。

一、軍人遺族傷痍軍人慰安會 十月中新潟、新發田、佐渡、長岡、高田の五ヶ所に於いて之を開催し、遺家族傷痍軍人五千八百九十三名を招待し茶菓晝食を供し多くの餘興によつて一日の娛樂を與へた、就中長岡、高田の二ヶ所は縣後援會の共同主催であつた。

一、軍人家庭の表彰 多數軍人を一家より出したる家庭に對しそれ〴〵表彰狀に物品を添へ名譽を顯彰した。一家三名以上のもの九百八十一戸、四名以上のもの百二十五戸であつた。

一、記念式典舉行 十月二日支部樓上に於いて三十五週年記念式を舉行し關係者千八十名を招待し式中中央地方勞者並に優良分會の表彰をなした。

(イ) 功勞者の部

特別功勞者四名、二十五年勤続者二十一名、十五年同四十一名にして何れも感謝狀並に記念品を贈呈した。

(ロ) 優良分會の部

町村分會中會員數女子人口百分の十二以上にして事業見る可きものあるを標準とし、成績優良なりと認められた左記七分會に對し表彰狀並に彰功旗を贈與した。

中	蒲原郡	金津村分會
四	蒲原郡	地藏堂町分會
同		角田村分會
佐	渡郡	二宮村分會
同		澤根村分會
同		河崎村分會

三十五週年記念式を終つて當支部の事業は更に一段更生の段階に上つたやうに見えた。

中堅幹部講習會

支那事變勃發以來長期戦の覺悟と共に婦人の自覺を第一と考へ生活改善並に子弟修養指導精神の根本確立と軍事後援の徹底的實行を目標として十四年三月各都市より二名宛の婦人會幹部を集めて第一回の試みとして三日二泊にて講習をなした處、指導者は全部を引受けて指導すると共に世話し多大の精神感動を與へたので、歸郷後夫々大に活躍せらるゝと共に第二回開催の希望切なるものあり依つて十五年八月一日より三日間高田、八月四日より六日迄新潟で開催することとし募集したるに、高田百十五名、新潟百五十一名の數あり、兩地共高等女學校の寄宿舎を借受け指導者講師共共同生活をなして、朝五時起床、作業、遙拜、默禱、体操、神習等より夕食後懇談會迄實地に修養し特に本講習には時局に合一する爲め生活刷新事項を加へ講師榊原生活館長を聘し婦人の開發に資し、之れに依り分會發展並に事業一段の活氣を添へた。

第九章 支那事變から大東亞戦争へ

かゝる折柄昭和十二年七月七日の拂曉突如として起つた北支盧溝橋一發の銃聲から忽ち帝國と蔣政権との正面衝突となつて支那事變が此に勃發した、しかもその初め頃には大体急速に蔣介石が屈伏して短期間で片附くのではないかと一般の觀測であつたが、當支部では別に見る所あつて將來の長期戦を豫想し、會本來の使命に立戻つて銃後の施設に協力の萬全を期した、然るに同十六年十二月八日に至り局面は愈々擴大して一路大東亞戦争と進展したので之が對策に全力を擧げて邁進することゝなつた、それには第一に此の方面の實力の充實が極めて緊喫であるので、當支部としては先づ基金二萬五百餘圓の事業費繰入れを断行すると同時に事變繼續中は救護救濟準備資金の積立中止を宣し、一面從來各分會に交付しつゝあつた事業獎勵金を増額し、分會獨自に遺家族、傷病兵の生活救護に充てしむることゝして中央部分會を通じて徹底的の飛躍を試みた、何れにしても事變そのものが既往の日清日露兩戰役に十倍する大規模の動員計畫であり、且つ未曾有の長歲月に亘つた爲め理想の顯現に容易ならぬ點もあつたのだが、過去四十年の経験と十三萬會員一致の努力とによつてよく難關を切抜け社會の認識を受けた、かくして軍事援護事業の爲め支出せる費額は毎年の推定額約三萬一千四百七十五圓、之を運用して遂行した實況は左の通りである。

(A) 銃後援護事業

(一) 軍人遺家族の生活扶助

主として軍人遺家族の方面に對して行つたのであるが、

(イ) それ等の人々の中でも伯叔父母、甥、姪、内縁の妻、庶子、嫂等の方々に戸籍の關係上軍事扶助法或は銃後の會等から扶助を受ける資格のない方々を特に選り上げ實際問題として救護に着手し、毎日の生活費を調査し不足の分だけを出征者の歸郷する迄繼續補助したものと

(ロ) 全部の遺家族中で多少の財産や収入のある爲軍事扶助法の條項による譯には行かないが、借財をもつとか病人が出たとかいろいろの理由で見掛けよりは實際にお困りの方もあるので、さういふ方々に適當に繼續的或は一時的に補助して上げるのと兩方あつた、尙ほ法規によつて扶助申請の方々に許可ある迄の間困難せらるゝとか出征者が召集解除等になつて今迄の扶助は停止或は減らされたが歸郷後の就職口が一寸見當らぬとか、身體の故障が出来たとか、そんな事情の方々にも應急的救濟金を支出したのであるが、その累計は

(イ)の繼續的補助の方は次の通りであつた。

年 度	戸 數	人 員	金 額
昭和二年	四九	二七八	三、三九七圓
同 三年	六三	三四〇	七、七三二
同 四年	六三	三六九	六、五六二
同 五年	五五	二四五	五、一二七
同 六年	二八	一四三	一、三三二
計	二五八	一、三七五	二四、一五〇

本項十六年の減少は軍事救護の統一方針により帝國軍人後援會に於て統一の爲め支部は止むを得ざる者のみ繼續せるに依る。生活扶助の第二段としては(ロ)の一次的扶助に加へて現在扶助を受けつゝあるけれども、後に病人が出たり家庭的

の災難があつたりして彌が上にも生活の脅威を感ぜらるゝ向きや之に準ずる事情があつて過去には扶助を要しなかつたが當分の困難が酷いといふやうな方々にも喜んで扶助費又は見舞金を支出し應援したのである、そのこの一時的扶助の累計は次のやうになつてゐる。

年次	戸数	人員	金額
昭和十二年	三、一四六	二〇、八七二	七、三五九
同 十三年	一、四五二	九、五七五	一四、一二七
同 十四年	一、一二六	六、九八九	一〇、三二五
同 十五年	九、一七八	三六、九八六	一〇、〇二〇
同 十六年	一、二一四	二四、六七五	一〇、三二〇
計	一六、一一四	九九、〇九七	五二、一三一

(二) 罹災補助

罹災扶助も矢張り軍人遺家族に對して行つたもので同じく生活扶助といへば言へるが、之は要するに應急扶助で天災地變等による被害の場合應急の費用に扶助し復興を促進せしめる爲めのものである、これから引續いて生活扶助をせねばならぬやうなこともあるが、罹災扶助は罹災扶助として一旦打切り更に調査の上決定するのである、罹災扶助の累計は左の通りである。

年次	戸数	人員	金額
昭和十二年	二四	一二三	七七
同 十三年	三〇	一三一	一七二
同 十四年	三二	一〇一	二三五

同 十五年	一四	七六	一〇五
計	五八	四三一	五八九

(三) 生業資金補助

又全体を通じての生業資金を補助することもあつたがそれは一年にして止めた。

昭和十五年	六戸	三、一一一
-------	----	-------

(四) 出産扶助

當支部では又非常時下に於ける人的資源の増成に鑑み生めよ殖せよの國策に賛助し助産扶助の計畫を建てた、それは遺家族中での出産の場合はそれ／＼左記の規程に従つて扶助を爲すのであつた。

(イ) 伯叔母・姪、内縁の妻等で戸籍の關係上軍事扶助法に該當しない方に出産取扱料を支給し尙ほ産具をも無料で供給した。

(ロ) 縣統後會第二種扶助該當者で生計困難の向きへも前記同様の支給を爲した。

(ハ) 軍事扶助法該當者並に前二項以外の軍人家族に對しては産具入用の向きへだけそれを支給した。

以上の件數費額累計は左の通りである。

◇ 出産取扱料支給の分

年次	戸数	人員	金額
昭和十二年	二〇二	二〇二	一、〇一〇
同 十三年	三一一	三一一	一、二二八
同 十四年	一二七	一二七	六三五
同 十五年	一五三	一五三	六六五

同 計	一六六年	一二六	一二六	六二〇
昭 和	一二年	一〇二九	九一九	一四、一四八
昭 和	一三年	五二二	五二二	一、〇四二
同	一四年	六〇九	六〇九	一、二七八
同	一五年	一九〇	一九〇	五三九
同	一六年	一二六	一二六	六六〇
計		一、五九一	一、五九一	六三〇
				四、〇九四

◇分統用具支給の分

(五)乳幼児保護
同様の趣旨から當支部では乳幼児の保護も行った、それは遺家族で出産後母乳不足の爲め困難を感じらるゝ向きに申出でによつて生後浦一ヶ年迄牛乳を補給することにしたのである。之は國民保健上に大きな効果を及ぼす施設だったが、累計左の通りとなつてゐる。

昭 和	二 年	二 次	九 人員	七二〇 金額
同	三 年	三 次	一四三 人員	五、七六〇
同	四 年	四 次	一四二 人員	五、三二五
同	五 年	五 次	八九 人員	三、六三一
同	六 年	六 次	八八 人員	三、四七五
計			四七一 人員	一八、一八一

(六)營養費補給

同一目的と隣接傷病兵の慰安とを兼ねてその家庭に營養費の補給を爲した、之は直接傷病軍人その人の病後回復の速かならんことを祈つたばかりでなく、家族中の快癒期の病者等にも與へて健康増進の資とした。

昭 和	一 五 年	一 五 七 人	六一七〇 金額
同	一 六 年	一 六 人	七一
計		一七三	六八八

(七)傷病軍人家族病院面會旅費支給

事變の初めの頃はまだ纏まつた療養所なきが出来てゐなかつたので陸軍病院入院中の傷病將兵に對し、家族達が面會に行きたいと思つても旅費の才覚に悩んでなか／＼實行困難な場合がある、勿論先方でも待つてゐるであらうしそれが第一の慰安になるのだから兩方の心機を察しやつてさういふ方々の爲めに旅費を支給してやることにした、その結果は非常に好感をもたれた、件數費額の累計は左の通りである。

昭 和	一 二 年	一 五 一 戸數	一 五 九 人員	四四〇〇 金額
同	一 三 年	一 六 五	一 六 七	四七四
同	一 四 年	四 七	四 八	二五九
同	一 五 年	二 一	二 二	一六一
同	一 六 年	一 三	一 四	六八
計		三九七	四一〇	一、四〇二

(八) 傷痍軍人並に遺家族慰安會

當支部では機會に酬れてかういふ計畫を屢々した、其の年次並に金額は次の通りである。

昭和	一三年	七、二八〇圓
同	一四年	一八〇
同	一五年	二一〇

(九) 遺族並傷痍軍人家族見舞

之は昭和十二年に十六戸十九名に對し四十四圓を贈呈したが一年にて止めた。

(一〇) 出征軍人子弟教養費支給

出征軍人家族の家庭で世帯主不在の爲め子弟の學業を廢さねばならぬやうな事情のあるものには之によつて或る程度の費額を支給した、その累計は次の通りである。

年次	戸數	人員	金額
昭和二年	一四	一六	二四〇圓
同三年	一六	一八	一〇五四
同四年	二六	二八	一、〇四八
同五年	七	八	一、二六〇
同六年	五	五	四二〇
計	六五	七五	四、〇二二

以上は主として本來の銃後家庭の後援事業であつたが、之と並行して第一線に對する慰問激勵が着々行はれた。

(B) 前線感謝運動

(一) 派遣軍隊へ味噌梅干寄贈

派遣郷土部隊に越後味噌を嘗めさせたいといふ好意から味噌並に副食物を贈つた數量は左の如くである。

昭和	一二年	八〇樽
同	一三年	二二樽
同	一四年	二四樽
同	一五年	一五樽
同	一六年	一四樽
計		一五四樽

(二) 防寒用眞綿の送付

大陸の寒氣に暴露する將士諸氏の艱苦を思ひやつて前線に眞綿を送付した數量は次のやうであり、之は金額も最も嵩み極めて有効であつた。

年次	數量	金額
昭和二年	三百貫匁	一四、〇〇〇圓
同三年	二百三十六貫匁	一〇、〇三〇圓
同四年	百七十貫匁	一九、一四〇圓
同五年	百七十貫匁	一九、一四〇圓
同六年	十二貫匁	六五〇圓
計	八八八貫匁	六二、九六〇圓

(三) 酒肴料慰問品寄贈

同上郷土部隊へ富支部より酒肴料を贈呈した数字は左記の如く。

年次	回数	金額
昭和十二年	二二	七八八圓
同十三年	二七	九一七
同十四年	五三	一、三二三
同十五年	三三	九七一
同十六年	四	一五五
計	一三九	四、一五四

で、慰問品の寄贈は昭和十二年度に於いて映寫機、軍手、菓子、果物代金一、七三四圓、同十三年度に於いて手拭菓子、代金四四七圓、同十四年度に於いて菓子、新聞代金三四三圓、同十五年度に於いて菓子、代金八八圓、同十六年度に於いてシャツ、代金三百二〇圓等であったが、別に努力奉仕として慰問袋調製の手傳ひ方を全會員が手分けして行ったことが昭和十二年六個、同十三年一個に及んだ。

(四) 傷病軍人慰安

その他一般に傷病軍人に對しては最高の敬意を表し家庭の訪問は前記の如くであつたが、昭和十五年度に於ける傷病軍人会補助一五〇圓の他に直接本人に送つた見舞金も次の額に達した。

年次	人数	金額
昭和十二年	一、一五二	四、七六〇圓
同十三年	一、五〇一	四、二〇九

年次	回数	金額
昭和十二年	一	九三二
同十三年	一	三六三
同十四年	一	一〇二
計	三	一三、一六〇

更に富支部として病院に代表者を送つて親しく慰問を爲した回数は昭和一二年度四回、同十三年度九回、同十四年度六回、同十五年度八回、同十六年度五回であつて都度金品を贈呈した總額は次の如くである。

年次	金額
昭和十二年	三七五圓
同十三年	六七〇
同十四年	一、一〇〇
同十五年	五三五
同十六年	八三五
計	三、五一五

その他昭和十五年になつて新潟療養所が置かれてからそこに收容された人々に外出者一五〇着を贈つたがその代金は二千二百五〇圓であつた。

(五) 陣没者に對する弔慰

陣没英靈に對する弔慰にはもとより深甚の感謝を捧げ出来るだけのことを爲したが其の支出額は左の通りである。

年次	金額
昭和十二年	九、五六五圓

同	一三	年
同	一四	年
同	一五	年
同	一六	年
計		

一四、六一〇
八、五〇四
一一、八〇七
四、五〇五
三五、八四二

實に惜しみても尙ほ餘りある大東亞建設の犠牲である。

(六) 慰靈祭への供進

もとより此れ等護國の英靈に對し奉つては各地で丁重な慰靈祭、招魂祭等が行はれたが、當支部から慰靈祭に人を派して参拜せしめ供物を捧呈したことも多かつた、其の累計を擧げて見よう。

年次	回数	金額
昭和二年	二一	一、五九四圓
同三年	四三	四、九六〇
同四年	一七	七七三
同五年	一九	五六八
同六年	六	三一三
計	一〇六	八、二〇八

高田、新發田等の招魂社で毎年行はれる大祭に當支部から供物料を供進し、又遺家族の接待費に補助した額も少くはなかつた。

年次	金額
昭和二年	一八四圓
同三年	一三五
同四年	一八二
同五年	二七三
同六年	二五三
計	一、〇二七

(八) 來港軍艦歓迎

上記は大部分陸軍側に関するものなのであつたが、昭和一二年度以來來港した軍艦乗組の海軍將士に對しても左の歓迎を行つた。

年次	回数	金額
昭和二年	四	一、三五五圓
同三年	二	一三〇
同四年	二	一六二
同五年	二	一五三
同六年	三	一二九
計	三四	一、九二九

以上は前線に對する感謝運動の一端を記したもので、前段戦後の後援事業と相持ち本會創立以來の使命を完全に顯現したものであるが、中に昭和十二年度、同十三年度を最盛期として逐次事業を縮少したやうのもの、一二あるのは、事變が

長期に亘るに連れ動員計畫の移行により家庭の困難軽減せられたると、一には此の間軍事援後會の成立ありて從來當支部の卒先關係しつゝありし事項中同會に於いて經營せらるゝものも増加した爲めで、當支部ではこゝで節約し得た資金と一層の勞力奉仕とを以て新規の方面に活躍することになつたのである。今其の概略を擧げて見よう。

(C) 附帶事業

(一) 皇軍戰捷祈願祭

戦後の信念強化の爲め當支部の行事として皇軍戰捷祈願を中央部では毎年二回日を定め、地方分會でもそれ〴〵適當な最寄り神社に於いて舉行し、益々敬神崇祖の傳統的國民精神を發揮せしむることとした。

(二) 御歌保存額縁寄贈

事變の進行中長くも 皇后陛下より戦死英靈遺族に對し御歌色紙の御下賜があつたので、之が保存用として當支部では拜授者全部に亘り保存用額縁を寄贈した。この事は最後迄十七回を數へてゐるが支出した金額全部を表示すると左の通りである。

第一回	一二八四圓	第二回	三〇一圓	第三回	三六三圓	第四回	九七圓
第五回	三一七圓	第六回	二二圓	第七回	五九九圓	第八回	一三九圓
第九回	一〇四圓	第十回	二一〇圓	第十一回	三五〇圓	第十二回	六五〇圓
第十三回	四八三圓	第十四回	五七〇圓	第十五回	三二二圓	第十六回	一九〇圓
第十七回	三九四圓						
計	六、〇九三圓						

(三) 滿蒙方面農墾移民及開拓青少年義勇軍慰問

忠勇なる皇軍の見敵必勝の戦果を更に意義あらしむるものは大東亞共榮圈内の建設運動でなければならぬ。我等の土の勇士はこの點に於いて軍隊の健闘にも劣らぬ時代の功勞者であるから之に對して左の通り慰問を行った。

年次	人員	金額
昭和 一二年	一、七六九	三六二圓
同 一三年	八、九二四	五六三
同 一四年	七、九四八	四〇七
同 一五年	三、三七九	二三四
同 一六年	一、七八三	一三一
計	二二、八〇三	一、六九七

(四) 本會趣旨宣傳

すべてこれ等の事業の理想完遂の爲めに必要なものは資金であり勞力であるから、それを獲得す可く當支部の基礎を強化することがこゝで先決問題となつて、支部職員はこの機會を利用し一般家庭の啓蒙運動を兼ね本會の趣旨宣傳に努むることとした。之が手段として十四年中トーキー活動映寫機一台代金二千五百圓、附屬フィルム若干代金一千圓を購入し、中央から特に各地へ事務員が出張したり、分會に貸附けたりして大に會勢の擴張を呼號したが、相當得る所があつたに思はれる、このトーキー映寫機は後に別項記する所の愛國貯金奨励にも轉用した。

(D) 統後の積極事業

支那事變並に大東亞戰爭期間を通じて當支部に於いて企劃した統後の積極事業が二つあつた、その一つは

(一) 愛國貯金

の創成及び奨励で地區毎に重立つた會員が中心となつて組合を作り、一口金五十錢宛一人擲口でも三年間を一期として毎月之を取纏め郵便局に貯金し貯蓄奉公の國策に副ふことにしたのである。最初第一期の統計は左の通りで

年次	口数	貯金額
昭和一三年	三、八一七〇	一一、〇四五圓
同 一四年	五、〇一七	二六、〇九六
同 一五年	一一、二六八	四四、一三四

實に夥だしい増加率であるが、本會最後の頃は既に第二期に入つて新たなる募集に眞手してゐた、他の一つは

(二) 飛行機愛國婦人號献納運動

で、昭和十五年十二月本會四十周年記念事業として本部に於いて陸海軍へ戦闘機數隻の献納を計畫されたが、その費用として全國より三百萬圓以上の贈金を得たいといふので當支部へも資格に應じ最低二萬五千圓以上の割當てが指令されて來た、そこで支部は取敢て十二月二十六日各市町村の分會に通牒し會員總數十一萬餘人に對し一口十錢宛二口基準で約二萬圓、之に特志寄附者一人五十圓宛として百口五千圓を加へて額面を充たすことにしそれ／＼依頼した、本部の趣意書は左掲の如きものであつた。

愛國婦人會創立四十周年記念

軍用機獻納趣意書

我が國は、今や國を擧げて大東亞新秩序建設の爲に戦ふこと四年に及びました。我が愛國婦人會は夙に、國家の方針に協力し特に事變以來、本會の重大使命たる軍事援護事業につき、會員の皆様は申すに及ばず、一般からの御援助により、全力を擧げ、之が目的の完遂に萬全を期して居ります。

かかる事變の眞只中に於て、昭和十六年は、不世出の女傑奥村五百子女史の主唱により、本會が創立されました。恰も四十周年を迎へることにになりました。

本會は、此の記念すべき極めて意義深き年に當り、六百萬全會員一致の力により、尙ほ全國有志の方々の御参加を得、記念事業の一として、軍器を政府に献納し、もつて萬度國防國家建設の一助たらしめたいと存じます。

乃ち、會員の皆様には、一人陸らず、一口(十錢)二口、三口、又は其れ以上の出捐を御願すると共に、有志の御共鳴をも請ひ、かくて少なくとも、總額百五十拾萬圓以上の資金を得軍用機二十臺以上の献納を最少限度の目標とし、昭和十六年三月二日即ち本會創立四十周年の記念日に、之が結果を發表いたしたいと存じます。

何卒會員の皆様及び有志の各位に於かれましては、右の趣旨に御賛同下さいまして、本計畫をして美事な成果を取めしむるやう切にお願ひいたします。

昭和十五年十二月

愛國婦人會

然るに本運動が時節柄最も便宜を得たものであつた爲め一般會員並に特志家の熱烈なる贊助相繼ぎ締切り期日迄には略ぼ豫定額の二倍に近き四萬餘圓の寄附を得直に本部に送付したが、其の後の報道によると全國各地共非常に優良な成績で

結局四百五十萬圓以上集つたとか、それを本部で陸海軍兩省へ對しそれ〴〵献納の手續を取り兩省では同年九月廿日の航空デー當日東京羽田飛行場に於いて命名式を舉行せられた、我れ等の至誠に成つた愛國婦人號がそれである。全機がかくして初めて中空に飛んだ時参列會員一同は恐らく感激の腫を濕はし乍ら仰ぎ見上げたものだらう、あゝ大空の板額、巴と呼ばれる愛國婦人機!!今は何處の戦線の上を翔つてゐるであらう、これ迄とても必ずや赫々の武勳を建てたに相違ない、本會の國家に貢献した好箇の記念である。

(F) 一般社會事業

軍事後援事業と相表裏して本會の後半努力した所に一般社會事業がある、それはこの期間でも幾ます盡瘁を續けた次第であるが、非常時下の厚生運動を主として公徳養成、文化の方面にも及んでゐる。

(一) 保育事業

之は大正十四年十二月より經營を開始し昭和九年第三回總會の際までは託兒所と稱へ市内代表的なものに付 總裁官殿下の御視察を辱うした歴史をもつものであるが後に保育所と改稱しこの頃には左記のやうに擴張されてゐた。

年次	個數	金額
昭和二年	三	四、八五四圓
同三年	三	五、八〇五
同四年	三	六、三六九
同五年	三	六、三六九
▲通年保育所		

同 一六年	一五三	六、三八〇
計	一五	二九、七七七

▲季節保育所

年次	個數	金額
昭和二年	四二	三、六二五圓
同三年	七一	九、五四七
同四年	一七〇	二五、四九四
同五年	一二〇	二四、一六六
同六年	一四六	二六、九六七
計	五五〇	八九、七九九

通年は都市で一年を通じ毎日幼児の委託を受くるもの、季節は農山漁村で農繁期等の一定季節を限りて同様の事務をこなすものである。季節保育所の方が昭和十二年の四三ヶ所から急激に百五七ヶ所に及んだ所を見ても如何に時代の要求として其の施設が歓迎されたかを見るに足らう。

(二) 妊産婦保護

出征軍人遺家族の出産保護に就いては既記したが、本項の分はそれを一般家庭の貧困者に及ぼしたもので左の通りの果計が出てゐる。

年次	戸數	金額
昭和二年	五一戸	一七八圓

同 一三
同 一四
同 一五
同 一六

五七
五八
五三
二八
二二

二二八
二九〇
二五〇
四〇
七八六

(口) 産具支給

昭 和 年 次

戸 数

金 額

同 一三
同 一四
同 一五
同 一六

二三五
二四一
五六
五〇
六
五八八

四七〇
七五〇
四六八
二二五
三〇
一、九四三

(三) 災害救済

今期間に行つた災害救済は左の如くであつた。

昭 和 一 二 年

火災見舞二回

二二八圓

同 一 三 年

二回

二二八

同 一 四 年

三回

一九〇

(四) 講習講話會分會總會

計

七回

六二六

尙ほ今期間に於いて家庭教化或は副業奨励等の爲め行つた講話講習會は左の如くで活動映寫會も亦屢々利用した。

昭 和 一 二 年
同 一 三 年
同 一 四 年
同 一 五 年
同 一 六 年

講習會
四
二
三
二
四二九

講話會
四
二
三
五
二

映寫會
二八
一七
五七
四九
〇
一五一

この他すべて時代の潮流と緊密なる關係を保つて選挙禁止運動、國民精神總動員、婦人報國運動、日の皇子の御祝日の實施宣傳、兒童愛護週間運動等に参加或は獨力を以て奮闘した。就中日の皇子の御祝日は本會の特に高揚した所で日嗣の皇子即ち 皇太子殿下御降臨の祝日を制定せんとする運動であつた。

(五)

以上の業績を完遂する爲めには各分會と連絡の必要を痛感し此の期間分會總會或は役員懇談會を開くもの昭和十二年には總會三十二、懇談會八、同十三年には總會四十八、懇談會四、同十四年には總會五十二、懇談會三、同十五年には總會四十四、懇談會四、同十六年には總會二十六に達した。
尙ほ機關紙新潟愛國婦人を毎月一回發行して中央地方の連絡に實したのは昭和十三年九月一日からであつたが、同十七年二月婦人團體統合の機運現はるゝや惜しくも廢刊した。

紀元二千六百年式典並二四十週年記念

一億國民の歡喜と感激に沸き奉る曠古の盛典は昭和十五年十一月十日午前十一時宮城外苑に天皇、皇后兩陛下を仰ぎて殿前に行された、此盛儀に列する光榮に浴したる本會支部役員は安井支部長、久慈副長、澤田、北村評議員外に塚田主事の五氏、賜褒の光榮に感激、陛下の高齡を三唱し悠久なる皇國に歡喜の涙して歸らる。同月十八日には支部に於て紀元二千六百年奉祝式を舉行すると共に四十年記念式を新潟市公會堂に舉行、本部よりは金子副會長參列この佳き日に有功章の傳達及特別功勞者並多年勤続者、優良分會表彰、優良愛國貯金組合表彰ありたり。

式次第

- 一、開式ノ辭
- 二、宮城遙拜
- 三、歌
- 四、國歌合唱
- 五、朗誦奉讀
- 六、頌歌齊唱
- 七、總裁陛下御寫眞開扉
- 八、讀旨奉讀
- 九、閉 扉
- 一〇、式 辭
- 一一、表 彰
- 一二、被表彰者挨拶
- 一三、來賓祝辭
- 一四、會歌合唱
- 一五、萬歲三唱
- 一六、閉式ノ辭

此日參集するもの千餘名、午前中金子副會長より有功章傳達されしもの五百名、午後一時より式次第により進めらる。光輝ある祖國日本の歴史を偲び生きて今日の日に逢へる幸福をたへつゝ表彰を受くる會員の満足さは更に明日の活動を面上に明るく表はしつゝあつた。

被表彰分會は新潟市愛國婦人會外三十七分會、特別功勞者として中村しげ子、松本美木枝、澤田イツ、北村キイ四氏外五六名略、多年勤続者として櫻井眞吾氏外百三十八名、終つて優良愛國貯金組合五分會に夫々表彰狀並に記念品を授與せ

られ午後三時半嬉々として各家途につく。

本會四十周年記念式は昭和十六年三月二日創立記念日に東京共立公會堂に於て舉行せらる。支部代表として土居支部長、塚田主事、被表彰者として澤田イツ、北村キイ、井上まつ三評議員、金津村分會長和氣ヒデ、支部職員として高橋主事補參列、午後一時三十分諸員最敬禮中に、總裁官殿下御着、二時開會せらる。御讀旨を賜はり會員一同四十年の輝く歴史に、思出深き過ぎし日を偲びて會員の眼には涙あり感激の中に夫々表彰狀を授與せられ、報告、宣言ありて、殿卜御邊塲小笠原子爵の「在りし日の奥村會祖のことども」今更の如く胸をつくものあり、最後に春野百合子の浪曲「奥村會祖」に感激一しは深く既に統合問題をめぐりて本會に一層の愛着を感じつゝ四時退散、思ひなしか此日雨しきりに降る。

第十章 記念事業計畫

支那事變並に大東亞戰爭の勃發に際して當支部が體面的に會本來の理想を顯現した實績は以上の如くであるが、此の間昭和十五年は恰かも皇紀二千六百年に該當したので全體的に種々の記念事業が計畫された、當支部でも中央の會員倍加運動に呼應すると共に別に獨立的に其の施設を決定せんと欲し、昭和十二年六月十日午前十時より支部評議員會を開議したのであつたが、之が結果はすべてを重點主義によることとなり、高く左記四項目を掲げ、全會員協力一致邁進す可くそれゝ依頼狀を發送した。

(一) 高田、新發田兩陸軍病院に日光浴室献納之件

昭和十二年四月特に滿洲守備に派遣されたのは我が第二師團であつたが、此の頃既に日支間の風雲極かならざる感

があつたので、傷病軍人に同情の一方案として之を献納し、戦後婦人の真心を呈示せんとしたもので、記念事業は記念事業としても一日も早く実現したいといふ語に纏まり、同十三年六月四日工事完成し各献納式を舉行することが出来た、この二棟分の経費は内容の整備ラジオセット等を加へて五千餘圓であつたが、更に同年村松分院の設置を見たのでこゝにも献納することとなり昭和十四年十一月八日工事を完成した、工費是れ亦二千五百餘圓を要した。

(二) 軍人遺族母子寮建設

軍人遺族母子寮建設は最初は愛國寮として一層廣義な事業を開始したい希望であつたが資金の關係その他でまだ理想通りの發展は得られない、併し光榮ある遺族のかよわき寡婦と孤兒のみで浮世の荒波を渡いで行かねばならぬういふ人達を保護して之に安住の地を與へ後顧の憂なからしむることは戦後國民の最大な義務でなければならぬ、當支部は記念事業として徹底的な關心を之に係けた。

(三) 事務所の獨立

當支部の事務所は前記の如く第一期には縣廳内に分散して置かれ、第二期となつて漸く赤十字支部の一室を借りることとなつたのであるが、その頃は赤十字主事が當支部主事を兼任する例となつてゐた、然るに最近となつては當支部の獨立が完全に認められ、主事も専任となつた上年々の會員増加或は事務の擴張に伴うて職員數も必然的に倍増してゐるので一室を借りたのでは極めて不便であり、且つ母子寮が出来れば自ら其の監督も必要となつて來るので、此の際愛國寮即ち母子寮と共に建築す可しとの提案が可決されたのであつた。

(四) 駐滿部隊慰問

前述の如く郷土陣團が當時駐滿中であつた、で軍と打合せを行ひ適當な時機に於いて當支部から職員を派して現地の慰問を實行しようとするのであつたが、之は後々軍の都合で取止めることとなり、中村知事縣民代表渡瀨の際囑托し

手輕に公約を果たして頂いた。

大体右のやうな状況で之に要する資金は會員諸師の熱誠に訴へすべて寄附金によることとして、六月二十二日附を以て市愛國婦人會長並に町村分會會長宛に支部長から次の依頼狀を發送した。

昭和十二年六月二十二日

支 部 長

市愛國婦人會長 殿
町村分會會長

特志寄附募集に関する件

愈々御清愛會務のため御盡瘁下され奉感謝候
陳者兼ねて高田、新發田兩陸軍病院より要望相成居候日光浴室の建築寄附並駐滿部隊慰問使派遣、愛國寮建設に關しては差しかゝりたる當面の支部事業として己むを得ざるものと認め去る十日支部評議員會の協議を経之れが遂行に關しては特志寄附を仰ぐこと、相成候就ては時節柄目又御多用中御迷惑至極と存候へ共報國の爲皆様の御盡力によりその目的を達成致し度候條左記費分會割當額貴部内特志の寄附相續り候様御高配下され度及御依頼候也

七月二十八日日光浴室設計並に場所に關し高田、新發田兩病院長に依頼す。

かくて日光浴室は昭和十四年中に悉皆献納済みとなり軍からも大いに感謝を受けたが支部長の献納の辭は次のやうで、

日光浴室献納の辭

六八

青葉薫る快き日に日光浴室の工事完成を見て茲に献納の式を舉行いたしますことは支部會員一同の慶びに堪へない處であります。

願ふに病院内に病を養はるゝ勇士の方々は懸なる醫振手當を受け居らるゝことは申せ軍國に捧げらるゝ貴きお自分を療養に日を暮さるゝことは如何に無念焦慮して居らるゝかを想ふ時妾等會員一同は手を拱きて御免過こしするに忍びず一日も早く健康を回復せられ一は軍務を充分に勤められ一は健全なる國民として社會に活動せられんことを希ふために醫療の御手傳をいたしたいと考究もし御指導も受けました結果日射鈔き我が北國の地は日光浴室を設備するに如かずと思ひ立ち昭和十二年議を決して爾來資金融出の策を講じ献納許可を得陸軍病院並第二師團當局の特別の御盡力によりよしてこゝに完成を賜献納するに至りましたことは一同の感謝に堪へない次第であります。莫くば病院御當局に於かれましては妾共の意のある處を了せられさゝやかの規模のものではありますが充分御利用下さいます様御願ひ致します。一言申述べまして献納の辭と致します。

昭和十三年六月四日

支 部 長

會員の満足一方ならざるものがあつたが、一方愛國寮の方は建築敷地も新潟市東中通一番町舊縣廳跡の拂下げを乞ひ設計を山田縣技師伊藤三枝手に囑托し四萬四千八百圓の巨費を投じ藤田友治氏請負ひの下に十五年十月三十日地鎮祭を行ひ直に工事に着手したが、扱て寄附金の集まり方が聊か意の如くでなかつた、それで十五年中改めて左記の激勵文を發したが、支部の精神がはつきり此の中に籠つてゐる。

軍人遺族母子寮建設に就て

愛國婦人會新潟縣支部

輝かしき皇紀二千六百年を迎へ皇國の彌榮を想ふとき自ら精神の躍動を禁じ得ないものがあります。事變も第四年に入り興亞の聖業着々と進捗しつゝありますすが之が完遂迄には前途猶遠慮であり吾國民は更に一段の緊張と困苦缺乏に耐ゆる覺悟を新にせねばならぬことと存じます。而して祖國の急に應じて我等の爲に戦線
の華と散り又傷つかれし勇士の方々及御遺族に對し常に敬虔の念を捧ぐると共に深き理解を持つて之れが援護に當ることは婦人として相應しき事業と存じます。

當支部は豫て今日に備ふる爲事變勃發の昭和十二年紀元二千六百年記念事業として

一、日光浴室の献納

二、愛國寮建設

の二大事業を計畫し縣内各市町村に依頼し篤志者の援助を求めました處故中野忠太郎氏の金五千圓を始めとし約壹萬八千圓に達しましたので先以て日光浴室は金七千五百餘圓を支出し昭和十三年新發田、高田、昭和十四年村松の三陸軍病院に献納を了し戦傷病軍人の治療上に多大の効果を齎して居ることと信じます。愛國寮建設は資金の都合により未だ其端緒を得たるに過ぎない現状でありますが右愛國寮は軍人遺族母子ホームを含むものでありまして縣内遺族の中で母子のみで寄邊も無く世の荒波と誘惑とに耐へつゝある方々に安住の地を與へ愛婦の温き手と力を以て之れを保護するため居室の外幼兒の爲に保育所、母の爲めに共同作業場をも設置し更に傷痍軍人の配偶者轉座、軍事看護事業遂行上必要なる事務室をも加設せんとするもので

ありまして、事變長期對策として焦眉の急を要する好個の記念事業と存ぜられますので本年中には是非共建設を竣り事業を開始致度い希望で既に舊縣廢敗地の一部を拂下げ目下建物の設計中でありまして之等經費は約五萬圓を要する見込で御座います。

希くば千載一遇の此の記念すべき秋に遭遇せられましたことを祝福せられ愛國の至情に依り殉國勇士遺族救護の殿堂たる愛國寮建設のため出費御多端の折とは存じますが此際是非共一臂の御援助を賜はります様御依頼申上げる次第であります。

その中に各分會有志の時局認識の奮動によつて醜金は豫想以上に集まり工事も着々進捗して昭和十六年四月廿七日には愈々竣成する運びとなり、同年六月十日午前八時半より新築家屋に於いて落成奉告祭を舉行し、更に十時より市公會堂に移つて盛大なる竣工式を擧げた、當日の來會者は來賓知事以下七十五名有功章拜授者七名、功勞表彰者二十三名、役員三十五名町村分會長等五百餘名で、左記順序で無事式典を終つた。

- 一、入 場
- 二、開 式 の 辭
- 三、宮 城 遙 拜
- 四、歌 謠
- 五、國 歌 奉 唱
- 六、諭 旨 奉 讀
- 七、式 辭
- 八、工 事 報 告

九、感謝狀記念品贈呈

十、祝 辭……本會長、知事、聯隊區司令官、海軍人事部長、新潟市長、赤十字支部長、縣會議長、町村

長會長等諸閣下並に諸君、祝宴披露

十一、閉 式 の 辭

十二、祝 宴

終つて母子寮、會館等を參觀し隨意散會した、當日支部の式辭は左の通りであつた。

式 詞

本日ノ佳キ日ヲトシ當支部愛國母子寮並會館竣工式ヲ舉行致シマシタ所御多用中ニモ拘ラズ多數來賓各位ノ御來臨ヲ辱ノシマシタコトハ洵ニ感謝ノ至リニ堪ヘマセン改メテ申上ル迄モナク愛國婦人會ハ創立以來軍事後援事業ヲ始メ母性及幼兒ヲ對象トスル社會事業並婦人報國運動ノ目標ト致シテ居ルノデ御座イマスガ今次事變勃發以來軍人遺族家族ノ慰問慰藉並保護等ニ付テハ政府ノ施設ト相俟ツテ萬全ヲ期シ特ニ寄遊ナキ母子ノ保護施設ハ最モ緊要ナル事業ト存セラレマスノデ去ル昭和十二年中紀元二千六百年記念事業ノ一トシテ母子寮ヲ建築シ併セテ支部事務所ハ從來日本赤十字社新潟支部ノ一部ヲ借用シアリシモ會勢伸展ニ伴ヒ狹隘ヲ來シ不便不堪ナルニ付會館ヲ附設スルノ計畫ヲ樹テラレタノデ御座イマス爾來歴代支部長殿始メ支部分會役員皆様ノ涙クマシイ御盡力ト本部ノ御援助ニ依リ資金モ纏マリ敷地ハ本縣ノ御厚意ニヨリ舊縣廳跡ヲ拂下ゲ又工事ハ本縣建築課山田技師、伊藤技手殿ニ委囑シテ細密ナル設計監督ノ下ニ愈々昨年十月三十日工ヲ起スニ至ツタノデ御座イマスガ時局稍資材拂底ノ際ニモ不拘監督員ノ精勵ト藤田副員ノ義俠的努力ニ依リ工

事ハ極メテ順調ニ進捗シ内容外觀共ニ堅牢且ツ壯麗ナル屋舎ノ竣功ヲ見マシタコトハ御同慶ニ存ジマスト同時ニ關係皆様ニ對シマシテ衷心感謝申上ゲル次第御座イマス
 私共當局者ハ今後コノ新シイ母子寮ノ使命昂揚ト新事務所ニ於テ能率ノ増進ヲ圖リ各種事業ノ圓滿ナル遂行ヲ期シ以テ本會使命達成ノ爲精進シ又皆様ノ御厚配ニ御酬ヘシタイト念願致シテ居リマス何卒皆様ニ於カレマシテハ將來一層ノ御支援ヲ賜ハラント御願ヒ申上マシテ式辭ト致シマス
 昭和十六年六月十日

支 部 長 土 居 さ ぬ る

工 事 報 告

愛國母子寮並會館建築工事功ヲ竣ヘ本日茲ニ其落成ノ式典ヲ舉行セラル、ニ當リマシテ工事ノ概要ヲ報告致シマスコトハ誠ニ光榮トスル所デアリマス
 本工事ハ昭和十五年十月十五日指名競争入札ニ依リ工ヲ起シ昭和十六年四月十八日落成シタノデアリマス此ノ建築延面積二四六坪二八デアリマシテ内寮本館一〇七坪、附屬建物六二坪〇六、會館事務室其他七七坪二二、其他門柵、給水、排水、電燈、瓦斯、暗幕設備工事等デアリマシテ此工費五萬餘千圓餘ヲ要シマシタ
 本建物ハ寮、會館共木造二階建、附屬家平家建、寮室十五ニシテ各専用ノ電燈、瓦斯、水道設備アル炊事場ヲ有シ、授産場ニハ會館二階ノ廣間ヲ兼用スルコト、致シマンタ
 建物ハ堅牢ヲ旨トシ各室ノ配置採光通風等ニ意ヲ用ヒ使用上便利ナル機努メタ次第デアリマス
 茲ニ其落成ヲ見ルニ至リマシタ事ハ幹部ノ御指導ハモトヨリ當事者ノ努力ト關係各位ノ熱心ナル御後援ノ賜

ト深く感謝ナル次第デアリマス
 右工事ノ概要ヲ報告致シマス

工 事 囑 託 新 潟 縣 學 校 管 轄 技 師 山 田 良 好

愛國母子寮の實現によつて當支部の統後奉公の中心點が初めて定まつたといふてよい、それは從來のやうに一時的の救済でなく根本的に遺家族の獨立を助成して行かうとするのであるが必要上次の規定を設けてゐる。

愛 國 母 子 寮 規 程

愛 國 婦 人 會 新 潟 縣 支 部

一、名 稱

愛國婦人會新潟縣支部愛國母子寮ト稱ス

一、目 的

當寮ハ軍人及之ニ準スベキ者ノ遺族、家族等ヲ收容シテ勤勞精神ヲ涵養シ社會的、經濟的ニ獨立自營シ得ル職業輔導ヲ爲スヲ目的トス

一、入 寮 及 退 寮

當寮ニ收容シ得ル者ハ本縣在住者ニシテ愛國婦人分會長、市町村長、本縣又ハ軍事援護團體長ノ推薦ニ係ル左記各號ノ一ニ該當スルモノトス

- 一、戰病殘軍人若シクハ之ニ準ズル者ノ子女アル婦人ニシテ之レト共ニ入寮ヲ要スル者
- 一、軍人家族タル女子等ニシテ職業輔導上特ニ宿舍ノ供與ヲ必要トスル者

入寮ヲ希望スル者ハ別記様式ノ入寮申込書ニ戸籍謄本ヲ添ヘ所轄市町村長ヲ經テ提出スルモノトス但シ本縣ノ推薦ニ係ル者ハ之ニ依ラザルコトヲ得

入寮ヲ認定セル場合ニ於テハ入寮期日ヲ定メテ之ヲ本人並關係者ニ通知ス
在寮中ハ一家族ニ對シ一室ヲ貸與ス但シ時宜ニ依リ之ニ依ラザルコトアルベシ
在寮ノ期間ハ一箇年ヲ以テ一期トス但シ特別ノ事情アル場合ハ此限ニアラズ
左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ隨時退寮セシム

- 一、在寮期間ノ滿了セル者
- 二、支部ニ於テ在寮ノ必要ナシト認めタル者
- 三、退寮ヲ申出タル者
- 四、在寮ノ子女ニシテ國民學校(小學校)ヲ終了シタル男子
- 五、本事業ニ支障ヲ及ボス虞アリト認めタル者

一、職業輔導ノ種目

當分ノ間左記種目トシ之レガ習得ニ要スル費用ハ各自辨トス但シ事情ニヨリ其ノ一部ヲ補助スルコトアルベシ
和洋裁縫 各種手藝 産 婆 看護婦
保 姆 調 養 生 産 花 茶ノ湯等

一、入寮者負擔經費

- 一、入寮者ハ毎月末日迄ニ左記料金ヲ納入スルモノトス
- 1、寮料ハ十ヶ月金參圓トス但シ一ヶ月ニ滿タザルトキハ日割計算トス

ロ、電燈、瓦斯、水道料金ハ月末ニ於テ之ガ計算ヲナシ徴收スルモ月額參圓ヲ越ヘザルモノトス

二、在寮者ノ生活費ハ自辨トシ用具ハ備付品以外ハ各自持參スルモノトス

- 一、本寮ニハ左ノ職員ヲ置ク
 - 一、寮 長 一 名 寮長ハ母子寮一切ノ責任者トス
 - 二、寮 母 一 名 寮母ハ寮長ノ指揮ニ隨ヘ收容母子一切ノ監督、指導、保護ニ當ルモノトス
其ノ細則ハ別ニ之ヲ定ム
 - 三、囑託醫 二 名 (小兒科、内科)
收容母子ノ保健、衛生ヲ掌ル
 - 四、囑託保姆 一 名
 - 五、職業輔導囑託必要ニ應ジテ囑託ス

母子寮入寮申込書

本 籍		現住所		軍人タル		夫ノ氏名官等	
未亡人タル		妻ノ氏名		生 年 月 日			

家族	長男 二男 三男	長女 二女 三女	(以上ノ中母子寮ニ同伴スベキ) (モノニハ朱條線ヲ附スベシ) 注意 十三歳以上ノ男子ハ同伴出来ズ
氏名	三男	三女	
夫戦病死 後ノ家器 情 况	一時賜金 遺 族 扶助料	金 年額金	現在所有高金 使用レタル額ノ用途
他ニ資産アラバ記入			
未亡人ノ履歴 並ニ職業希望	學 歴 職業アラバ記入	卒業又ハ修業年月記入 補導ヲ受クル職業希望	
右入寮希望ニ付申込候也	年 月 日	住 所 本人 氏 名	氏 名
愛國婦人會新潟縣支部長 右者入寮ノ必要ヲ認メ及推薦候也	年 月 日	身元引受人 氏 名	市町村長又ハ愛婦何分會長印

母子寮現在の入寮者は六戸であるが、何れも睦み合ひ、嬉々として淋しい生活を楽しんでゐる。

第十一章 婦人団体の統合に就いて

大東亞戦争の劈頭に於いて銃後の國民組織問題は一國國家新體制運動に迄進轉した。所謂全體主義的精神下の機構總動員である。本會が皇國婦人國家的団体の嚆矢であつたことは前にも述べたが、其の歴史が餘りにも古く、創立者の顔觸れが當時の時代色に囚はれて稍々上層階級に偏してゐた爲め、一面上品典雅の傳統を誇るものはあつたが、半面何となく擴張の限界をもつやうな一般の誤解を免れなかつた。そこで支那事變の初め頃本會とは別に國防婦人會と稱する一團體が出来たが勿論對立的團體でも何でもなく、本會が前述の如く逐次内容の整備するに連れ着々重點主義を取つて恒久的厚生經濟施設の方面に全力を注ぐ傾向となつて來たので何となく當面の軍務に對する奉仕を閑却するやうに考へ、それこれいろいろの事情から支持する向きもあつて全面的に普及したのであつたが、さういふものが出来て見ると元來の目的が同一である爲め却つて屋上屋を架するの嫌ひも叫ばれ、各己の獨自性が強く主張されて意外な障礙が隨所に頻發した。そこで兩者の一元化は夙に識者間の懸案となつたが、相互間に既に立場の相違が生じてなかく解決困難の状態となつてゐたのであつた。然るに昭和十六年二月十三日衆議院の議場に於いて之に對する建議案が遂に取上げられ、政府當局からも一應の答辯を與へた、それが直接動機となつて爾來關係官廳たる陸海軍、厚生、内務、文部、拓務六省間で問題の具体化方を研究し、最後に十分なる成案を得たので六月十日の閣議で大綱を決定發表した、併し政府自身では必ずしも之を強要せ

中大政實曾會が幹旋役となつて其の意向を兩者に傳へ共に解散して新團體を作り對等の地位で参加することにしたので、過去四十年の歴史を顧みると流石に感慨の深きものはあつたが、時代認識の上に新らしき更生の道を辿ることが寧ろ國家の前途に貢献ありとして本會は深く實曾會の徳意に應じた、希臘神話にいふ神の鳥フェニックスは五百年に一度自己のからだを祭壇の淨火の中に投じて羽翼の汚れを焼き常に若く新しく不朽の生命に返ると説かれてゐるが本會の決意も畢竟はそれに他ならなかつた。

かくして同二十五日に第一回の新婦人團體結成準備委員會が開かれ本會より會長、副會長、事務總長は準備委員、事務副長は事務連絡委員として出席し、綱目を決定するまで前後十四回の會合を重ね五ヶ月餘の日子を費して同年十一月二十八最終の會議を終つた、定款其の他組織規程等の大体の重要な綱目がすべて圓滿裡に協定せられたのであつた、而して其の翌年即ち本年一月廿七日政府の幹旋により新團體結成發企人會が開催され會長、副會長、理事、審議員、監事、參與等役員の人選が決定され、愈々二月二日に大日本婦人會が生れ出た、

本會は此の過程に對應して昨年五月以來頻々と顧問會議、理事會、評議員、地方本支部長會議、東京市内分會長會議等を主催して其の意向を實し手續きに萬遺漏なきを期せられたのであつたが、之に地方別主要職員會議、幹部懇談會等を合すると前後の會合は實に數十回に及んでゐる、かくて愈々終幕の光輝を添へる爲めに昨年八月六日に會員臨時總會を招集し其の旨を披露し定款改正を財團法人奥村五百子顯彰會設立の件を附議して可決確定したのであつた、正に是れ自らを犠牲として舉國一致の新體勢に順應した行爲であつた、奥村會祖も定めし地下に莞爾として微笑を洩らされてゐるであらう、顯彰會は二月三日文部大臣の許可を得今後は寄附行爲によつて一定の後援事業を爲すのであるが、之は會祖の偉大なる足跡に對する感謝塔であると同時に本會四十年の崇高な體驗の貴き記念塔でもあるのである。

本會が既に解散に一致したのであるから當支部として折角手を附けたばかりの仕事に多少の愛着はあるがさうしても大

勢に従つて行くより他はない、そこで本部の指令もあつたので經營中の事業並に保有財産の處置に就いては最も適切妥當な方法を講じ母子寮及び保育所の將來は左の通り取計つた。

- 一、母子寮並會館(敷地共)はこの儘本縣社會事業協會へ引續ぐ。
- 一、新潟保育所は新潟市社會事業助成會へ、長岡、高田兩保育所もそれ／＼當該市又は社會事業助成會へ移管、事業を繼續されることゝす。

同時に蓄積財産の處分案に關しては解散記念事業として

- 一、新潟縣護國神社石鳥居寄附
- 一、傷痍軍人療養所附屬愛國寮獻納
- 在柏崎市傷痍軍人新潟療養所入所者家族にして見舞若くは看護等の爲來所したる場合宿舍の設備なく不便なる處につき同所附近に延五十五坪の宿泊所を建築獻納す

一、彌彦縣民道邊建築費寄附

以上費用の外母子寮維持資金寄附其の他解散に伴ふ一切の經費を支辨し尙ほ若干圓は大日本婦人會本縣支部經費資金として供與するを得た。

新潟縣支部歴代支部長並支部副長

支 部 長	就任年月	轉退年月	氏 名	支 部 副 長	就任年月	轉退年月	氏 名
	明治四〇・九	〃 三六・二	盛文夫人 柏田須磨子		明治四〇・七	〃 三〇・三	坤六夫人 田中ヌイ子
	〃 三六・二	〃 四〇・一	浩夫人 阿部龍子		〃 三〇・三	〃 三六	信一夫人 笠井ヨシ子
	〃 四〇・一	〃 四五・三	伯爵家夫人 清棲満子		〃 三六・二	〃 三九・七	端夫人 池永(夫人なし)
	〃 四五・三	大正元 一二	正隆夫人 森 ウン子		〃 三九・七	〃 四〇・七	八司夫人 桑原唯子
	大正元・二	〃 二〇・三	多喜男夫人 伊澤徳子		〃 四〇・七	〃 四二・七	市蔵夫人 林 茂子
	〃 二〇・三	〃 三〇・四	滿介夫人 安藤菊子		〃 四二・七	〃 四三・三	鎌太郎夫人 深町さき子

	〃 三五・四	〃 五〇・六	仲輔夫人 坂 達子		〃 四四・三	大正二・六	啓夫人 石川ツネ子
	〃 五〇・六	〃 六〇・二	信從夫人 北川小糸子		大正二・六	〃 三〇・六	策三夫人 木間瀬房子
	〃 六〇・二	〃 八〇・四	勝三郎夫人 渡邊操子		〃 三〇・六	〃 五〇・四	廣義夫人 平塚茂子
	〃 八〇・四	〃 一二〇・六	政弘夫人 太田タミエ子		〃 五〇・四	〃 六〇・一	幹夫人 鏡織音代子
	〃 一二〇・六	〃 一四〇・一〇	新三夫人 小原六子		〃 六〇・一	〃 八〇・四	俊雄夫人 馬渡弘子
	〃 一四〇・一〇	昭和二・四	武夫夫人 三松うめ子		〃 八〇・四	〃 一〇〇・六	守雄夫人 高橋雅子
	〃 二〇・四	〃 三〇・二	庄平夫人 藤沼静子		〃 一〇〇・六	〃 一二〇・二	純夫人 和田ハナ子
	〃 三〇・二	〃 三〇・五	雄一郎夫人 力石キノ子		〃 一二〇・二	〃 一三〇・三	了夫人 千葉敏子
	〃 三〇・五	〃 四〇・七	勇次郎夫人 尾崎静子		〃 一三〇・三	〃 一四〇・四	復三夫人 佐藤玉枝子
	〃 四〇・七	〃 五〇・八	武夫夫人 三松うめ子		〃 一四〇・四	昭和二・五	維緒夫人 原田タマ子

" 五〇八	" 六〇一〇	真也夫人 黒崎直子	昭和二〇五	" 五〇一	正雄夫人 金澤春子
" 六〇一〇	" 六〇二二	邦一夫人 中野佳子	" 五〇一	" 四〇七	信安夫人 佐藤有慈子
" 六〇二二	" 七〇六	豊治夫人 小幡きみ子	" 四〇七	" 六〇一	康雄夫人 除野克子
" 七〇六	" 一〇〇一	了夫人 千葉敏子	" 六〇一	" 六〇二	正樹夫人 福邑敏子
" 一〇〇一	" 二〇四	梅吉夫人 宮脇須磨子	" 六〇二	" 七〇六	延之助夫人 關屋照子
" 二〇四	" 二五〇六	延之助夫人 關屋照子	" 七〇六	" 一〇〇一	芳太郎夫人 石川富江子
" 二五〇六	" 二四〇九	安次郎夫人 中村千代子	" 一〇〇一	" 二〇七	舜一夫人 安原綾子
" 二四〇九	" 二五〇四	清吉夫人 君島紀子	" 二〇七	" 二五〇四	淳二夫人 梁井敏子
" 二五〇四	" 二六〇一	誠一郎夫人 安井滋子	" 二五〇四	" 二五〇四	義男夫人 柳井壽子
" 二六〇一	" 二七〇二	章平夫人 土居きぬゑ	" 二七〇二	" 二七〇二	學夫人 久慈政子

外に支部副長として子爵牧野忠篤夫人茂子明治四十一年五月より大正三年六月迄就任せられたり

支部主事の更囀

知事官房主事にして明治三十六年三月より四十年五月迄就任す	大野 徳太郎
日本赤十字社新潟支部主事にして明治四十一年五月より四十五年四月迄就任す	高内 眞賢
"	阿部 致致
"	松浦 貫治
"	江川 民三郎
"	福原 条治
"	佐藤 文太郎
"	今井 太市
"	原 常一郎
愛国婦人会新潟支部主事	塚田 榮策
"	昭和十三年八月より最後迄

解散當時ノ支部役員氏名

新潟縣支部長	土居 喜久
顧問	土居 章平
副長	久慈 政子
相談役	澤田 敬義
参 與	久慈 學
参 與	橋爪 清人
参 與	坂田 啓造
参 與	中村 元治
参 與	淺見 洋

新潟縣評議員

中村よし子	橋爪 壽子	北 歌子	小川 梯子
澤田イツ子	八木 エイ子	北村 キイ子	白勢 ハナ
白勢 常世	藤崎 シゲ	瀬賀 種子	岩 満アイ
櫛 キヨ	川崎 エイ	藤田 スガ	坂部 佳子
光藤 コシゲ	村川 一枝	水野 敏子	井上 まつ子
金井 セツ子	横田 千代子	高橋 菊子	岸田 屋壽
井上 暎子	村田 春子	淺見 清子	中津 きくの
池田 幸子	塚田 たつ	片山 若野	今成 スミ
松井 マツノ	鍵富 孝子	鍵富 きみ子	新田 見ヨシ子
石田 キン	木村 吉野	鍵富 千代	鍵富 テイ
高木 千代	兒玉 松枝	伴 百合子	坂田 政子
中野 和子	井越 満壽	本島 タケ	熊谷 タケ

解散當時事務職員氏名

主事	塚田榮策
主事補	高橋完徳
書記	澁谷慎次郎
全	内山卯之松
全	倉島脩治
全	大石貞治
全	野口愛子
全	山口泰輝
全	本間新太郎

窪田嘉子	松岡のぶ	小出ユキ	佐藤とよ
樋口昭子	田中合子	劍持千代子	小林よしの
市橋シヅ	中村さく	眞野ムツ	南部ノブ
福田スミ	工藤猶子	松岡清子	小出テイ
早山ヨミ	黒岩はま	荻野トメ	丹羽美代
田中フミ	林静子	齊藤きよ	飯山ミイ
小島コマ	阿部七重	堀口リメ	井上キシ
鷺尾ムツ	熊倉ワキ	若佐美登	伊藤ツヤ
齋藤勝子	大澤シゲノ	橋本ミヤヲ	大關ヨシ子
星きい	健富カウ	關谷フミ	有馬タカ
長岡市	松田忍	高田市	中川治
三條市	廣川ソノ	柏崎市	近藤綱子
直江津町	川合精子	新潟村	大橋のぶ子

表彰状傳達感謝状授與式

昨年來問題となり居りし婦人団体統合問題は愈々具体化されて本會も二月十二日輝く四十二年の歴史を閉づることとなつた、總裁官殿下には多年本會の爲めに盡力せる地方役員に對し表彰相成り會長並支部長より夫々感謝状を贈呈する爲め左記三個所に市町村分會長を招集して之れが傳達及授與式を舉行し之を支部最後の集合とした。

二月二十日 新潟公會堂 參集者 評議員九〇名、分會長一一六名
二月二十一日 長岡坂ノ上小學校 " 評議員 三名、分會長一〇三名
二月二十二日 高田市役所 " 評議員 二名、分會長 四六名

行 事

- 一、國民儀禮
- 二、御諭旨奉讀
- 三、表彰状傳達感謝状授與
- 四、支部長挨拶
- 五、報 告
- 六、來賓祝辭
- 七、萬歳三唱

愛婦最後の會合とて未だ雪路なるに續々參集、努力の結晶に築き上げたる愛婦に、血みぎろの活動せられたる分會長とて今日の集まりに胸や打たるらん、日頃の元氣もなく喜びの内にも愛婦に離るゝ悲哀は彌ふ可くもなし、然し支部長の挨拶により生れ出る新婦人団体に、更に努力せんと彼を偲び是を思ひ感懐無量なるものあり、悲喜交々の間に愛婦の最後に見送り／＼散り行く會員、分會長のすがた。
當支部の花々しかった四十年の事は之で一旦閉ぢるが、其の精神に至つては永遠に朽ちないものがあると信する、さうか諸姉は新団体たる大日本婦人會へ赴かれても相變らずの熱意と實行力とを以て會祖の理想を生かして頂きたい。
之を以て本會を終ります。

佩有功章者名簿

佩有功章者名簿

新潟市

有功章	住所	氏名
特別有功章	旭町一番町	新津ハル
"	知事官舎	土居きぬゑ
"	本町通七番町	堀口リノ
"	上大川前十一番町	北村キイ
"	西大畑町	瀬賀種
"	寄居町	早山ヨミ
"	上大川前通六番町	竹山ロク
"	管所通二番町	澤田イッ
"	水道町二丁目	山崎孝子
特別有功章	本町通六番町	風間カノ
"	東堀通七番町	齋藤ラク
"	上大川前通十一番町	林コマ
"	入舟町三丁目	小島コマ
"	湊町通三番町	村田春子
"	學校町二番町	塚田タツ
"	上大川前通一番町	鍵富テイ
"		久慈政子
"		久慈學
"		植木正雄
"		丹羽ミヨ
"	學校町二番町	塚田榮策
"	松波町一番町	高橋完徳

特別有功章

附一等有功章

本町通十四番町	伊田和作
本町通七番町	久代リヤウ
東堀前通六番町	堀口ノブ
上大川前通五番町	小山サク
二葉町三丁目	八木エイ
上大川前通五番町	高橋菊子
關屋本村町	江部サダ
中大畑町	知持千代子
本町通七番町	田中ヤイ
水道町二番町	高橋シン
水道町一丁目	阿部七重
二葉町一丁目	山崎隆義
	倉島周吉
	今井太市

附一等有功章

一等有功章

礎町六番町	高木千代
上大川前通六番町	熊倉ツキ
古町通三番町	角南くに
上大川前通十番町	山崎きよ
並木町	清水ハナ
船場町一丁目	幸田イシ
二葉町二丁目	長野エイ
本町通十番町	桂ノブ
東港町二番町	和田マツ
本町通十四番町	藤見ナナ子
本町通十番町	鷺尾ムツ
東堀通十一番町	森八重
松波町二丁目	小島リイ
春日町二丁目	小出ユキ子
東京市杉並區馬橋三	岡田スイ
松波町一丁目	關ヤス

一等有功章

附二等有功章

西大畑町	瀬賀御千恵
二葉町三丁目	小山芳枝
旭町二番町	田巻成子
松波町三丁目	西村みさほ
學校町	江口芳
沼垂町	今井イッ
山ノ下町	大關ヨシ
大畑町	岩浦アイ
	白勢常世
	富井シヨシ
松波町一丁目	佐藤文太郎
	藤田菊野
上大川前通十番町	藤田文子
西大畑町	松永ノブ
旭町二丁目	南取キミ
東入舟町三丁目	鹿取キミ
西堀通十番町	廣澤光子

附二等有功章

上大川前通七番町	飯山ミイ
同	高杉キミ
上大川前通十番町	雄波タセ
白山浦	板井ナカ
東堀通十番町	山田どき
東大畑町一丁目	新田ヨシ
管所通二番町	橋爪壽子
本町通八番町	白勢ハナ
古町通七番町	小出テイ
沼垂町	和田チイ
	小島あさ
	清水かね
	青山ツネ
	關矢新五郎
	本間新太郎
	益谷慎次郎
	橋爪清八

東堀通五番町	田代三吉
東堀通六番町	高橋ツネ
本町通六番町	折戸リツ
上大川前通十番町	高橋サイ
本町通十番町	大塚キセ
上大川前通七番町	和田マツ
旭町	五十嵐鏡子
醫學校町	福田スミ
白山前通	伴ユリ
西堀通三番町	鎌富干代
	竹石春枝
二等有功章	高野フジ
本町通三番町	隔木さん
本町通十一番町	小林ミヨシ
春日町二丁目	金子トヨ
沼垂町蒲原	大井猪之松方
古町通七番町	風間トミ子

上大川前通四番町	田代ヤイ
寄附町	伊藤ノイ
二葉町三丁目	安藤三草子
上大川前通十一番町	上原マキ
關屋大川前	吉田ミイ
學校町通	鎌富カウ
西大畑町	行形ヨシ
東堀通八番町	高橋光子
西大畑町	山縣時子
東中通一番町	町田八重
西中通町	齊藤勝子
山ノ下町	山田千代
學校町二番町	片山ワカノ
二葉町	野澤マサ
沼垂町	眞野ムツ
水道町	關根トツ
白山浦健康舎内	小林マツ

西堀通八番町	安藤ヤソ
田中町	藤卷タカ
	五十嵐ギン
	坂部佳子
	松浦タエ
	町田勝治
	島田ヲフ
學校町三	渡邊喜一
	桑原妙喜
學校町二	片山三男三
	山口泰輝
西大畑町	速藤順二
	安藤こと
關屋田町	長谷川泰三
水道町	關根輝也
	大野繁野

水道町一番町	山田範子
關屋本村町	齊藤チエ
關屋本村町	齊藤ヒロ
本町通三番町	大森チノ
	市川まち
	齊藤飛多知
	籠島ノリ
本町通六番町	齋藤マツ
上大川前通七番町	花房キノ
船場町一丁目	立川コマ
綠町	青柳きみ
白山浦二丁目	井筒ナカ子
港町二ノ丁	佐川タカ
港町一ノ丁	齊藤あい
株川岸通	田邊彌生
下大川前通四番町	伊藤慎子
南濱通二丁目	原ムツ
沼垂町古原	

三等有功章

東港町二丁目
 沼垂町
 四ッ屋町三丁目
 浮洲町
 東大畑町二丁目
 松波町二丁目
 東堀前通三番町
 關屋本村町
 西大畑町
 旭町一番町
 古町通七番町
 東堀通八番町
 白山浦一丁目
 秣川岸二丁目
 古町通七番町
 古町通五番町

大塚ノブ
 石川せつ
 久我常子
 佐野阿貴子
 植木スヒ
 丸山コマキ
 大森スガ子
 齋藤ハツ
 中川ハル
 齋藤ヤス
 安藤京子
 高橋サイ
 江口タケ
 橋本イマ子
 大井榮子
 仁木イツ
 大野トク

三等有功章

寄居町
 西堀通五番町
 東堀前通七番町
 上大川前通七番町
 管所通二番町
 沼垂町蒲原
 上大川前通十番町
 緑町税關官舎
 上大川前通四番町
 西大畑町
 本町通三番町
 關屋出町
 港町四番町
 本町通八番町
 白山浦二丁目

荻野トメ
 田村ます
 廣神ハナ
 飯山ミヨ
 栗原トミ
 西脇ユキ
 藤田ヤイ
 岡安きん
 弦巻ミサヲ
 關トシ
 田代めい
 川崎エイ
 大森クヲ
 樋口シヤ
 鹿取カツ
 佐藤リヨ
 小野ヤエ

三等有功章

上大川前通十番町
 沼垂町流作場
 西堀通六
 小林百貨店
 古町通七
 萬代百貨店
 本町通十三番町
 赤坂町二丁目
 磯町四丁目

松本利作
 安倍邦太郎
 小林與八郎
 西川外吉
 小野ハル
 栗山スミ
 高橋トシ
 扇谷イセ
 小林上志の
 増田キク
 鎌富キミ
 目黒悦
 村井コテフ
 波田野タネ
 倉島脩治
 大澤繁野
 高杉キミ

三等有功章

白山浦一丁目
 學校町二番町
 西大畑町

西堀前通四番町
 松波町三丁目
 入舟町一丁目
 川端町一丁目
 東堀通十一番町
 沼垂町
 松波町三丁目
 入船町五丁目
 本町通八番町

三國せ
 島田テウ
 瀨賀敏子
 白井熊一
 北村一二
 土沼春吉
 渡邊ミチ
 富谷ノブ
 坂井眞子
 仲村玄子
 小川よ里
 丸田トシ
 小松原イキ
 齋藤きみ子
 大淵婦知子
 田村い

三等有功章

上大川前通六番町	清野ハル
松波町三丁目	柴田秀子
沼垂町	小林ヒロ
西堀通三番町	本間ヨシ
月町	河邊禮子
西堀通三番町	富取タマ
本町通七番町	飯田トシ
新島町四ノ丁	山田キソ
本町通八番町	川崎八重
四太畑町	石井忠子
附舟町二丁目	鈴木玲子
本町通八番町	小林コウ
二葉町二丁目	羽入キノ子
上大川前通十番町	大谷トキ
上大川前通九番町	鈴木シズ
上大川前通六番町	田中タマ

三等有功章

株川岸通二丁目	橋本カヨ
上大川前通七番町	高杉キサ
本町通十四番町	小林チヨノ
西堀通九番町	渡邊ミシ
沼垂町蒲原	飯島初枝
沼垂町鏡ヶ岡	板垣ヨシ
沼垂町	信田スイ
西堀通八番町	星田キイ
松岡町	永井いち
西堀通九番町	倉茂キノ
西堀通七番町	吉田トマ
本間町二丁目	小島千代
關屋本村町	今湊荻枝
	笠原リツ
	林ルイ
	山崎コト

三等有功章

沼垂町五軒町	高橋ハツノ
本町通八番町	長谷川ヤウ
田中町	川島ノブ
東堀通九番町	小林キン
古町通六番町	宗村フミ
營所通二番町	本間タマノ
上大川前通十一番町	岡本千代
上大川前通四番町	林留女子
沼垂町	渡邊セイ
沼垂町山ノ下	會イシ
窪田町	西名菊子
翁町二丁目	早川シズ
窪田町	唐澤きみ
附舟町二丁目	五十嵐八重
本町通六番町	戸川キソ
横七番町二丁目	齊川トキ
	間驅エシ

三等有功章

沼垂町西大古川	佐藤トヨノ
沼垂町	川合サヨ
白山浦一丁目	早川朝子
東堀通四番町	山口ツイ
古町通九番町	附島ヨネ
上大川前通十二番町	松澤ヨシ
沼垂町長嶺	高見ナカ
東新町	大野サク
沼垂町山ノ下	玉上千代
沼垂町芳原三丁目	佐々木ミイ
旭町二番町	村上久枝
沼垂町山ノ下	村山ムツ
白山浦三丁目	古川ナオ
山ノ下校脇	大島ヨセ
萬代町二丁目	横井タミキ
附舟町一丁目	玉木静枝
東湊町二丁目	井島シカ

三等有功章

本町通十三	中村醫院	山崎ハルエ
下旭町	前田トメ	
上大川前十一番町	林智恵子	
沼垂町	手島カホル	
學校町二番町	瀧澤せつ	
白山浦一丁目	早田とみ子	
西大畑町	上原節子	
東堀通三番町	伊藤重作	
西大畑町	布川潔	
市外青山	長谷川寛	
古町七	高代百貨店	
關屋	新田とみ	
附舟町二丁目	安宅ミドリ	
稻荷町	後藤ヒサ	
濱田中町	小恒子	
稻荷町	兒玉トヨ	
旭町二番町	川原キイ	
	大杉富子	

三等有功章

西大畑町	横塚房子
川端町 縣衛生會内	伊藤ミサヲ
學校町二番町	小山 絢
二葉町一丁目	今井セツ子
旭町二丁目	岩崎ムメ
西受地町	伊部トイ子
白山浦一丁目	井筒ミキ
古町通八番町	井上ツグ
西堀通十番町	宮澤タイ
古町通九番町	川田千賀
本町通六番町	阿部フミ
南昆沙門町九	近藤コウ
本町通十一番町	伏見カツ
東港町二ノ丁	安藤れい
古通町十三番町	吉井ステイ
入舟町	齋藤スム
沼垂町	上田ナヲ

三等有功章

沼垂町日吉町	里見ハル子
東堀通六番町	中静ケイ
東堀通	笠谷ユリ
本町通六番町	白勢加福
菅根町	小山キセ
入舟町一丁目	中山えん
西堀通八番町	小山ヨキ
南堀町	岩川はる
南濱通一番町	齋藤ハナ
西大畑町	川口幸子
二葉町一丁目	高橋イマノ
大畑町二丁目	松浦ミヨ
二葉町一丁目	横田ミヨ
中大畑町	金田リョ
西堀通六番町	山代芳
東堀通三番町	櫻井ノブ
西堀通三番町	瀧澤政子

三等有功章

關屋田町二丁目	鴨井ハルノ
旭町	伊田ミチ
本町通一番町	江口アキ
古町通八番町	石附シダ
水道町一番町	石栗トヨ
沼垂町	五十嵐アヤノ
横一番堀通	鎌富コウ
港町通一ノ町	風間千代
古町通八番町	片桐ふみ子
上大川前通十二番町	金子花
本町通六番町	風間ソメ
學校町二番町	川上 潔
上大川前通十一番町	吉田千代
古町通十番町	高橋い志
東堀前通七番町	玉木雪子
礎町四丁目	高橋美須
	高橋キツ

三等有功章

古町通八番町
本町通七番町
上大川前通十二番町
月町
本町通六番町
流作場萬代町
西堀前通八番町
東堀通八番町
上大川前通六番町
新潟師範學校
野川岸
礎町上一ノ町
古町通十番町
古町通四番町
水道町一丁目

高橋 マス
玉井 イネ
高橋 カジ
竹山 潔
高橋 トセ
津野 セツ
附島 ミネ
附島 タカ
中林 ミヨ
永島 八重子
植木 米子
野内 キセ
黒川 ヤイ
楠田 キヨ
楠田 フミ
栗林 シゲ
串田 ハツ

三等有加章

水道町一丁目
沼垂町
關屋田町二丁目
本町通十一番町
東堀通一番町
流作場萬代町二
西堀通六番町
東堀前通六番町
上大川前通五番町
東堀通十番町
古町通五番町
上大川前通二番町
西堀通九番町
西堀前通五番町
東中通二番町
沼垂町

倉島 フキ
山影 ヤマ
矢島 千代
山田 ナリ
山内 文子
矢貫 嘉子
松川 トシ
劍持 キミ
小山 サイ
小山 壽榮
小林 美好
小島 キン
小林 トシ
阿部 千代
會津 ヨシ
青木 和嘉奈
安倍 イキ

三等有功章

寄居町
古町通六番町
學校町二番町
西堀前通八番町
水道町二番町
東堀通七番町
西堀前通五番町
流作場
古町通六番町
本町通六番町
沼垂町蒲原
古町通九番町
本町通六番町
西大畑町
礎町上一ノ丁
沼垂町上二ノ丁

味方 光
荒川 テイ
青木 トメ
齋藤 タマ
齋藤 末子
齋藤 八代重
坂井 クニ
櫻井 美代
木山 キソ
三島 スイ
官澤 フイ
水本 イヨ
鹽谷 タマ
志賀 春子
島本 ハツ子
篠田 セツ
島垣 イシ

三等有功章

沼垂町上四ノ丁
學校町三番町
古町通九番町
附舟町
本町通十四番町
本町通五番町
本町通十一番町
流作場
古町通五番町
西堀通七番町
大畑町官舎
株川岸通二丁目
沼垂町
西大畑通
寺裏一番町
沼垂町
本町通十二番町

澁谷 ヨイ
廣川 ヤヨエ
森山 かつ
鈴木 久子
杉山 スギ
大塚 たん
大橋 サク
橋本 ミヤヲ
長谷川 貞子
長谷川 順
濱名 タニ
早川 ハマ
波田野 たね
西山 千代子
丹羽 千久代
堀川 タツ
星野 トモ

三等有功章

旭町
 一番堀通町
 松波町
 學校町三番町
 見方町
 本町通五番町
 入船町二丁目
 沼垂町長嶺
 東堀前通五番町
 上大川前通十一番町
 本町通十番町
 西堀通八番町
 旭町一丁目
 窪田町
 東堀前通
 上大川前通

富永ノリ
 鳥居ミサヲ
 富田光
 富山光
 土屋ちせ
 折戸ヨイ
 小野トミ
 大石キノ
 大橋ツネ
 小川ちか
 小柳トシ
 太田トシ
 太田スイ
 小黒シオリ
 大瀧文
 小川カツ子
 大塚ミチ

三等有功章

田中町
 西堀前通四番町
 上大川前通四番町
 上旭町一番町
 關屋
 旭町通二番町
 上大川前通十二番町
 本町通十二番町
 古町通六番町

渡邊初
 渡邊セツ
 渡邊イセ
 渡邊ヨキ
 渡部サキ
 金卷ハナ
 片桐トミノ
 風間富士子
 加瀬うた
 伊藤フジ
 中野エイ子
 佐藤トセ
 關能しづ子
 石崎まつ
 伊南マサキ
 吉田ツマ
 荻部桂子

三等有功章

石川ヤス
 西澤サキ
 高橋ナミ子
 吉田タケ
 阿部ナカ
 百川マツノ
 土田ハタ
 近藤キイ
 小松原フジノ
 後藤ヨセ
 坂井ミツエ
 小松原ヨシノ
 小澤テイ
 乙川ハル
 坂井静
 渡邊テツ
 風間ハツ

三等有功章

樋口飲子
 加藤春江
 岩城いら
 飯村ソウ
 大橋時
 大石ハル
 岡田トシ
 小島キイ
 渡邊トリ
 渡邊ヨシ
 内山卯之松
 野口愛子
 池主ヨ
 江口喜和
 飯沼カメノ
 長谷川マチ
 本間チヨ

三等有功章

〃 〃

本間トミ 保莉 本間タキ 星山キクノ 大瀧武子 渡邊ヤイ 唐津ひろ 唐津ハナ 片桐ヤヨイ 唐津スイ 玉木サヤ 村井運 宗村トヨ 魚住しん 藤田わか 山田ハナ 八木レイ

三等有功章

〃 〃

増田キク 藤井サタ 淵田リイ 小林トヨイ 小栗ミシ 荒木ぎん 笹川はつ 櫻井ツナ 清野チ 水本操 三宮政江 白柏キノ 平弘子 望月ゆき 關能ハツノ 川畑タミ 加藤トヨ

醫學校町通一番町

三等有功章

〃 〃

大畑町 長谷川汎子 關屋田町 大川戸成二 古町通三番町 今成スミ 學校町二番町 佐藤チヨ 松波町一丁目 關屋 中田正一 藤崎直一 濱田中町 學校町二番町 小原正治 松波町一丁目 泰九郎治 本町通六番町 風間ソメ 梅津ウタ 古町通八番町 阿部ムメ 沼垂町 木村耐 西大畑町 上大川前通一番町

木村耐 長谷川汎子 大川戸成二 今成スミ 佐藤チヨ 平方實三郎 中田正一 藤崎直一 小原正治 泰九郎治 風間ソメ 梅津ウタ 阿部ムメ 木村耐 鍵富シン 山岸ヒサ 岩原ユキ

三等有功章

〃 〃

本間イト 小野ヨシ 大杉福美 小野みよ 大瀧キヨ 田村満壽 高澤キクノ 高見はな 高橋いま 田中フミ 中野ヤス 中村花江 八幡照 藤井トシ 福田キイ 小林禎子 安藤壽む

長岡市

三等有功章

坂井ヨシ
坂井ヨシ子
菅原たま
富岡ミツ

有功章

住所

氏名

特別有功章

東千手町

關テイ

附一等有功章

東千手町

木村清三郎

船江町

關威雄
木村チト
松田忍

一等有功章

草生津町
表町三丁目
東千手町
東神田町
袋町三丁目
觀光院町
舟江町
四郎丸本四丁目
台町三丁目
樋口イネ
覺張カズヨ
山口歌子
田中きよ
星野レツ
渡邊藤吉
松田耕平
諸橋セツ
小秋元孝

附二等有功章

袋町三丁目

星野藤太郎

關東町

梅野マサ

表町五丁目

鷲尾キシ

表町二丁目

神山ユキ

神田町一丁目

田村ヤウ

附二等有功章

東千手町

多々見貞

二等有功章

西神田町二丁目
東千手町
坂ノ上町二丁目
下中島町
稻古町
表町四丁目
神田町三丁目
藏王町

川上イネ
殖栗ミツ
多々見徳元
澁谷ナミ
松田ハツ
熊倉八重
小川ヨネ
難波イキ
佐藤ハル
長谷川イネ
小山ウメ
松田レイ
吉澤ウメ
推耳レン
神山ユキ

附三等有功章

表町四丁目
弓町
山田町
弓町
長町一丁目
藏王町
弓町
西神田町一丁目
藏王町
表町二丁目
神田町
吳服町
殿町
愛宕町
弓町
殿町
愛宕町

目黒ツル
池望子
堀井イネ
脇屋サウ
波邊ツネ
佐藤サク
池文一
金子美恵
山崎セツ
加藤スエ
田中タケ
下田タツ
酒井ミノル
山岸ツネ
藤井マキ
山岸ツネ
山岸ツネ

三等有功章
附加章

上中島町

渡邊 ミサヲ

三等有功章

神田町三丁目

小林 なを

三等有功章

表町一丁目

岩崎 セキ

三等有功章

諏訪町

丸山 セツ

三等有功章

表町三丁目

株式會社六十九銀行

三等有功章

東坂町二丁目

長尾 ノブ

三等有功章

本町二丁目

株式會社長岡銀行

三等有功章

吳服町

反町 ちい

三等有功章

本町三丁目

北越水力電氣株式會社

三等有功章

神田町二丁目

反町 富美

三等有功章

吳服町

高橋 クニ

三等有功章

東弓町

屋井 ノブ

三等有功章

渡里町

中澤 文子

三等有功章

吳服町

大橋 キン

三等有功章

坂ノ上町一丁目

遠藤 コト

三等有功章

表町一丁目

桃田 ツネ

三等有功章

東坂ノ上町一丁目

中野 チイ

三等有功章

西神田町一丁目

須藤 リユ

三等有功章

東坂ノ上町二丁目

丸山 みかげ

三等有功章

船江町

杉本 ノリ

三等有功章

城内町二丁目

小林 イセ

三等有功章

表町一丁目

桃田 ツネ

三等有功章

東千手町

金井 タカ

三等有功章

西神田町一丁目

須藤 リユ

三等有功章

千手町三

清水 キセ

三等有功章

船江町

杉本 ノリ

三等有功章

長町一丁目

渡邊 ちる

三等有功章

表町三丁目

藤井 マサ

三等有功章

長町二丁目

山田 イネ

三等有功章

上中島町

小林 トシ

三等有功章

愛宕町

屋井 鍋七

三等有功章

上中島町

松木 レツ

三等有功章

上中島町

小林 以志

三等有功章

東坂ノ上町一丁目

須栗 セイ

三等有功章

旭町四丁目

高島 八重

三等有功章

宮原町

池野 タツ

三等有功章

表町二丁目

加藤 タカ

三等有功章

草生津町

大谷内 フヂ

三等有功章

學校町三丁目

覺張 典子

三等有功章

東千手町

川上 ソヨ

三等有功章

表町五丁目

鷺尾 かほる

三等有功章

千手町三丁目

金井 セキ

三等有功章

玉藏院町

羽賀 セイ

三等有功章

神田町二丁目

吉村 ムツ

三等有功章

長町一丁目

長谷川 サク

三等有功章

吳服町

矢島 フジ

三等有功章

玉藏院町

星野 セツ

三等有功章

玉藏院町

鈴木 富士見

三等有功章

表町三丁目

覺張 トシ

三等有功章

本町二丁目

池田 博

三等有功章

稽古町

覺張 リツ

三等有功章

本町一丁目

伊藤 ミチ

三等有功章

表町五丁目

太刀川 わか

三等有功章

長町一丁目

大原 ユキ

三等有功章

渡里町

内田 絹子

三等有功章

觀光院町

田村 マサ

三等有功章

本町三丁目

鞍立 のぶ

三等有功章

長町一丁目

田村 沖見

三等有功章

表町二丁目

駒形 スミ

三等有功章

今朝白町

土田 テツ

三等有功章

下中島町

鈴木 スイ

三等有功章

殿町二丁目

小野 ミン

三等有功章

台町二丁目
 千手町三丁目
 穠古町
 東坂ノ上町二丁目
 中千手町
 袋町
 東千手町
 神田町一丁目
 表町四丁目
 坂ノ上町二丁目
 表町三丁目
 表町一丁目
 石内町
 本町二丁目
 長町二丁目
 愛宕町
 長町一丁目

吉原ヨキ
 長部レエ
 野平勢津子
 久保一枝
 森山シダ
 清水セツ
 神谷英
 田村セツ
 小川信子
 澁谷優
 山口ミサ
 大野ソカ
 石井キワ
 清水アイ子
 野村ウタ
 小林タケ
 原陸

三等有功章

坂ノ上町二丁目
 本町二丁目
 東坂ノ上町二丁目
 坂ノ上町二丁目
 表町四丁目
 愛宕町
 台町一丁目
 學校町三丁目
 坂ノ上町二丁目
 表町一丁目
 表町三丁目
 本町一丁目
 本町二丁目
 表町四丁目
 本町一丁目
 愛宕町
 表町二丁目

山田ハマ
 坂井キク
 小原ヤマ
 佐久目ヨキ
 草間静子
 久須美操
 吉原キタ
 今井サキ
 栗原セン
 松川タツ
 覺張春子
 山崎志満
 猪浦ミツ
 内山静夫
 羽賀タミ
 高野マス
 石坂シゲノ

三等有功章

本町二丁目
 本町二丁目
 袋町一丁目
 四郎丸本町二丁目
 長町一丁目
 四郎丸本町三丁目
 玉蔵院町
 上中島町
 長町一丁目
 西神田町一丁目
 袋町
 櫻木町二丁目
 四郎丸本町三丁目
 吳服町
 穠古町
 表町三ノ丁
 川崎町

品田タイ
 池田マツ
 田中タキ
 石原フジ
 村岡ライ
 熊倉ヨセ
 松本チヨ
 長谷川ツネ
 本間ミイ
 古川テイ
 伊丹タイ
 藤井トリ
 久山ミヨシ
 上原菊枝
 吉田イツ
 渡邊カウ
 高野静

三等有功章

東千手町
 表町二丁目
 良柄町
 表町二丁目
 觀光院町
 城内町二丁目
 " "
 城内町
 坂ノ上町二丁目
 表二ノ町
 城内町一丁目
 城内町
 坂ノ上町一丁目
 旭町四丁目

長部トヨ子
 石橋ハナ
 島岡トシ
 木村義子
 阿部紅子
 野本吟子
 中村ます
 杉井美代
 敷井イト
 金井モト
 川上ミサホ
 吉澤トイ
 青木寛治
 佐藤フジ
 長谷川政治
 岡本やま子
 平澤マツ

三等有功章	長町一丁目	星野ヒデ	櫻木町一丁目	原ヒデ
	表町二丁目	中野節	中千手町	星野キク
	本町	小川セイ	新榮町四丁目	尾形伊七
	坂ノ上町二丁目	佐藤タツ	東神田町	武井武一郎
	本町二丁目	吉澤シン	中千手町	今成幸一
	下中島町	鈴木ツネ		渡邊リツ
	表町三丁目	藤井ツキ		
	高工官舎	坪井静子		
		加藤スエ		
		吉澤ウメ		
		島岡トワ		
		星名キク		
	觀光院町	平澤マツ		
	旭町四丁目	清水節子		
	袋町	桐生セイ		
	下中島町	鈴木ツネ		
	中千手町	瀧澤貞子		

高田市

有功章 住所

特別有功章

一等有功章 附加章

氏名	國友 關	森川 こと	渡利 サヨ	黒澤 カメヨ
----	------	-------	-------	--------

一等有功章	高橋 悦	倉石 フジ	丸山 エイ	山岸 アイ	饒村 トシ	瀬尾 イツ	保坂 サミ	水野 やすゑ	川澄 農治	和久井 カリ	高橋 豊	富澤 キン	玉井 スガ	池亀 ひさ	池内 チイ	關野 ノブ	古川 く
二等有功章	長谷川 ミヨシ	中川 ハル	小山 久良	山口 保之	倉石 ミカク	玉井 トク	古川 フジ	中川 潤治	小口 さくよ	大塚 助次	矢澤 弘	稻田 春子	三上 ハツ				
附加章																	
二等有功章																	

三等有功章
附加章

三等有功章

田中	竹内	松井	川瀬	小川	太田	太田	東條	八田	江川	倉石	岡田	丸山	山本	下鳥	飯塚
チソ	い	忠	イ	静	ト	は	和	敏	サ	ワ	シ	シ	惣	セ	ス
ノ	ち	子	ワ	江	シ	な	歌	敏	ダ	カ	ズ	ダ	治	キ	エ

三等有功章

西城町一丁目

大野	備口	大塚	田村	山崎	三崎	中野	成澤	合田	有馬	小林	保科	松本	金子	山岸	山岸
原	口	菊	ヨ	ノ	カ	ト	マ	ス	ト	林	科	本	子	岸	岸
ち	ス	能	シ	ア	ツ	美	ツ	エ	志	敦	錦	ハ	信	泰	ヨ
よ	イ	章	ラ	ブ	ツ	美	ツ	エ	子	子	ル	治	治	泰	ヨ

三等有功章

廣瀬	小林	木村	岡田	荆木	竹内	近藤	森成	長澤	吉原	片山	高橋	石田	丸山	佐久間	眞保
エ	フ	直	キ	千	ヤ	は	し	ゆ	ミ	テ	も	ツ	ツ	よ	テ
ツ	ク	子	ミ	代	ヘ	な	さ	き	ホ	フ	ど	ル	ネ	し	ル

三等有功章

柴田	古澤	飯塚	本間	本田	山岸	小菅	大島	池内	大政	諸橋	海津	川上	渡邊	塚田	境	渡邊
た	八	千	春	チ	美	フ	島	内	千	橋	信	上	邊	田	七	六
ま	重	代	野	チ	子	ク	嶺	道	代	乃	乃	セ	ハ	キ	キ	郎
	子					ノ						セ	ナ	ク		

三等有功章

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

柏崎市

有功章

特別有功章

住所

柏崎市字比角

玉井 久

武田 愛

瀨尾 美代子

町田 キヨ

大竹 テイ

小林 トセ

水落 サダ

渡邊 こさん

附一等有功章

一等有功章

本町七

本町六

比角

大久保

大洲

附二等有功章

大久保

二等有功章

大洲

中溪

本町六

中溪

本町四

本間 ハツエ

吉浦 マツ

二宮 ツネ

原 トミ

佐藤 類子

本間 要

田邊 きく

箕輪 嘉一

田邊 きく

安達 まつ

三宮 トキ

高橋 トラ

二宮 スマ

桑山 イク

二等有功章

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

附三等有功章

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

岩上

本町六

中溪

四學校町

本町六

比角

中溪

住吉町

四學校町

今井 壽美子

前田 ミチ

曾田 クラ

三井田 ハナ

箕輪 トノ

宮川 芳

佐藤 タカ

布施 政子

相澤 シダ

前田 ミチ

三井田 タカ

丸田 駒子

吉田 千代

中村 直江

相澤 せい

岩下 マツイ

附三等有功章

〃 〃

比角

本町四

廣小路

諏訪町

大久保

本町八

比角

諏訪町

中溪

三等有功章

中溪

大久保

比角

四ツ家

石坂 満子

西巻 ヨネ

大矢 セン

大掛 セイ

渡邊 どせ

片桐 イセ

平野 キヨ

三井田 スエ

宮田 久子

三浦 ハナ

巻淵 茂子

内山 キヨ

石橋 巴

野口 千代

笠木 サヲ

芹田 リキ

三等有功章

本町三 本町八 本町三 大久保 本町四 比角 本町四 比角 本町六 比角 諏訪町 新花町 御町 本町二

中村トク 清水みて 黒崎ミズ 高橋セツ 西川茂子 桑山キセ 丸山キマツ 星野ミラ子 和田イセ 和田イセ 吉田セシ 春口みつ 三浦ハナ 渡邊タマ 田中良子 村山庄子 大島ソウ

三等有功章

前川宗一郎 三井出ムツ 中野ロク 布施愛子 横關キサ 市川マサ 池田イセ 市川満枝 萩原ミチ 原ツイ 渡邊ナツ子 神林セイ 勝海マス 加藤都 金曲輪イノ 笠木トヨ 金子節子

三等有功章

春川イタク 吉岡サヲノ 高岡キサ 升田キキ 土田マキ 中村キキ 内藤ミキ 中野イキ 中野イキ 歌代コト 浦澤シナト 野澤マサ 桑山トヨ 山崎セヨ 松村清 藤村タキ 小林ミセ

三等有功章

大久保 柳橋 本町七

阿部ミサホ 齋藤芳乃 木村トラ 三浦キヨ 重田静 下條ナカ 森田ジュン 瀬下久子 前川奥喜子 久我ヤス 江部清野子 中村キン 高橋剛直 大掛セン 吉浦ツマ 飯田綾子 大野志都恵

三等有功章

本町六

中村キ
松村清
原ヤス

三條市

有功章

住所

氏名

附一等有功章

三ノ町

廣川ソノ

附二等有功章

廣川雪

二等有功章

金子シマ
岩田イツマ

二等有功章

〃

桑原むろ
小出イマ
大塚トシ

附三等有功章

今井半吾
今井ステ

〃

長谷川ヨリ

〃

金子カウ

〃

神田ムツ

〃

長谷川クマ

附三等有功章

大塚トシ

〃

石村タイ
外山サタ
水谷テイ

三等有功章

〃 〃

石黒フミ
廣川ハル
清水シズ
湯田セズ
木戸マサ
安達イト
小出ヌイ
名雲イシ
佐藤輝一
金子俊藏
藤崎カタ
土田スミ
高橋キヤ
藤崎チヨ
山田忠吾
鈴木英夫
渡邊フジ

北蒲原郡

有功章

住所

氏名

附一等有功章

安田村大字保田

齋藤サダ

附二等有功章

籠田

星野ミイ

附三等有功章

保田

齋藤キクエ

〃

〃

波田野タマキ
齋藤トミ

三等有功章	廣 藤 伊 埃	波 邊 ト シ	廣 田 卓 平	廣 田 新 助	植 木 マ ス	前 田 フ シ	土 岐 フ テ	圓 山 イ ク	圓 山 静 子	柄 澤 安 藝	宮 尾 セ ツ	宇 尾 野 キ ュ ノ	漆 山 フ ユ	牛 澤 マ ツ	西 村 ス イ	附 二 等 有 功 章 加 章	水 原 町
二等有功章	水 原 町																
三等有功章	板 垣 ハ ル ノ	宇 尾 野 ト ミ	野 田 マ サ	鈴 木 レ イ	田 中 よ し	佐 藤 ト ラ	中 村 イ エ	阿 部 亀 三 藏	澤 野 セ イ	齋 藤 フ ジ	小 川 コ ウ	柄 澤 ヒ ロ シ	大 竹 マ ツ	太 田 ハ ツ	伊 藤 チ タ		
附 三 等 有 功 章 加 章	水 原 町																
二等有功章	水 原 町																
三等有功章	安 田 村 大 字 小 浮	堀 越 村 大 字 黒	堀 越 村 大 字 大 野 地	京 ケ 瀬 村													

三等有功章	石 山 マ ッ ノ	佐 藤 幸 子	宇 尾 野 タ ツ	松 澤 ハ ツ ヨ	小 川 フ ヨ	石 黒 ト ラ	家 田 ム ノ	浦 井 シ ゲ リ	佐 々 木 シ ゲ	關 屋 コ ウ	武 田 フ ミ	淺 見 リ ッ	佐 藤 ふ み	藤 岡 マ ツ	怪 内 キ ョ ノ	片 山 ク ニ	中 村 サ イ	附 二 等 有 功 章 加 章	水 原 町
二等有功章	水 原 町																		
三等有功章	中 山 ト ミ	宇 野 フ ミ	白 井 ク リ	小 林 チ オ	坂 井 淳 三	長 場 マ セ	遠 藤 ヨ リ	阿 部 宇 多	近 藤 タ ル	品 山 ハ ナ	田 村 ス イ	小 林 イ タ	市 島 ジ ャ ン	市 島 隆 子					
附 三 等 有 功 章 加 章	水 原 町																		
二等有功章	水 原 町																		
三等有功章	管 岡 村 大 字 發 久	金 屋	神 山 村 大 字 天 神 堂	岡 方 村 大 字 長 戸 呂	長 浦 村		葛 塚 町	濁 川 村 大 字 濁 川	木 崎 村				中 浦 村 大 字 天 王						

三等有功章	中浦村大字池ノ端	姉崎 ジュン
"	中浦村" 下中目	細野 キヌ
"	中浦村" 小坂	田中 芳江
二等有功章	新發田町泉町	島倉 カネ
附加章	外ヶ輪裏	桑原 くにゑ
"	新築地	寺尾 キヨシ
二等有功章	新發田町外ヶ輪	香川 鍊彌
"	外ヶ輪裏	相馬 直五郎
"	竹町	佐藤 克太郎
"	尾上町	北見 タツ
"	下町	阿部 テル
"	外ヶ輪裏	入江 コシミ
"	寺町裏	上杉 アイ
"	築地	鷲塚 セン
"	新道	大塚 トク
三等有功章	新發田町立賣町	石井 ナヲ
"	三ノ丸	田宮 シゲル
二等有功章	新發田町	高橋 ヒロ
"	下町	田村 タイ
"	魅屋町	高橋 ヒロ
附加章	七軒町	竹端 キヤウ
"	三ノ丸	市島 信太郎
二等有功章	新發田町三ノ丸	市島 千代
"	定役町	和田 ワカ
"	竹町	木村 タイ
"	廣小路	前田 源六

三等有功章	新發田町三ノ丸	和泉 モト
"	魅屋町	井上 ブン
"	清水谷郷	井上 マス
"	三ノ丸	井伊 トシ
"	中町	石川 キン
"	東町	速水 卯三郎
"	外ヶ輪裏	長谷川 勇喜
"	古徒士町	二戸 八一郎
"	上町	富樫 タキ
"	八軒町裏	堀山 メ
"	新築地	田中 久太
"	外ヶ輪	大森 ヨシ
"	下町	香川 テイ
"	立賣町	加藤 タエ
"	材木町	川瀬 スム
"	二ノ丸	桂野 光
"	高野 定彌	高野 定彌
三等有功章	新發田町二ノ丸	高野 ヲツ
"	上町	高橋 サツ
"	裏町	竹内 ハルノ
"	三ノ丸	曾我 テツ
"	下町	中野 イマ
"	萬町	村山 キヨ
"	中町	上野 キセ
"	二ノ丸	大關 釣
"	寺町	熊倉 チセ
"	上町	山田 ヨシノ
"	三ノ丸	柳川 クラ
"	同心町	柳澤 ヒサ
"	上町	柳澤 チヨ
"	三ノ丸	丸山 カヅイ
"	御免町	眞部 信
"	竹町	松林 千代
"	職人町	會澤 キチ

三等有功章	川東村	官野 タケノ	附 三等有功章	新保 ソミ	一等有功章	築地村	近 ユミ	附 三等有功章	聖籠村	二宮 タケ子	三等有功章	菅谷村	倉島 チヨ	特別有功章	聖籠村	二宮 ハナ	附 三等有功章	菅谷村	高橋 セキエ	官村 リイ
附 三等有功章	川東村	官野 タケノ	附 三等有功章	新保 ソミ	一等有功章	築地村	近 ユミ	附 三等有功章	聖籠村	二宮 タケ子	三等有功章	菅谷村	倉島 チヨ	特別有功章	聖籠村	二宮 ハナ	附 三等有功章	菅谷村	高橋 セキエ	官村 リイ
"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	二等有功章	"	中野 高子	"	三賀	二宮 タケイ	二等有功章	加治村	中野 高子	"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	中野 高子	"
"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	二等有功章	"	真島 サク	"	三賀	二宮 タケイ	二等有功章	加治村	真島 サク	"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	真島 サク	"
"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	二等有功章	"	真島 貞子	"	三賀	二宮 タケイ	二等有功章	加治村	真島 貞子	"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	真島 貞子	"
"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	二等有功章	"	神田 新次	"	三賀	二宮 タケイ	二等有功章	加治村	神田 新次	"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	神田 新次	"
"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	二等有功章	"	福地 タツノ	"	三賀	二宮 タケイ	二等有功章	加治村	福地 タツノ	"	三賀	二宮 タケイ	"	加治村	福地 タツノ	"

三等有功章	新發田町掛藏	佐藤 ハマ	三等有功章	新發田町掛藏	三等有功章	五十公野村五十公野	大關 キミエ
"	馬場町	佐藤 キヤウ	"	新發田町	"	新保	小川 信子
"	三ノ丸	齋藤 サク	"	裏町	"	五十公野	田中 秀子
"	三ノ丸	齋藤 ヨネ	"	三ノ丸	"	江口	前田 リウ
"	片田町	近藤 エイ	"	坂井	"	五十公野	小山 セイ
"	材木町	濱崎 キウ	"	下町	"	五十公野	佐藤 スミ
"	三ノ丸	高橋 フエ	"	皆川	"	五十公野	伊藤 純
"	三ノ丸	佐久間 イウ	"	島津	"	五十公野	原 ミチ
"	材木町	伊東 マシ	"	皆川	"	五十公野	村山 ハル
"	新發田町	伊藤 マシ	"	島津	"	五十公野	長島 イワ
"	新發田町	清水 利子	"	島津	"	五十公野	田宮 ヨシ
"	新發田町	伊藤 田鶴子	"	島津	"	五十公野	熊倉 ヒツ
"	新發田町	伊藤 マシ	"	島津	"	五十公野	相馬 ウヤ
"	新發田町	清水 利子	"	島津	"	五十公野	島津 ツネ
"	新發田町	伊藤 田鶴子	"	島津	"	五十公野	高橋 トミ
"	新發田町	伊藤 マシ	"	島津	"	五十公野	本間 ミチ
"	新發田町	清水 利子	"	島津	"	五十公野	遠藤 キツ

中蒲原郡

有功章	住所	氏名
三等有功章	新飯田村	横山 ヨエ
三等有功章	須田村	小林 雪
附加章	須田村後須田	小林 廣枝
三等有功章	須田村後須田	西方 健一
三等有功章	須田村後須田	谷地田 シゲ
附加章	庄瀬村	川又 タノ
三等有功章	庄瀬村	吉田 精一
三等有功章	庄瀬村	眞保 キチ
三等有功章	大郷村字笠巻	外川 ヤス
附加章	太幡新田	遊川 キワ
三等有功章	赤造	保田 ヨシ
三等有功章	大郷	大竹 ハツ
三等有功章	大郷	小柳 ムメ
三等有功章	大郷	高橋 セツ
三等有功章	大郷	吉原 ミサホ
三等有功章	大郷	高橋 ミヨ
三等有功章	大郷	眞柄 レエ
三等有功章	大郷	眞柄 政吉
三等有功章	大郷	高橋 キチ
三等有功章	大郷	田村 ハル
三等有功章	大郷	丸山 キミ
三等有功章	大郷	齊藤 ツル
三等有功章	大郷	眞柄 昌之介

有功章	住所	氏名
三等有功章	築地村	八幡 ノブ
三等有功章	築地村	佐藤 ヒサ
三等有功章	築地村	小田 フデノ
三等有功章	築地村	井上 ノブ
二等有功章	金塚村	白勢 ヨシ
二等有功章	金塚村	白勢 キヌイ
三等有功章	金塚村	白勢 キヨシ
三等有功章	中條町	小坂 銀次郎
三等有功章	中條町	丹 吳 恭
三等有功章	中條町	丹 吳 ヒデ
三等有功章	中條町	丹 吳 ウメ
三等有功章	中條町	奥村 フミ
三等有功章	中條町	渡邊 カネ
三等有功章	中條町	熊倉 サイ
三等有功章	中條町	井上 梅野
三等有功章	松浦村	湯淺 ヒサシ
三等有功章	松浦村	伊花 ハナ
三等有功章	松浦村	渡邊 トシ
三等有功章	佐々木村	市島 チホ
三等有功章	佐々木村	野口 ノブ
三等有功章	佐々木村	野本 ノブ
三等有功章	佐々木村	三田村 スミ
三等有功章	丹 吳 ヨキ	丹 吳 ヨキ
三等有功章	佐藤 ノイ	佐藤 ノイ

三等有功章	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	三等有功章	附三等有功章
菅名村	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	能代	五泉町
羽田ムツ	木村アツ	小出ヨミ	小黒ナオ	香場ハツ	市川イツ	井ノイ	酒井ハ	横野ヤヘ	塚野八重子	齋藤ヨシミ	木村チソノ	長谷川太郎	吉田幹子	吉田和	近藤タカ							
"	"	"	三等有功章	三等有功章	三等有功章	三等有功章	"	"	附三等有功章	三等有功章	三等有功章	三等有功章	附三等有功章	三等有功章	三等有功章	三等有功章	三等有功章	三等有功章	三等有功章	三等有功章	三等有功章	三等有功章
"	"	"	村松町	川内村	十全村	官寄上	"	"	七谷村黒水	大蒲原村笹野町	木越	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
伊藤テル	笠原フジエ	茂野シン	長崎信吉	増田クニ	神保多工麿	中野アヤ	鶴巻リイ	山崎武二郎	山崎ハナ	小島一	戸井出金蔵	松尾ユキ										

"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	三等有功章
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	金津村
林五十嵐芳美節	伊藤哲子	萬羽哲子	本間ヨウ	本間ムラ	土田ヨシ	本間建彌	伊藤ハル	中野タミ	渡邊千代	石山ミキ	石澤ハギ	佐久間トメ	新保スミ	大花ツルエ								
"	附三等有功章	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	新編村船越
"	五泉町吉澤	能代	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	下新
田島スツ	小野内英	關塚イサキ	吉田八千代	吉田美婦	井上美婦	小川キエ	佐藤コト	吉田サトル	木村サトル	關キソノ	吉田マコ	近藤マコ	佐藤静子									大關
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	下新
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	羽下

三等有功章	大江山村大瀧	官路留三郎	三等有功章	長瀧	岩橋ミツ
附三等有功章	石山村長瀧	小澤ヨシ	三等有功章	鴉又	石坂ハル
三等有功章	馬越	加賀田ミツ	三等有功章	"	田村真恵子
三等有功章	姥ヶ山	櫻井トラ	三等有功章	"	田邊チサ
三等有功章	長瀧	小林ケイ	三等有功章	"	渡邊スイ
三等有功章	姥ヶ山	高橋ソノ	三等有功章	"	進藤キシ
三等有功章	西山ニツ	宮澤イツ	三等有功章	"	關口キソ
三等有功章	石山	青木ミツイ	三等有功章	"	渡邊スイ
三等有功章	中野山	渡邊スイ	三等有功章	"	鈴木貞
三等有功章	柴口	關口スイ	三等有功章	大形村海老ヶ瀧	渡邊ハマ
三等有功章	鴉又	阿部トイ	三等有功章	"	久代スセ
三等有功章	上木戸	登島トシ	三等有功章	"	齋藤チヨ
三等有功章	紫竹	近藤キソ	三等有功章	"	渡邊トエ
三等有功章	石山	山田ラク	三等有功章	"	佐藤三佐男
三等有功章	西山ニツ	宮澤マカ	三等有功章	"	鳥名彌忠太
三等有功章	"	渡邊タカ	三等有功章	"	櫻井ミユキ

一等有功章	會野木村依柳	小林スイ	三等有功章	"	坂井マタ
附三等有功章	鍋湯新田	塚田ツギ	三等有功章	"	藤田ジュン
三等有功章	"	小林クニ	三等有功章	"	島津ジュン
三等有功章	"	里村リツ	三等有功章	"	佐藤脩造
三等有功章	會川	渡邊リツ	三等有功章	"	田中タノ
三等有功章	天野新田	小野塚キイ	三等有功章	"	谷川タツノ
三等有功章	"	本間ヤノ	三等有功章	"	古寺シン
三等有功章	嘉木	鈴木フヨ	特別有功章	新津町	桂エツ
三等有功章	鍋湯新田	平井タケ	附一等有功章	"	石崎ハツ
三等有功章	祖父與野	柏原ミウ	附一等有功章	"	桂チセ
三等有功章	"	伊田キシ	二等有功章	"	高橋至
附三等有功章	兩川村和田	田中晴江	三等有功章	"	桐生安藏
三等有功章	割野	石附キイ	附三等有功章	"	鈴木寅五郎
三等有功章	"	小出マサイ	附三等有功章	"	桂タマ
三等有功章	酒屋	米田トシ	附三等有功章	"	丸山禪龍

三等有功章	附加章	東金澤	田家	萩川	古田	東金澤	古田	善道	善道	古田	東金澤	明間	神尾	神尾	竹田	土屋	松岡	吉川	藤井	遠藤
忠三郎	昌平	吉平	格衛	志津	チヨ	比三二	かつ	ツカノ	マカネ	マチ	ミツ	千代	ミツ	志津	チヨ	タシ	格衛	吉平	昌平	忠三郎
三等有功章	新津町	田家	田家	田家	田家	田家	善道	善道	田家	田家	田家	田家	田家	田家	田家	田家	田家	田家	田家	田家
山田	藤井	甲田	久住	鈴木	奥田	吉川	田澤	黒崎	小出	森	藤	宮尾	芥川	黒崎	齊藤	五十嵐	五十嵐	誠	司	五十嵐
エサオ	ノブ	ツギ	ツギ	フミ	ハツ	かね	よき	キイ	キク	フサ	ムサ	登	イマ	コト	政平	クニ	クニ	平	誠	誠

三等有功章	萩川村	吉川	鈴木	石川	大島	本間	松岡	松岡	石川	栗原	宇野	荻部	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	清野	清野	清野	清野
吉次郎	清太郎	ミセ	トシ	ヒシ	ヒシ	ヒシ	ヒシ	ヒシ	ヒシ	ヒシ	ヒシ	ヒシ	マキ	マキ	マキ	マキ	ツネ	ツネ	ツネ	ツネ
三等有功章	袋津	早通	川東村	川東村	川東村	川東村	川東村	川東村	川東村	川東村	川東村	川東村	白井村	白井村	白井村	白井村	大江山村	大江山村	大江山村	大江山村
伏見	枝並	菊地	馬場	村木	丸田	小川	藤田	佐藤	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	星野	星野	星野	星野	宮路	宮路	宮路	宮路
レン	コト	オト	ン	ナ	ワ	ナ	キ	子	クニ	クニ	クニ	クニ	九郎	九郎	九郎	九郎	留三郎	留三郎	留三郎	留三郎

西蒲原郡

有功章	住	氏	名
一等有功章	坂井輪村大字平島	筒井	クノ
附加有功章	新通	今泉	直二
附加有功章	寺尾	岡上	枝
三等有功章	青山	廣澤	久子
	平島	筒井	銀次郎
	亀貝	坂井	セシ
	小針	渡部	ミブ
	青山	長谷川	ツギ
		風間	キソ
三等有功章	坂井輪村青山		
	坂井		
	龜貝		
	新通		
	寺尾		
		石川	ハル
		藤田	ア
		田中	ヤ
		小山	キヨ
		吉田	カネ
		渡部	ノ
		渡部	八
		渡部	ノ
		田村	タ
		前田	ト
		赤原	ハ
		樋口	ナ
		野島	ノ
		丸山	キ
		風間	ウ
		鈴木	キ
		鈴木	メ
		伊藤	モ
		宮下	尾美和
		濱倉	マ
		筑波	ク
		大原	ハ
		吉田	ヨ
		出来島	ト
		樋木	ト
		古俣	リ
		古俣	ト
		古俣	ト
		苦杉	チ
		飯田	ノ
		神成	二三四
		室塚	ヤ
		福田	ハ
		青池	ウ
		佐藤	ミ
		佐藤	ネ

三等有功章 坂井輪村

三等有功章	坂井輪村	石川	三平
		石渡	コマ
		風間	トリ
		西山	ツカ
		平山	ヨセ
		渡部	タカ
		野島	ヌイ
		田中	シダ
		南波	イネ
		石川	カノ
		稲田	マキ
		筒井	タケ
		小林	ミヨ
		久保田	ハル
		中山	スイ
		村山	タセ
二等有功章	内野町内野	伊藤	モト
附加有功章		宮下	尾美和
二等有功章		濱倉	マキ
附加有功章		筑波	クマ
三等有功章		大原	ハギヨ
		吉田	ヨリ
		出来島	ト
		樋木	ト
		古俣	リ
		古俣	ト
		古俣	ト
		苦杉	チ
		飯田	ノ
		神成	二三四
		室塚	ヤ
		福田	ハ
		青池	ウ
		佐藤	ミ
		佐藤	ネ

三等有功章	照田ハナ	三等有功章	漆山村	田中ヨセ
"	瀧澤喜三郎	三等有功章	道上村	如澤巖
"	堀松藏	"	"	山田太一
三等有功章	草野ミツ	三等有功章	松長村	松井キシ子
"	佐野ハナ	附加章 三等有功章	燕町	霜島ミヨ
三等有功章	味方村	"	"	中村マキ
"	月潟村	"	"	丸山キイ
三等有功章	"	"	"	野島ハク
"	"	"	"	七里キク
一等有功章	小吉村	"	"	高橋キミ
三等有功章	"	"	"	速藤イシ
"	"	"	"	小柳ウメ
"	"	"	"	柳原ノブ
"	"	"	"	明道ミヨ

南蒲原郡

三等有功章	平出浪井	一等有功章	見附町	田卷昌子
"	遠藤マヌ	附加章 二等有功章	田上村	荒木ミホ
"	長谷川常太郎	二等有功章	加茂町字上條	關マキ
"	金子藤藏	"	田上村字糸ヶ崎	高橋ユキ
"	野島米作	"	保明	小島アサノ
"	高橋平左工門	"	羽生田	今井ミサホ
"	加藤孫作	"	新潟村	大橋ノブ
"	大泉ハル	"	葛巻村字傍所	遊谷智恵子
"	深海口タ	附加章 三等有功章	大崎村	渡邊イシ
別特有功章	田上村字田上	"	下條村	五十嵐チヨ
有功章	住所	"	加茂町字加茂	皆川トヨ

三等有功章

加茂町字加茂

田上村

見附町字本町

葛巻村字傍所

中島村中野西

井栗村

大崎村

吉田ミヨ

皆川マツ

佐々木ヤス

高橋ウ

吉澤ヨシ

浅野ケイ

魏振泉

丸山ヨシ

阿部ウメノ

桑原シウ

渡邊キミ

小出明司

桑原テイ

大溪イヨ

荒井トネ

三等有功章

下條村

加茂町字加茂

渡邊タミ

五十嵐トハ

市川リツ

渡邊ミヨ

眞柄ヨシ

關ハル

小林ツナ

坂井タズ

井上ハツ

皆川クニ

渡邊シヅ

川口キミ

皆川アヤ

助川キヨ

石川ヨシ

間野シ

三等有功章

加茂町字上條

放口
上條

田澤ナカ

古川マモ

中野シゲ

小林リイ

田下ミキ

丘山キ

阿部タイ

遠藤省一

眞柄キミ

遠藤政雄

川崎カズ

富樫金作

川崎ヨシノ

渡邊スエ

今井マユミ

伏見ヤヨヒ

熊倉ヨシ

三等有功章

鹿峠村江口
今町

本成寺村字長嶺

新潟村字小栗山

新潟村字片桐

見附町字嶺崎

本町

新田

本町

仁嘉

新町

仁嘉

番場マツミ

諸橋榮

蒲澤チャウ

村上晋一

種田カツ

佐野ウタ

榎本ヨシ

佐藤三和

清水ミタ

加藤テイ

山谷奥一

山田ケイ

島田ケイ

坂田セイ

島田キイ

岡田ゲン

岩坂嘉以

島田フミ

三等有功章	見附町字仁嘉	山田ミズ
"	"	齋藤エキ
"	"	源川テ
"	"	笠松モトル
"	"	富所順一
"	"	近藤マツ
"	見附町字新町	佐野イッ
"	本町	佐藤ヒロ
"	庄川新田	佐藤ヤウ
"	本町	小宮清
"	嶺崎	小宮三井
"	本町	浅野カノ
"	嶺崎	小坂井サワ
"	見附町字本町	大川戸成二
"	"	加藤ミツ
"	"	金井ミユ
"	"	間野テフ

三等有功章	"	羽下ツタ
"	"	山崎テフ
"	"	大久保ナカ
"	"	安井イッ
"	葛巻村字傍所	滋谷キミ
"	福島	清水ナミ
"	"	清水貞
"	中ノ島村末寶	阿部タイ
"	中ノ島	西木キサ
"	杉ノ森	羽賀英
"	中ノ中	大久保ノブ
"	大面村	石綿勲次
"	"	星野幸司郎
"	"	宮島市太郎
"	"	金子ミネ
"	"	片野タツ
"	長澤村	横山イト

三等有功章	長澤村	佐藤トヨ
"	大島村	村上虎吉
"	加茂町字加茂	市川浩二郎
"	上條	丘山ヨネ
"	加茂新田	大野ハル
"	狭口	廣瀬セイ
"	森町村手ノ尾	熊倉キクイ
"	今町	服部松尾
"	"	今井ミイ
"	中ノ島村中ノ西	佐々木ヤイ
"	中條	本間タマ

東蒲原郡		住所	氏名
有功章	住	東川村字東山	石川 義太郎
一等有功章	所	日出谷村	田崎 久美子
二等有功章		津川町	坂内 清
附 三等有功章		揚川村	竹村 武松
附 加 章		津川町	神田 喜代作
三等有功章		津川町	佐藤 ヒサ
附 加 章		津川町	玉木 キヨ

刈羽郡

有功章	住所	氏名
一等有功章	高田村新道	飯塚貞子
附加有功章	高田村新道	飯塚安意
"	四中通村	桑野シヅ
"	石地町石地	内藤京子
"	"	内藤久一郎
一等有功章	内郷村	田中キン
二等有功章	田尻村田尻	柴野ミズ子
附加有功章	田尻	村山三芳
附加有功章	中里村相野原	田中吉野
"	北崎石村	廣川スミ
"	内郷村	月橋ミサ
三等有功章	高田村横山	田中セツ
"	"	内山美穂
"	高田村新道	飯塚好子
"	"	金子益尾
"	"	中村クマ
"	"	中村慶明
"	野田村字野田	飯塚要助
"	野田村字女谷	金子芳
"	鶴川村女谷	布施トク
"	高柳村山中	佐藤栄三
"	岡田	大塚フサ
"	南崎石村石曾根	石塚常栄
"	"	石塚カメノイ

三等有功章

津川町	鈴木キン
"	石川ハナ
"	齋藤ハツ
"	杉崎ヨシノ
兩鹿瀬村	江花重正
兩鹿瀬村向鹿瀬	波田野京太郎
鹿瀬	伊藤フデ
"	大江政英
日出谷村	波田野ソヤ
"	遠藤トク
"	遠藤トシ子
"	遠藤リイ子
"	田崎花子
豊實村字實川	五十嵐ブン
豊實村豊田	猪俣タカ
"	吉田トイ
小川村字三郷	波邊ツル
三等有功章	上條村字兩郷
"	西川村字日野川
"	廣谷
"	東川村字三寶分
"	七名
"	揚川村
"	三川村
"	津川町
伊藤イク	
長谷川イノ	
江川ミネ	
渡部ハナ	
渡部ハナ	
渡部キイノ	
石川セツ	
渡部茂一郎	
土肥ウメノ	
齋藤一蔵	
莊司喜一郎	
寺田ヤス	

三等有功章

柳 碧 榮	金子 清一	小林 チトセ	松木 ヨク	眞貝 タイ	眞貝 源市郎	飯田 リヤウ	木村 ヒサ	佐藤 ハツノ	關 ハマ	小林 サダ	白井 朝子	庭山 ハル	和田 幸平	笠原 男	佐藤 ヤマ子	田中 トメ
-------	-------	--------	-------	-------	--------	--------	-------	--------	------	-------	-------	-------	-------	------	--------	-------

三等有功章

五十嵐 午三郎	村山 ヤチ	木村 照子	間島 俊一	高橋 ミス	藤巻 禮子	村山 剛榮	高橋 美津江	入西 チイ	片桐 タカ	片桐 庫子	山田 初衣	竹田 上路	月橋 イシ	小野 ツギ	柳賀 シツ	小野 眞吾
---------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

三等有功章

阿部 新七	品川 カツ	本間 八重	吉田 クン	田村 喜久代	石黒 タダ	木村 勇	山崎 彌三八	高橋 福治	安澤 八重	渡邊 シゲ	伊藤 寛平	伊比 シヅ子	古川 チサ	大野 イチノエ	鈴木 ミエ	寺澤 久代
-------	-------	-------	-------	--------	-------	------	--------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	---------	-------	-------

三等有功章

田中 ウタ	若月 育	伊比 新市郎	大谷 ブン	和田 タイ	菊入 ヒサイ	鈴木 サチ	田村 ハナ	田村 良	猪股 ミエ	池島 紋次郎	江部 清野	笠井 ヒヲ	人我 ヤス	山田 ヨネ	高野 敬一	眞貝 關
-------	------	--------	-------	-------	--------	-------	-------	------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	------

三等有勋章

黒條村下下條
黒條村高見
山通村字高畑
栖古村字中澤
成願寺
山本村麻生田
水元
浦瀬
山本村乙吉
浦瀬
新組村字福島
福井
中村古新田
福井

織田イシ
若月クマ
大關ツネ
櫻井アヤ
山代ヨキイ
水澤マキ
杉山チヤ
佐々木マツイ
殖栗ユキ
關根ナヲ
菊地フサ
武桶フサ
佐々木寛二郎
渡邊ユキ
小林師松
佐藤ミユ
安藤マス

三等有勋章

福島
北谷村
北谷村榎澤
枋尾町
下鹽谷村
上鹽谷村

星野ハツノ
小川トリ
田伏タヅ
栗林ヨシ
佐藤末吉
笹川サダ
田崎レン
酒井リヤウ
今成貞子
那須ムラ
田村スイ
八木ハルノ
山田コト
山井菊野
杵淵兵七
藤田フミ
齋藤トミ

三等有勋章

荷頃村字輕井澤
比禮
太田村
東山村
升澤村
六日市村
福戸村大荒戸
北谷村明品
枋尾町

茨木トシ
佐藤ヒサ
渡邊トク
佐藤ミヨシ
石田賢一
劍持マサ
劍持アサ
峰村トキ
小幡キキ
星野キン
小池多郎吉
古川キヨシ
田中ミヨ
鈴木キヨ
吉野キセ
南波カジ
佐藤スズ

三等有勋章

東谷村
荷頃村字北荷頃
住所
一等有勋章
與板町字與板
二等有勋章
片貝村字片貝
來迎寺村字神谷
深才村字大島
島田村小島谷

三嶋郡

大崎トウ
諸橋喜久
諸橋キミ
氏名
名倉一雄
大塚みき
佐藤秀子
大塚フジ
高橋蒲知
柳澤ムネ
久須美ケイ

寺泊町字寺泊	大平廣彌	附三等有功章	出雲崎町	勝井ツタ
片貝村字片貝	山口孝司	三等有功章	寺泊町字寺泊	大越禮一郎
來迎寺村字來迎寺	藤井登		片貝村字片貝	佐藤國二郎
深才村字大島	江口義輝		片貝村字高梨	堀井繁磨
親澤	遠藤倉治		片貝	勝又森一郎
日越村字高瀬	小野塚護一郎		高梨	内藤謙治
上除	立川ハルノ		來迎寺村字飯島	高橋谷五郎
嘉多	片桐道		岩塚村字岩田	金澤義介
官本村字東方	田中賢治郎		飯塚	金安ノフ
關原町大字西關原	廣川並枝		岩田	山本イサ
脇野町字吉崎	川口光子			金子フミ
奥板町字奥板	高木信吾			内藤ツヨ
	樫田千之			金子キタ
	食品ミキ			平澤成孝
	平澤キヨ			

深才村字親澤	高頭花意	三等有功章	官本村字官本	荒木英男
深才村字上高岡	高頭レイ		東方	山岸タケ
權田	田中テフ		大積村字大	堀ミヨ
深澤	遠藤トミ		居下	堀政良
大島	織田銑子		關原町	脇屋レイ
深才村字大島	平野善三郎		關原町西關原	丸山彦三郎
日越村字上除	岡村典介		關原	佐藤秀三郎
喜多	片桐クメ		關原町西關原	近藤サダ
上除	田中フミ		關原	川口キヨ
	片桐ムツ		關原町關原	近藤雪子
	小片タカ		西關原	木村ツル
	中村嘉三次		下除	高木ムツ
王寺川村	高橋彌吉		關原町高頭	外川イシ
官本村字官本	布川キタ		字下除	外川英子
	荒木トシ			升岡喜作
	松本シ			小林吉三助
官本村字東方	廣川ノイ			

三等有功章

關原
日吉村七日町
日吉村雲出
鳥越
雲出
鳥越
臨屋町字吉崎
大津村
與板町字與板
與板町字與板

野口 秀一
山田 千鶴
山田 とも
渡邊 フジ
齋藤 虎八
渡邊 彌忠治
松井 秀治
田口 サウ
安達 イネ
丸山 榮子
小林 利三郎
平原 セツ
佐藤 シヅイ
小原 忠篤
平原 善一郎
倉品 廣吉
丸山 モヒ

三等有功章

大河津村
大河津村
萬善寺
馬越
桐島村字島崎
荒卷
島田村坂谷
小島谷
高月

藤田 ハマ
久住 ノブ
石丸 イワ
高橋 ヨシ
石丸 ヤイ
藤田 タウ
藤田 善大夫
竹内 シゲ
山田 源吾
五十嵐 直策
藤井 チヨノ
早川 清
山田 彦榮
池浦 ノリ
池浦 ッネ
久須美 ヨシ
山口 由郎

三等有功章

若野浦
西越村澤田
寺泊町字寺泊
寺泊町字松田
寺泊町字寺泊
塚山村
宮本村字東方
寺泊町字松田
寺泊

關川 吾一郎
小林 榮太郎
大平 廣彌
大平 ムラ
近藤 ムツ
窪澤 キヤウ
武澤 茂一郎
五十嵐 善吉
高橋 利一郎
石坂 ハル
武澤 茂一郎

北魚沼郡

有功章
一等加章

住所
小千谷町

氏名

廣瀬村字田尻
廣瀬村字並柳

島田 博
島田 アイ
田村 ジュン
酒井 綾子

二等有功章

小千谷町

城川村千谷川
廣瀬村字並柳

淺田 ッネ
西脇 トシ
丸山 忍
關矢 千枝子
關矢 由美子

二等有功章

葦神村

星野厚平

三等有功章

東吉谷

谷口萬三助

附三等有功章

小千谷町

田中リン

城川村字山谷

中野カツミ

廣瀬村字田尻

酒井操

千谷川

星野美壽子

三等有功章

小千谷町

西協久子

川口村

古田島アキ

竹内愛子

米岡ヨネ

堀之内町字堀ノ内

岡村ナカ

井口律重

山本恵子

廣瀬村字並柳

森山カウ

新田クニ

渡邊ルイ

廣瀬村字田中

森山カズ

西脇ヨリ

渡邊ユキ

須原村

關矢千枝子

升村トシ

吉谷村字四ツ子

小出町

關矢由美子

渡邊セツ

佐藤良策

東中

佐藤ヒロ

三等有功章

湯之谷村

星松枝

附三等有功章

上田村字長崎

阿部源作

山邊村

橋新之丞

湯谷

長尾サダ

千田村

關スネ

葦神村

貝瀬ケイ

入廣瀬村

新保喜三太

湯澤村

樋口富

小出町

大島重治

石打村吾澤

高橋小百合子

柳澤ミキ

高木ケン

關山

八木ヤス

石打村一日市

關アキ

石打村一日市

田中キヨ

廣澤町字廣澤

井口アキ

廣澤町字廣澤

井口アキ

中之島村

大塚みす

中之島村

大塚みす

阿部政子

青木ツネ

中之島村

阿部政子

上田村字長崎

梅澤ハツ

上田村字長崎

長尾ヒミ

南魚沼郡

附三等有功章

石打村大澤

梅澤ハツ

附三等有功章

上田村字長崎

長尾ヒミ

三等有功章 附加章	大濱村	山田 コウ	三等有功章	"	内藤 ふゆ
三等有功章	"	大島 クイ	三等有功章 附加章	吉川村	小池 賀子
三等有功章	"	平野 ヤス	三等有功章	"	小田 スエ
三等有功章	"	太田 ヨイ	三等有功章	"	小山 芳
三等有功章 附加章	明治村牛島	宮川 ヌイ	"	"	小池 テイ
三等有功章	下増田	布施 テツ	三等有功章	源村	横田 キク
三等有功章	森本	大竹 テイ	二等有功章	黒川村	藤野 ミサヲ
三等有功章	大浦生田	白田 タイ	三等有功章	和田村木島	宮島 義一
三等有功章	旭村	大瀧 ミチ	三等有功章	西田中	藤本 彌一
三等有功章	"	春日 賢随	"	木島	清水 郡吾
三等有功章	下黒川村	大瀧 ヤス	"	寺町	市橋 ミヨシ
		三五 トシ	三等有功章	百上町	小林 かず子
					市川 ヤイ

三等有功章	脇野田	長谷川 シサ	三等有功章	新井町	大塚 タツ
三等有功章	島田	西片 富貴子	"	"	佐藤 トシ
三等有功章	島田上新田	笠原 ヤス	"	"	池田 マツ
三等有功章	名香山村	山川 イシ	三等有功章	斐太村梨本	増井 貞
"	"	若尾 たみ	"	"	松浦 ミヨシ
"	"	牧野 なべ	一等有功章 附加章	直江津町	久保田 齊一郎
"	"	長崎 ヒサ	附加章	"	川合 セイ
"	"	土井 シダ	三等有功章	"	藤塚 正一
三等有功章	矢代村志	宮下 ハル	"	"	石塚 ナカ
三等有功章	"	岡田 チヨ	"	"	土井 ソウ
三等有功章	中郷村	田中 チヨ	"	"	高橋 イソ
三等有功章	"	松本 治郎作	"	"	川合 さく
三等有功章	"	松原 サト	"	"	金谷 たい
三等有功章	二本木	細川 キン	三等有功章	"	岩崎 水